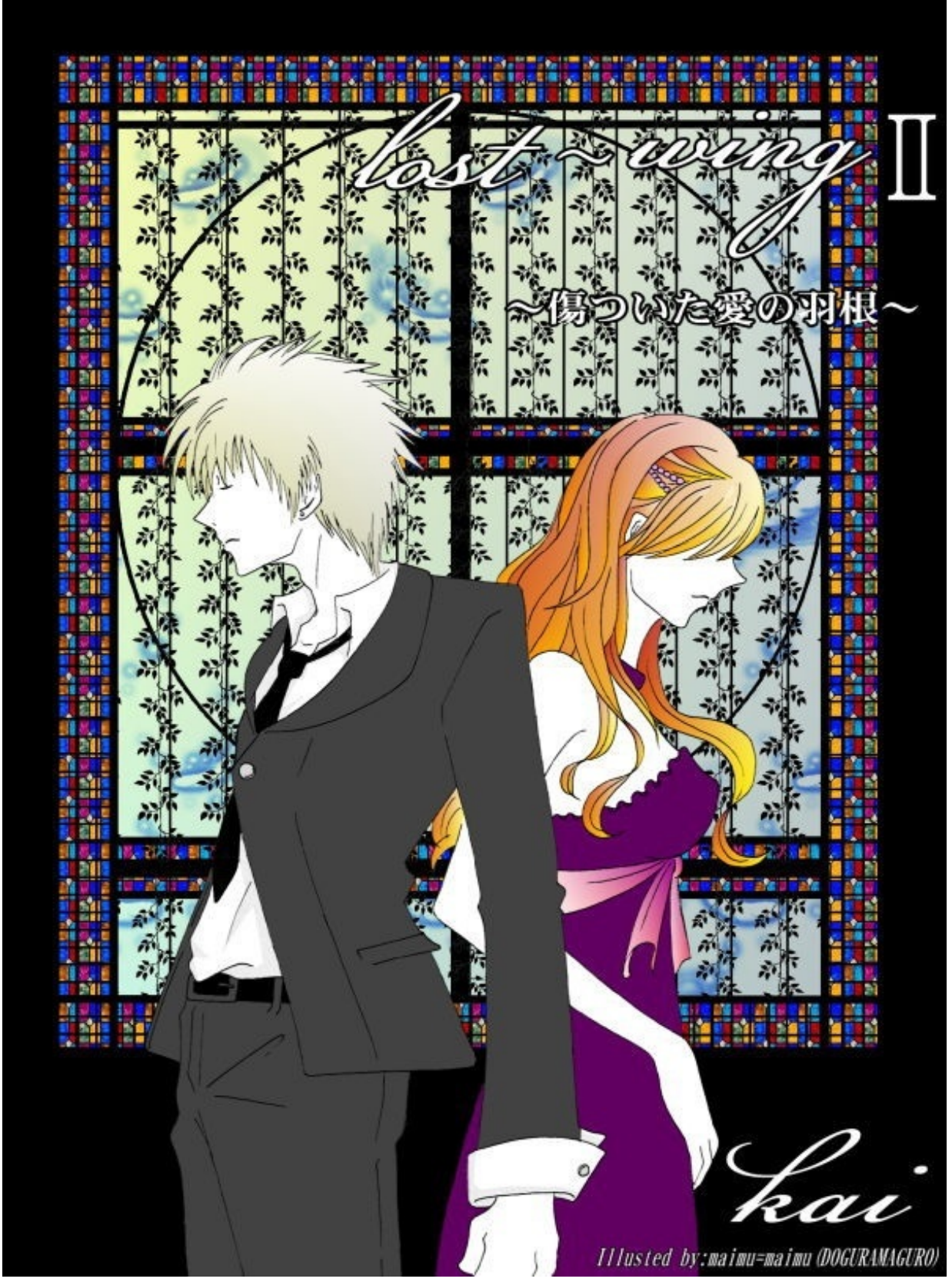
lost~wing
II
~傷ついた愛の羽根~
kai
Illusted by:maimu=maimu (DOGURAMAGURO)

Products

◇**All story making & written by** Ｋａｉ.Ａ
◇**Illusted by** ＤＯＧＵＲＡＭＡＧＵＲＯ

lost wing～傷ついた愛の羽根～(Ⅰ)・・・《第１～１１章》
⇒⇒http://p.booklog.jp/book/50676

Intoroduction

ー登場人物紹介ー

翼(24)
…本編の主人公。一見冷淡な性格で人付き合いが苦手だが、基本的に素直。ある事情で、自分自身を証明するためにホストへの道を歩み始める。元会社員。

羽月(19)
…もう一人の主人公。明るく元気で、誰とでも仲良くなれる。**186**センチの高い身長と金髪・京都訛りが特徴。ある人物との再開を目的で上京を決意。

愛菜(25)
…美と品性を兼ね備えたカリスマキャバクラ嬢。天馬とは独立前からの付き合いで、【**Club Pegasus**】の常連。翼とある人物の面影を重ねている。

天馬(27)
…カリスマ性溢れる【**Club Pegasus**】代表取締役社長。厳しいが従業員思いで、翼や羽月の成長を見守る。

翔悟(22)
…【**Club Pegasus**】の**No.1**ホスト。容姿端麗で、何でも自分が一番でないと気が済まない性格。

光星(25)
…【**Club Pegasus**】**No.2**ホスト。黒い長髪が特徴。非常に攻撃的で傲慢な性格。後輩や新人に高圧的。

由宇(20)
…【**Club Pegasus**】**No.3**ホスト。明るい短髪が特徴。冷静で非常にドライな性格。

佐伯(28)
…【**Club Pegasus**】の店長。翼たち新人ホストを厳しく指導する。

美空(19)
…母親とともに小料理屋で働く心優しい少女。とあることが原因で声が出ない。

梨麻**(22)**

…【**Club Pegasus**】の新規の客。服装は派手だが、性格はおとなしめ。風俗で働く。

12-1

翼と羽月の二人が入店してから三ヶ月余りー

暦は四月・季節はすっかり春となり、【**Club Pegasus**】も新人が次々と入るなどして、また新たな盛り上がりを見せていた。
翼・羽月の両方とも、ホストとして板についてきたのか確実な成長を遂げ、見た目も以前とは全く違うくらいのオーラのある雰囲気を漂わせていた。
そんな中、無事に当月の締日営業を終え、店ではミーティングによるランキングの発表の時となっていた。

翼達ホストは、息を呑むように緊張感を抱きながら、静寂するその場に留まっていた。

「それじゃあ、上位５人の発表をしていく！」
天馬の言葉に、ホスト全員が耳を澄ます。
「**No.1……**翔悟！」
その瞬間、「おぉ〜！」という大きなざわめきとともに多大な拍手が巻き起こった。
「翔悟、今回もよくやったな」
天馬がそう言うと、翔悟はフッと笑いながら無言で頭を下げる。
「さっすが翔悟さんだよな**…**！」
「あぁ**…**今うちの店であの人に勝てるのなんていねぇよ」
ホスト達がそう囁く中、ナンバー発表は次に差し掛かっていた。
天馬は再び口を開く。

「続いて**No.2……**由宇！」
「おぉ〜由宇さん！」
No.2として名前を発表されたのは、普段なら確実に入っているであろう光星ではなく、由宇の方だった。
「なっ**…**！？」
本人が最も意外だったのか、光星は眉間にシワを寄せながら絶句する。
「由宇、頑張ったな！」
「ありがとうございます、社長」
自分を褒める天馬に対し、由宇は深く頭を下げる。

「続いて**No.3……**光星！」
続けて名前を挙げられたのは光星だった。
今まで**No.2**として君臨してきた彼の今の表情は、明らかに不満に充ちたものだった。
しかし、その場で何かを言うことはせず、にわか嬉しそうする由宇に横目で視線を送っていた。
天馬は発表を続けた。

「よし、続いて**No.4**は**……**」
天馬は成績表に目をやると、口元をニヤリと動かしその該当するホストに視線を注いだ。

『一体誰が？？』
誰もがそう思う中、考える時間もないうちに、そのホストの名前が彼の口から発表された。

「お前だ**……**翼！」
周囲が一瞬のうちに沈黙した。

『ありえない』

そこにいるほとんどの人間がそう思った。
あの翼が、仕事もできず失態を繰り返していたあの翼が、と。
しかし、現に翼は愛菜を最初の指名客とした二ヶ月前から、少しずつではあるが確実に指名客を増やしていき、売上を上げていっていた。
今や十人を軽く超える指名を持っている彼のことを、誰もが認めざるを得ない現実であったが、何より翼自身驚きつつも心のどこかで今回の営業に手応えを感じていた。

翼は立ち上がると、ボーナス袋を手に持って待つ天馬のところにゆっくりと歩いていった。
「翼、よくやったな！」
天馬は、まるで我が子を誇らしく褒めたたえるように翼に囁いた。

「ありがとうございます」
翼は天馬からボーナス袋を受け取ると、深く頭を下げる。
その手にあるボーナス袋をクシャッと握る彼の手は、僅かに震えていた。
「これからもがんばれよ」
「はい」
力強い天馬の眼差しをその瞳で受け取ると、翼はすぐに座っていた席に戻っていく。

「翼、おめでとう！」

翼の隣に座る一人のホストが、彼に声をかけた。
「えっ？」
突然のことに、翼はキョトンとする。
「翼、お前すげぇな！まさかトップ５の仲間入りをするなんてさ！」
「翼さん、やりましたね！」
「４位をまさかお前がなぁ**……**」
周りにいるホスト達が、次々と翼に祝いがてらの言葉をかけていく。

「あ、いや**……**。ありがとう」
翼は冷静に振る舞いながらも、彼らに礼を返した。
しかし、心の中で今まで感じたことのない高揚感が満ち始めていた。

「次！**No.5……**羽月お前だ！！」
翼の次のランクに名前を挙げられたのは、羽月だった。
「うぉっ」と驚きの声を上げながら立ち上がると、そそくさと天馬のもとへと駆け寄った。

「羽月、走らなくてもいいぞ」
天馬が笑いながら羽月をたしなめる。
「あぁっ、すんません！」
「相変わらず元気だなお前は。とにかく初のトップ５入りおめでとう！！」
「あ、おおきに**……**ありがとうございます社長！」
ボーナス袋を受け取った羽月は、深々と３回も頭を下げた。

「よしっお疲れぃ！！」
「お疲れッス！！」
天馬の声に、ホスト全員が元気に応える。

「みんな今回はよく頑張った！この数ヶ月で、店はどんどん盛り上がってるし、みんなの力もさらに上がってきた！来月はさらにもっともり立てていってくれ！俺からは以上だ！！」
「ハイッ！！」
「じゃあ解散っ！」
「お疲れ様っしたぁ！！」

挨拶も早々に、【**Club Pegasus**】の面々は、その月の締日をそれをもって無事に終えていった。

「さてと……」
翼は疲れた体を鞭打って起こすように立ち上がると、直ぐさまエントランスの方へと歩いていった。

「翼くんっ！」
羽月が翼のもとに笑顔で駆け寄ってきた。
「翼くん、お疲れ様ぁ！あとお互いに、おめでとうやなぁ！」
「あぁ、おめでとう」
「なぁ、早速これから楓さんとこに飲みに行くんやろ？」
「あぁ、よくわかったな？」
「だって先月の締日の後も行ったやん！なぁ、今日も二人で打ち上げしようや」
「あぁ、そうだな」
「もう！翼くん何でそんなテンションやねん！」
相変わらずテンションの合わない会話をしつつも、翼と羽月はこの後の行動を共にすることにした。

「よっしゃ行こう！」
二人がエントランスのエレベーターに向かおうとすると、その前に突然のように険しい形相で睨み付けてくる光星が立ちはだかった。
彼の背後には取り巻きのようなホストが二人ほどついて、同じように翼を睨んでいる。
翼はそんな表情の彼を無言で見つめる。

「何です、光星さん？」
翼がポツリとそう言うと、光星はキッと噛み締めた歯を剥き出しにした。
隣にいる羽月は、オロオロしながら二人を交互に見回す。

「ケッ、行くぞ」
光星はそう吐き捨てると、自分の背後にいる二人を連れてエレベーターの中に入っていった。

「翼くん……」
「ん？」
「何や光星さんめっちゃ機嫌悪かったなぁ。俺、また何かあるかってドキドキしたわぁ」
「大丈夫だろう。いくらあの人だってさ」
「……そうかな」
「行こう、気にしてたってしょうがないさ」
【Pegasus】の中で一際気性の激しい光星のさっきのあの行動が内心気になりつつも、翼は気に止めまいと羽月に振る舞った。

「さ、行こう」
「そやな。じゃあ早く楓さんとこ行こう！」
二人は、先程のことを忘れんとせんばかりにエレベーターに乗り込んでいった。

「よっ、お疲れ様っ！」
翼と羽月の二人がエレベーターをおりると、ビルの前に立っていた一人の女性が声をかけてきた。
「愛菜」
「愛菜さんっ！」
二人の前に現れたのは、愛菜だった。
ピンクのスプリングコートにデニムのミニスカート・白いブーツを身に纏った彼女は、いつもの大人っぽい雰囲気とはまた違うかわいらしさを煌めくように放っていた。

「どうしたんだい？愛菜」
翼がそう言うと、愛菜はニッコリしながら答えた。
「どうしたんだはないでしょう？トップ５に入ったんでしょ、翼。天馬に聞いたわ、よくやったわね！それに羽月くんも！」
嬉しそうな愛菜の笑顔に、羽月は照れを見せる。

「いや～光栄やなぁ、愛菜さんにほめてもらえるなんて！」
「フフッ☆あれ？翼は嬉しくないのぉ？」
「えっ？いや、嬉しいよ」
「そうかしら？何か浮かない顔してるわね」
「あ……いや、そんなことは無いんだ。ただ、まだ実感がなくてさ」
嬉しそうに照れる羽月をよそに、翼は実感のないせいかその嬉しさをうまく出せずにいた。

「そうゆうところ、翼らしいって言えばらしいわね。あ、ちょっと聞きたかったんだけど、これから空いてる？ちょっとお祝いしてあげようと思ってさ」
「えっ？」
「アフター、そういえば私一度も翼にしてもらったことないんだけどなぁ」
どことなく甘えるような愛菜の言葉に、翼は口ごもりながら羽月の顔を見た。

「あっ、翼くん、俺とのことなら今日はえぇよ。また後の日でもえぇし、今日は愛菜さんについたってや」
「だ、だけど」

「えぇって翼くん、お客様は大切にせなあかんでぇ！」
明るく話す羽月を見て、愛菜は首を傾げた。

「翼、もしかしてこれから二人で予定してたの？」

「あ……いや、まぁー」
「えぇて、愛菜さん今日は翼くんを祝ったって下さい！」
翼と羽月の言葉に、愛菜は口をつぐんだ。
すると、すぐに口を開く。
「ねぇ、よかったらこの後のあなたたちに私も付き合ってもいい？」
「えっ？」
「別に二人の飲みの邪魔はしないし、あなたたちがここ最近よく行ってるって行きつけのお店、私も行ってみたいのよ。ダメ？」
そう話す愛菜に、翼と羽月は一瞬顔を見合わせた。

「俺はいいけど、どうなんだ？」
翼が羽月に問い掛けると、羽月は笑顔で首を縦に振った。
「俺はえぇよ！愛菜さん、じゃあ一緒に打ち上げしょ！」
「そっか。じゃあ、愛菜も一緒においでよ」
二人の言葉で、愛菜は嬉しそうに微笑んだ。

「やったぁ！一度男の子が行くようなところに行ってみたかったんだぁ！」
愛菜は、まるで外食を嬉しがる子供のように手をパチンと打ち鳴らした。
そんな彼女を見てか、翼もどこか仕方ないなとばかりに軽くため息をつく。
そして、「いつまでも子供なんだから」とばかりに、翼たち三人は、ワイワイと歩きながら小料理屋"楓"に向かうことにした。

歩いて５分後ー

「へぇ～ここなんだぁ。小さいけど綺麗なお店ね！」
愛菜は"楓"の桧をベースにした小綺麗な外観に関心を示していた。

「キャン、キャン」
翼と羽月に気付いてか、店の前で首輪を鎖に繋がれている一匹の柴犬が、彼らを迎えるように尻

尾を振っていた。
「おっ、チョコ元気そうやな！」
羽月は腰を下ろし、チョコと言う名前のその犬の頭を幾度となく撫でた。
「へぇ〜、チョコちゃんて言うんだ、すっごい可愛いわね！」
愛菜も羽月に続くように、チョコの頭を優しく摩るように撫でる。
そんな初めて見るようなあどけない笑顔でチョコに接する愛菜の横顔に、羽月はどこか高鳴るようなものを覚えていた。

すると、店のドアがガラガラと開き、これから帰る客らしき男女が二人出てくる。
その二人の後ろから、女将である楓が見送りに現れ「ありがとうございました」と挨拶がてら頭を下げる。
それと同時に、楓は翼たちの存在にも気付いていた。

「あら翼さんたち、こんばんは」
楓の優しい口調が、翼たちを温かく迎える。
「こんばんは。楓さん、今大丈夫ですか？」
翼が問い掛けると、楓は快く頷く。
「えぇ、ちょうど今落ち着いたところだから大丈夫ですよ。あら、今日はお連れさまもご一緒？」
「えぇ、今日は三名でお願いします」
楓は、翼のやや斜め後ろに立っていた愛菜に目をやると、ニッコリ微笑んだ。

「とてもお綺麗な方ね！さっ、春でも夜は冷えますから中の方へどうぞっ」
楓は気さくな口調で、翼たちを店内へと招き入れた。

三人は店に入ると、カウンターの奥から羽月・愛菜・翼の順に腰をおろす。
「へぇ〜！中も落ち着いてていいわね。あなたたち、こんないいところでいつも食事してたのね」
「いや、別にいつもってわけじゃないけど」
たしなめるような愛菜に対し、翼はどこかごまかすように答える。
「まぁ翼くん、そんな照れんでもえぇやん♪」
三人が話していると、カウンターごしの美空が静かに手に持ったおしぼりを差し出す。

「こんばんは、美空さん」
「こんばんは美空ちゃん！」
翼と羽月がそう言うと、美空は笑顔で頭を下げる。
その際におしぼりを受け取った愛菜も、微笑みながらもどこか不思議そうに彼女を見つめた。

12-2

「みなさん、何を飲まれます？」
楓がそう言うと、翼と羽月はビール・愛菜はライムサワーと、それぞれのオーダーを答えた。

「今日はおいしい鰆が入っていますよ」
「じゃあ、それで！後はママさんのオススメでお願いしますでぇ！」
一通りの注文を終えると、翼たちはそれぞれジョッキやグラスを手に持った。

「じゃあ、翼と羽月くんの今日の成長とこれからの飛躍を願って……」
愛菜に促されるように、三人は「カンパイッ」と声を揃えた。

「あー！今日は生きてきた中で一番うまいわぁ！」
羽月はカウンター上にジョッキをドンと置きながら、何かを吐き出すように声を漏らした。

「フフッ」
愛菜はクスッと笑った。
「えっ、何ですか愛菜さん？」
「羽月くん…あなたホントにおもしろい子ねぇ。翼もちょっとは見習えばいいのに」
そう言いながら、愛菜は自分の右隣にいる翼を横目で見る。
「……すいませんねぇ」
「フフッ、冗談よ！翼は翼だもんね。でも、あなたたちよくここには来てるのよね？」
「まぁ、よくってほどではないけど…週一くらいで来てるかな？」
するとそこに、美空が小鉢に入ったお通しを持ってきた。
そして気付いた翼に対し、手話を軽くしてみせる。

「……。そっか、これ美空さんが」
翼は美空の手話に言葉で返答する。
その光景を、彼の隣にいる愛菜が不思議そうに見ていた。
「……そっか、じゃあいただきます」
翼はお通しの小鉢の中に整えられた竹ノ子の煮付けをパクリと口に移した。
ゴリゴリと小さな音を口の中で鳴らしながら、彼は無言で二度首を縦に振る。

「美味しいよっ」
翼は笑いながらそう言うと、美空は顔を赤らめながらニコリとほほ笑む。

「ねぇ翼、彼女もしかして……？」
美空の手話のことに半ば気付いていた愛菜が唐突に尋ねると、翼は一旦無言で頷いた後に静かに答えた。
「彼女……美空さんは声が出せないんだ」
「そう……」
愛菜はあらためて美空の横顔を見つめた。
すると、小鉢の煮物を一口パクリと口に運ぶ。
左手を当てながらゆっくり、ゆっくりと口に噛みほぐすと、愛菜は美空に話し掛ける。

「これ、とっても美味しいです」
突然の愛菜の言葉に、美空は目をパチクリさせつつも笑顔で軽く頭を下げた。
「いつも二人でいらっしゃる翼さんたちが、こんな綺麗な人を連れてくるなんて。どうぞゆっくりなさっていって下さいね」
楓は落ち着きのある口調で翼たちに言った。

「はいっ♪ここいいお店ね、翼」
愛菜は嬉しそうに言った。
「さぁ、明日は休みやし、今日は飲むでぇ～！」
はしゃぎながら声を上げる羽月のその一言を皮ぎりに、翼たち三人の打ち上げで盛り上がる夜は更けていった。

ただその最中、愛菜を隣に楽しげに食事をする翼のことを、美空はどこか切なそうに見ていた。

３時間後ー

「あぁもう、羽月くん調子に乗って飲み過ぎよっ！」
「う～……」
愛菜に注意されながら、羽月は"楓"の外で座り込んでいた。
「羽月さん、大丈夫かしら」
楓と美空が心配そうにその光景を見つめる。
すると、美空が翼の肩をトントンと軽く叩き、手話の手ぶりををしてみせる。

『羽月サン、大丈夫カナ』
翼はそれを読み取ると、大丈夫と言わんばかりにゆっくりと頷いた。

「じゃあ、僕ら帰ります。楓さん美空さん、ごちそうさまでした」
翼はふらつく羽月に肩を貸しながら、楓と美空に軽く頭を下げた。

「ありがとうございましたぁ。羽月さん、帰ったらゆっくりなさってね」
「はぁ〜いおおきに〜……」
「愛菜さんも、またいらして下さいね」
「はい。とても美味しかったです、ごちそうさまでした！あっ美空ちゃん、竹の子の煮物、すっごく美味しかったよ！また作ってね」
愛菜のその言葉に、美空は手話で『アリガトウゴザイマシタ』と言って、ペコリと頭を下げる。
そうやって別れの挨拶を交わしながら、翼たちは"楓"を後にした。

「すぐにタクシー乗せた方がいいわね……。羽月くん、一人で帰れる？大丈夫？」
「う〜……。あ、はい……俺は大丈夫やでぇ……ちゃんとタクッて帰るさかい……」
そばで心配する愛菜の顔を直視できないものの、羽月はふらふらとしながら、その細長い身体を引きずるように歩いた。

「大丈夫か？今タクシー止めるからな」
「あぁ……ありがとう翼くん……。もう靖国通りやし、俺はもうここで大丈夫やから……愛菜さんを送ったって……」
今にも崩れそうな羽月をよそに、翼の挙げた左手を目印に一台のタクシーが止まり、後部座席のドアを開ける。

「さっ、早く帰って休めよ」
「羽月くん、じゃあね」
「おおきに、翼くん愛菜さん……お疲れさまぁ……」
いつもの元気な面影が全く見えないような羽月を乗せたタクシーは、ドアをバタンと閉め、少しずつ翼たちのもとから離れていった。

「大丈夫かしら、あの子」
「大丈夫だよ、元気があいつの取り柄だし」
「フフッ、それもそうね。さて、私たちも行きましょ」
翼と愛菜はクスッと笑い合った。

「ん？」
翼はいつの間にか自分の足元に落ちている、一枚の古い写真の存在に気が付いた。

『これ、あいつのかな？』

それをひょいと拾いあげると、翼はそれに目をやる。
そこには、小学生くらいの少女とさらにいくつか小さい男の子の二人が笑顔で手を繋いで写っていた。

写真の後ろには、

"茜(アカネ)１０歳"
"直人(ナオト)５歳"

とサインペンによる直筆で書かれていた。

『あいつ……何でこんなものを』

翼がそう考え込んでいると、愛菜が彼の背中を指で突いた。

「おっ」
「ちょっと翼、どうしたのぼんやりしちゃって」
翼はその写真をサッとジャケットのポケットに隠した。
「あ……いや、ちょっと俺も酔ったかな」
「そうなの～？大丈夫？」
「あぁ、大丈夫だよ」
翼は、これが羽月の写真だとしたら彼にとって必要以上に見られたくないものだろうと考えてか、そのことがバレないようにと愛菜に対してはさりげなく振る舞った。

「じゃあ、私も帰るね」
「あぁ、今日はわざわざありがとう」

「うん、次は光星の奴も抜いちゃおうね。……それとさ」
「なに？」
「……今日みたいな家庭的なお料理、久々だったから何か嬉しかった。また連れてってね」
「あぁ」
その時、翼は愛菜の表情に悲しげな影がフッと浮かんだのを感じた。

「愛菜？」
「じゃあ、またね翼！」
愛菜は止まっていたタクシーにそそくさと乗り込むと、社内から翼に軽く手を振ってその場から去っていった。

『どうしたんだろう、愛菜』

翼はそう思いながら、自らの帰路へとつくことにした。

翌日ー

昼に起きた翼は、自宅にて例の写真をその手に取って見ていた。
「どこと無く面影があるよな……。まぁとにかく、店で会ったら渡そうっと」
そう呟いていたその時、部屋のインターフォンが鳴り響いた。

「誰だろう？」
翼はインターフォン用の受話器を取った。
「はい」
すると相手は受話器の向こうからこう囁いた。

「一也……俺だ、圭介だ」
翼の表情は一瞬にして強張った。
「……兄さん」

「一也、突然ですまないんだが、母さんのことでとても大切な話があるんだ。ちょっとここを開けてくれないか。頼む」

翼(＝一也)の兄・浅川圭介の突然の訪問だった。

第１３章へ

【Pegasus】の締日営業が明けた日曜日ー

その昼下がり、翼は実の兄・圭介が運転する自動車の助手席へと腰をおろしていた。
久しい再会にも関わらず、兄弟同士何も会話をすることもないまま、深い沈黙とともに時間は一刻一刻と流れる。
しかし、彼らの実家のある横浜との距離は確実にそれとともに縮まっていく。
それに比例するように、翼はその瞳の形を少しずつ…少しずつ無意識の内に変えていた。

１時間前ー

自らの部屋のドア一枚の向こうにいる兄・圭介に対し、翼は僅かながらの躊躇を感じていた。
"あの事件"の当事者ではないとはいえ、兄はきっと浅川家から何かを言いつかってきた……彼は確信したようにそう直感していた。
何にしても、応答してしまった以上、そのまま居留守で帰ってくれまいと悟った翼は、二人を隔てているそのドアの手摺りにそっ手を近づける。

『ガチャリ』と音をたてたドアは呆気なく開き、久しい兄弟の対面へと導いた。

「一也……」
会社員らしきグレーのストライプのスーツ姿の圭介は、扉の奥に姿を現した弟の姿を見ては、そのまま絶句した。
久しく見ないうちに、以前の面影が無いほど変貌してしまったことに、大きいショックを受けていた。

所々ハネて盛られた茶色い髪の毛も然り、
左耳につけられた銀色に輝くピアスも然り、
しかし、それ以上に以前の優しい表情が垣間見れない程の瞳に宿る闇が、圭介自身が知っている"一也"でないことを物語っていた。
そんな弟を見てか、圭介はしばらく開いた口を塞げずにいた。

しかし、翼は至って冷静に兄に対峙していた。
「兄さん、いきなり何しに来たんだ」
翼のその一言で、圭介は我に返ったのか改めるように口を開いた。

「一也……連絡も一切無しに、一体今までどうしていたんだ！みんな心配していたんだぞ！」
圭介は声を大きくして言いたい気持ちを堪えながら、翼に言い放った。
しかし、その言葉も虚しく、彼には届いてはなく。

「兄さんさぁ、そんなことを言うために、わざわざここに来たの？」
「質問に答えろ一也！今までどうしてたんだ……その髪の毛は何だ！？」
「それを答えて欲しいなら、まずはこっちの質問に答えろよ」
「なに？」
翼は一度深いため息をつくと、再び口を開き始めた。

「ここに何しに来たんだ？親父のくだらないパシリかい？」
「……！さっきも言ったように、母さんのことで話があるんだ」
「……あの女の？一体何なんだ、用件ならメールで一本送ればいいじゃないか」
言い捨てるような翼の一言一言に対し、圭介は自分の中に溜まる何かを必死で抑えながら答える。

「一也、ここ数ヶ月、今まで家からお前宛に封筒が送られたきたはずだ」
「封筒？」
すると翼は、今いるドアもとから部屋の中のある一部分を振り返ってみる。

「あぁ、あれのこと？」
そっけなく答える翼が指差す先には、何十枚という数の封筒が山積みになっていた。
「あれがどうかしたのかよ？」
「ちょっとどけっ！」
圭介は翼を押しのけるように部屋の中へと入っていった。
「おい！何勝手に土足で上がってんだ！」
怒鳴る翼をよそに、圭介は床に棄てられたように重なった封筒をじっと見下ろした。
そうしている彼の拳は、今にも飛び出しそうな衝動を抑えるかのようにプルプルと震えていた。

「一也……」
「何だよ」
「お前……この封筒、封を開けてないところを見ると一切見てないのか？」

歯を噛み締めながら呟く圭介に対し、翼は冷静に答えた。
「見ての通りさ。あの女の書いたものを一々俺が見る必要がどこにあるんだ？しつこすぎて捨てるのも忘れてたさ」
それを聞いた圭介は、目をカッと開きながら翼の襟元につかみ掛かった。

「ぐっ！」
つかまれたと同時に壁にたたき付けられた翼は、一瞬にして苦悶の表情を示す。
「何するんだっ！！」
「何じゃない」
「えぇ！？」
「お前、こんな時にこんな頭して何やってんだ！！」
「こんな時？何のことだ！！」
翼は怒る圭介の言葉にわけもわからず、彼を突き飛ばした。

「ハァ……ハァ……。兄さん、俺が何であんなもんを見る必要があるんだ。あんな女からのものなんか見れるか！！」
怒鳴り散らす翼に対し、圭介はただギロリと睨み付けた。

「何なんだよ一体。ただ喧嘩したいだけなら、ここから出ていけよ！！」
「一也！！」
圭介は振り絞るように、声を上げると、一旦冷静さを取り戻すように話を続けた。

「よく聞け、母さんはな……」

高速道路を走る車内は、着々と横浜へと近づいていた。
その間、翼と圭介は何も言葉を口にすることはなく、ただ、エンジンの静かな音だけが二人の間を支配していた。

「一也」
運転席でハンドルを圭介が、重い口を開いた。
「お前の気持ちもわからなくはないが…わかってるよな？」
「……」
「俺がさっき部屋で話した通り、母さんはあれからずっとお前のことで苦しんだんだ」
「……」
翼は何も答えなかった。
ただ、早々と通り過ぎて切り替わっていく車内からの光景を、じっと見つめていた。
圭介もそれ以上は何も言わず、フロントガラスごしに映る景色を追いかけ追い越していった。

数十分後ー

自動車を降りた二人は、横浜某区にある豪邸のような大きな建物の前に対面していた。
それと同時に、翼の中には言いようのない感情が噴火寸前のマグマのように込み上げていた。
それを必死でこらえながらも目の前にある建物を睨みつける彼の横顔を、兄である圭介は心配で仕方なかった。

すると、開いたエントランスから一人の長い栗色の髪を後ろで束ねた女性が翼達のもとに近づいてきた。

「おかえりなさい。……一也さん、お久しぶりです」
女性は、翼の容姿に一旦目を丸くしていたものの、すぐに平静になり彼に話しかけた。

「……どうも、和美(カズミ)さん。さっき兄から聞きました。今は兄とここに住んでいるんですね」
「えぇ。一也さん、あなた、お父様たちがお待ちよ」

和美と呼ばれた女性はそう言うと、一也に「どうぞ」と言わんばかりにエントランスのドアをスッと支えた。
「……」
翼は躊躇していた。
一歩一歩、中に近づくたびに、あの時の記憶が徐々に鮮明になって甦っていくのを感じていた。

ふがいない自分、

情けない自分、

自らの存在意義すら否定されたような自分、

様々な思いが、彼の心の中を独り歩きしていた。

「一也、入れ」
圭介が後ろからふと翼の背中を押す。
家の中にとうとう足を踏み入れた彼の鼻に、どこか嗅ぎ慣れた匂いが漂う。
見慣れた光景が視界に広がる。
苦しく、懐かしく、そして何か切なく腹立たしいものが一気に混じり合っていく。

「一也、何をぼーっと突っ立ってるんだ。お前の実家なんだ、早く上がれ」
圭介は家の中に上がることをためらっている翼に促していく。

「さっきも話しただろう。とにかく、上がってくれ……なっ？」
「……」
すると翼は、履いていたブーツをゆっくりと片方ずつ脱ぎ、家の床へと足を乗せていく。

「お父様たちは、リビングで待っているわ。さぁ、どうぞ……」
和美に導かれるまま、翼はリビングへと一歩一歩と何かを噛み締めるように足を運んだ。

リビングのドアは開けられた。

奥のソファに腰をおろす父とニットキャップを頭に被る母が、ドアのそばに立つ翼の姿を捉える。

「一也！」
母はその瞳に涙を浮かべ、翼のもとへとよろけながら駆け寄った。
「一也……一也……」
母が翼の腕に触れようとしたその時だった。

「気安く呼ぶな、触るな」
どこから出しているのか不思議なくらい重く低い声が、翼の口から溢れ出る。
その際、母の頭を覆う灰色のニットキャップが逸らそうとする彼の視線を引き付けた。

「……」
翼は目の前にいる母に目を合わせようとしなかった。

ただ、異常なまでの拒否反応が彼から出ているのが、その場にいる全員が確信していた。

「一也……それに母さんも、とにかく座りなさい」
どこか肩を落としたような父が、力無い口調で言った。
翼は「フン」と鼻を鳴らすも、父に向かい合うように渋々とソファに腰掛けることにした。
それに次いで、圭介も彼の横に腰をおろす。

しんと静まり返った空間が５分ほど過ぎると、それを破るように父が口を開いた。

「一也」
「何だよ」
翼が目を合わさず聞き返すと、父は徐々に表情を強張らせた。
「お前……あれから電話もろくに出ずに何をしていたんだ」
「兄さんと同じ質問か」
「質問に答えろ、一也。何をしていた？」
「見ての通り、さ。新宿で働いてる」
翼はそう言って、セットされた自らの茶色い髪の毛を右手の指先で揺らした。
その指には、以前は全くすることのなかったリングが銀色の輝きを放つ。
それを横目で見ては顔をしかめる圭介の表情を見てか、父は次男である彼の現状を察し始めていた。

「新宿……。まさかお前」
「そっ、ホストやってんの」

『ホスト』

母と、たまたまその時飲み物を運んでいた和美は、その名前を聞いて目を大きく見開いた。

「ホスト、ホストだと？」
「あぁ」
淡々と返事をする翼に対し、父は一気に表情の激しさを変え、テーブルに両手を勢いよく振り下ろした。
『ドン』という強い衝撃音に、翼以外の全員がビクリと反応する。

「一也……！ＫＫさんの会社であんな事件を起こし、連絡も無しに何をやっていたかと思えば……ホストだと！？」
「悪いのか？」
「悪い？悪いかだと！？貴様、そんな女をたぶらかして金儲けをする仕事をしていたのか！！ぇぇ！？」
「あぁ。あんたらがやってるめんどい仕事なんかより、楽しく金も稼げるんでね」
「何だと！？お前、自分が何をふざけたことを言っているのかわかってるのか！？」
父は翼を睨みつけた。
しかし、当の彼はさらに恐ろしい眼光を父に向けた。

「ふざけたことだと？ふざけてんのはどっちだ！！」
「一也、落ち着け！」
口調を荒げた翼を、横にいる圭介が諌める。
しかし、すっかり以前の優しい面影の無い弟の表情に、兄である彼は僅かな恐怖すら抱き始めていた。

そして睨み合う翼と父の会話は続いていった。

「あの時……あんたらが俺に……いや、俺達にしたことを俺は絶対に忘れない」
「紗恵さんのことか」
「それ以外に何があるって言うんだ？糞ジジイ」
翼の口調はさらに鋭さを増し、次に父の横で押し黙っている母にその標的を向けた。

「おい、ちゃんと聞いてるのか？」
母はビクッとしながら、自分を鋭く睨む翼に視線を合わす。

「あんたも、よくもメチャクチャにしてくれたよな」
「一也……お母さんね……その……ごめんなさい……」
「白々しく母親面するな。今更謝っても遅いんだよ」
「ごめんね一也……ごめんなさい、ごめんなさい……」

母は、ポロポロと涙を流しながら何度も、何度も謝った。
息子に対する自分自身の過剰な行為で起こしてしまった"あの時"のあの過ちを悔い改めてきたのか、当時のような過熱した雰囲気は全くと言っていいほど影を潜めていた。
しかし、翼がそれを許しているはずはなくー。

「ごめんなさいで事が済めば」
「えっ？」
「警察なんかはいらないんだよ！！」
この日最も張り上げた彼の怒声が、浅川家の中を重く包み込んだ。

「一也、母さんに何てことを！！」
「あんたは黙ってろ」
割り込んできた父を制すると、翼はそのどす黒く鋭い眼光をその場の全員に向けた。

「わかるか？俺があの夜から、どんな惨めな思いで生きてきたか。どんなに引き裂かれるような辛さを味わったか……」
「……」

13-2

「馬鹿にされても嘲笑われても、自分なりに一生懸命やってきたことが何も報われずにいることが……自分の大切な存在が突然消えていくのがどれだけのことか……あんたら、少しでも考えたことあるのかよ？えぇっ！？」
溜まりに溜まっていたものが噴き出したかのような翼の叫びは、その場に居合わせる全員を硬直させた。
しかし、それを何とか制しようと彼の横にいる圭介が口を開く。

「一也、お前の気持ちはわかる。……だが、終わってしまったことを嘆いてもしょうがないだろう」
「しょうがない？」
翼は圭介を横目で睨みながら呟くと、プッと噴き出すように笑い出した。

「アッハッハ……！まぁしょうがないだろうな。俺みたいなもはや存在価値の無いゴミクズには、似合ってる言葉だよ、兄さん」
「一也！」
「それに」
すると、翼はその鋭い視線の先を母に移した。

「あなたが今そんなものを頭にかぶる状態になってしまったのも、自業自得だろうが」
息子の放り捨てるような言葉に、母は口もとを震わせ始める。

「か、一也……」
「俺を散々罵ったバチがあたったんだね……。まさか癌になっていて下さってるとは」
翼の母に対する恐ろしいほどゆるやかな口調は、氷の冷たさのようなまさにそれだった。
しかし、その発言に対して父が割って入った。

「おい一也！お前、今何て言ったんだ……もう一度言ってみろ！！」
「聞こえてなかったのか？その女が癌になってくれてよかったって言ってるんだよ」
「な、何だと？」
父がそう問うと、翼は軽い溜め息をして再び口を開き始めた。

「本当はこの手で殺したいくらいだけどね。まぁ、おかけで俺がこの手を汚さずに済んだってコトだよ。みなさんわかりました？」
翼が笑い捨てるようにそう呟いたその時だった。

気がつくとガタンとした物音とともに、彼はソファ脇の床に仰向けに倒れていた。

「グッ…」
背中を強く打ったせいか、小さくそう声を漏らす。
そんな彼の上を、鬼のような形相をした圭介が、弟の襟首を両手で掴みながら組み敷いていた。

「圭介！」
「あなた！」
父と和美も思わぬ事態に飛び上がるように驚く。
しかし、頂点に達した圭介の怒りはおさまるはずもなかった。

「一也…お前どこまで腐ってんだぁ！！えぇ！？」
翼の襟首を放さない彼の怒声が、その場に響き渡る。
「母さんはな……お前が紗恵さんとあんなことになってしばらくたってから、申し訳ない申し訳ないってすごく悩んでたんだ！！だから謝りの手紙も闘病しながら一生懸命書いてあんなに送ってたんだぞ！！それがお前にはわからないのか！？」
「……わからないだと？じゃあ兄さんにはわかるか！？いつもあんたと比較されて見下されてきた揚げ句、立場や力を使って大切なものまでヘラヘラと踏みにじられた俺の気持ちが……あんたにはわかるのかよ！！」
圭介と翼が互いの言葉をぶつけ合うと、そこに頬をぐっしょり濡らした母が割って入った。

「もうやめて圭介も一也も……。私が悪いの……一也にあんな酷いことを自覚無しにとはいえしてしまったから……うぅっ……」
母はそう言うと、がくりと膝を床につけ翼のことをその潤んだ瞳で見つめた。

「一也、私のことが殺したいくらい憎いわよね。ごめんなさい……本当にごめんなさい……あぁっ……」
顔を両手で隠しながら泣き崩れる母を見てか、翼と組み合っていた圭介はピタリとその動きを止めていた。

「ワッ！」
しかし、この時をとばかり思ってか、翼は圭介のことを足で突き飛ばした。
起き上がって乱れた衣服を整えると、彼は茫然とする和美の前にスタスタと歩いていった。

「一也さん……？」

「和美さんも大変ですよね……こんな家に嫁いできたんじゃ」
すると、翼はジャケットの内ポケットから一枚の名刺を取りだし、それを和美の右手に強引におさめた。

「えっ、一也さんコレ……？」
「見ての通り僕の名刺です。ご用命の際は、"翼"をこの店で指名して下さいね」
そう言うと、翼は義姉である和美の頬にスッとキスをする。
「キャッ！」
和美が声を上げると、それを見ていた圭介が再び怒るのはすぐのことだった。

「一也お前ぇ！！どこまでふざければ気が済むんだ！！」
「こんぐらいのことでムキになるなよ兄さん」
翼と圭介は１０秒ほど睨み合った。

「フン……」
翼は彼らに背中を向け、歩きだした。
「一也、お前どこに行くんだ？」
父がそう問い掛けると、彼は一瞬立ち止まりながら背中越しに答えた。

「東京に帰る。明日も仕事があるし疲れてるんでね」
「こんな時に言うのもなんだが……夕食だけでも食べていけ。母さん、体辛いのをこらえてお前の好きなすき焼きの用意して待ってたんだぞ」
驚くほど穏やかに話す父だったが、息子である彼が発した答えはその場にいた全員が思いもよらないものだった。

「いらないんなもん。てかさ……毒でも入ってたらどうすんだよ？」
「毒……だと？お前、本気でそんなー」
「聞いてないようだから言っといてやる。俺は絶対に許さない……」

「一生呪ッテ生キテヤル」

凍り付くような目付きで言い放った翼の一言に、そこにいる全員が絶句した。

母は再び泣き崩れた。
父も、圭介も、和美も、この時全員が確信せざるを得なかった。

もう、自分たちが知っている"浅川一也"は、どこにもいないということをー

優しかった昔の『彼』のことを思い返しながら、ただ茫然と立ちすくむしかなかった。

「じゃあね」
翼は一言そう言って、その場から立ち去っていった。

彼がツカツカと歩いて、ブーツに履きかえていたときだった。
「一也……」
よろめきながら歩いて寄ってきた母が、後ろから声をかける。
彼女の手には、アルミホイルの中に収めた丸い形をした物の姿があった。

「一也、これ。おにぎりを作っておいたのよ……。後でー」
母がそれを差し出したその時だった。
「こんな毒物、いらないって言っただろ？」
翼はそれをたたき落としては、玄関の床に転げ落ちたそれをブーツを履いた足でグシャリと踏み潰した。

「……！」
「じゃあ」
翼は最後にそう呟いて、生まれ育ったその家の玄関を後にした。

閉めた扉の向こうで崩れ落ちながら啜り泣く母の声は、もはや彼にとっては心地よいノイズのようなものでしかなかった。

「自分自身のしたバカに自覚した揚げ句、今度はそのストレスで癌か……あの女にはお似合いの結末だ……」
翼は、何を気にするそぶりをないまま、急ぐこともなく自分が住む東京・新宿へと戻っていった。

「♪♪♪～♪♪～」
東京へ向かうタクシーの中、翼のケータイが一つの着信を知らせた。
「愛菜だ。一体何だろう？」

今日この日から起こったすべての出来事が、狂い始めた運命の結末へと通じていた。

第１４章へ

14-1

「愛菜、一体どうしたんだ？」

翼は通話を終えたケータイを見つめながら呟く。
ただ彼がいまわかっていることは、普段の彼女からは考えられないほど感情的な口調で「早く来て」と訴えかけていたことだった。

「すいません、ちょっと急いで下さい」
とにかく一刻も早く新宿に着かなければと思いたったのか、翼は現在乗っているタクシーの運転手に急ぐように促した。

『あの愛菜が一体どうしたって言うんだ』

そう胸に秘めながら、次々と移り行く車窓の眺めを置き去りにするように、新宿への道を進んでいった。

約１時間後ー

翼は新宿の『西総合病院』へと降り立った。

「愛菜からのメールだと、確かここだよな。かなりでかい病院だ」
時刻は午後８時を過ぎ、病院の外や入口にかけては人気がもう無くなりかけていた頃だった。
翼は案内板の表示に導かれるまま、病院の入口へと向かって歩いていった。
入口に差し掛かると、自動ドアが左右に開き、彼は中をそのまま突き進んでいく。
病院特有の匂いが、ケータイの電源をオフにする彼の嗅覚を襲うのには、そう時間はいらなかった。

「愛菜はどこだ？確かこの辺りにいるってー」
彼女を探すのに、そう多くの時間はかからなかった。

入口からすぐの人気が掃けたロビーに、ただ一人座っている彼女の際立った外見は、わかりやすいほどすぐに翼の目に留まっていた。

ただ不思議だったのは、愛菜の服装が昨夜"楓"で食事したときと全く同じものだったのは、翼の目から見ても明らかだった。
彼はそれが気はなったものの、ずっと斜め下を虚ろに見つめている彼女のもとに近づいていった。

「愛菜っ！」
翼が声をかけると、愛菜はゆっくりと顔を上げる。

「翼……来てくれたのね」
「どうしたんだよ、急に」
「……」
愛菜は再び顔を俯く。

「ごめんなさい、翼。休みの日に急に呼び出したりして」
「いや、いいよそんなの」
翼自身、先の家族との衝突の一件があったためか、今改めて休日だったという事実に気が付いた。

「そんなことより、どうしたんだい？愛菜があんな風に電話してくるなんて思わなかったから」
「うん、それはね……」
愛菜が話そうとしたその時だった。
一人の男性医師が、話している二人のもとへと速足で寄ってきた。
愛菜はそれに気付くと、ハッとしたように立ち上がる。

「先生っ！！」
いつになく声の大きい愛菜。
医師は二人のもとに着くやら、翼に対して頭を下げて一礼した。
翼もそれにならう。

「おばあちゃんは、今……おばあちゃんはどうなんですか！？」
「……」
愛菜に対し医師は一瞬黙りこくると、何か意を決したように口を開いた。

「そのことですが……」

「えっ？」
「一緒に来て下さいますか？おばあさんの待つ病室に」
力無く答える医師の言葉に、愛菜はどこか意識が遠のくのを覚えた。
「まさか…」
愛菜がそう聞くと、医師は顔を伏せたままそれ以上は答えようとはしなかった。

「嘘でしょ……」
さらに力無く、か細い声で呟く愛菜。
そのままゆっくり頷いた彼女は、医師とともにその病室へと行くことにした。

「翼……一緒に来て」
そう言いながら、愛菜は翼の腕をその細く華奢な指でキュッと掴む。
その力の無さに、翼は彼女が明らかにいつもと違うことを確信せずにはいられなかった。

２階へと上がり歩いて間もないところに、その病室はあった。
「どうぞ、行ってあげて下さい」
医師に導かれるまま、翼と愛菜はそこのドアの前へと立ち止まる。
「なぁ、おばあちゃんて……？」
事情がまだ飲み込めていない翼がそう聞くと、愛菜はそれに答えようとはせず、ドアをゆっくりと開けた。
開かれたドアの向こうには、三～四十代の四人の男女がベッドで横になる一人の人物に悲しげな視線を送っていた。
ドアが開かれたことにより、彼らはやってきた愛菜たちの存在に気付く。

「アッちゃん……」
病室にいる一人の女性が、愛菜に向かってそう言った。
「おばあちゃんは？おばあちゃんは……？？」
愛菜がそう問い掛けると、ベッドからか細くかすれた声が彼女の名をゆっくり呼んだ。

「アッ……ちゃん……」
すると愛菜は、目の前にいる男女を掻き分けるようにベッドの方に駆け寄って膝をついた。

「おばあちゃん」
愛菜がそう言いながら見つめる先には、もう８０超えているだろう老婆がベッドの上にて横たえていた。
彼女がキュッと手を握ることで、その老婆はスローモーション映像のようにゆっくり…ゆっくり

と笑顔を見せる。

「アッ……ちゃん……」
「なに？どうしたのおばあちゃん？私、ずっとここにいるよ」
愛菜が手を握りながら必死に聞き返すも、もはや虫の息と言った状態の老婆の声は、ハッキリと聞き取れるものではなかった。
しかし、愛菜の耳にはしっかりと聞こえていた。

「こんなに……綺麗に……なっ……てくれ……て……」

「おばあちゃんもういいよ、それ以上しゃべらないで……おばあちゃん……」

「アッちゃん……に会え……て……おばあちゃ……うれ……し……かっ……」

「おばあちゃん……イヤ、そんなの……」

愛菜の声が力無く潤んでいるのが、後ろから見守る翼には痛いほど伝わってきていた。

やがて、心拍計のブザーが一定の音を鳴らし続ける。

それは、愛菜を初めそこにいた数人の男女が深く泣き崩れ始めるための、

辛く悲しい現実を突き付けられた合図だった。

「おばあちゃん、おばあちゃん……死んじゃイヤ！イヤ！死んじゃイヤぁあー！！」
なりふり構わず大きな声でベッドの白い掛け布団に顔を埋めながら泣きじゃくる愛菜。

そんな愛菜の肩を抱きながら一緒に声を上げて泣いている女性や、他の三人の男女。

そして、そんな見たこともない今の光景全てに絶句している翼。

その時翼にただわかっていたのは、

一人の人間の"死"という現実がもたらした、深すぎる悲しみだった。

今はただ、永く奏でるレクイエムのように止まることのない愛菜の泣き声を、

黙って聴きながらその場に佇むことしかできなかった。

約２時間後ー

老婆の遺体は既に霊安室へと移され、愛菜は一人そこに座り込みながらピクリとも動かなかった。

「愛菜……」
翼はそんな彼女の後ろ姿を、ただずっと見つめていた。
「今は……ただ何も言わず一緒にいてあげて下さい」
医師は翼にそう言うと、ペコリと頭を下げそこから去っていった。

『愛菜が、あんなに取り乱すなんて』

すっかりやつれた背中が、愛菜の心労の度合いをわかりやすいほどに示していた。
ただ、今は医師の言う通り黙って見守るしかない……翼はそう思うことにした。

しかし、ずっと永く続くかと思われた彼女の沈黙は、意外にも早く破られた。

「翼……いる？」
「……うん、いるよ」

小さい声で自分を呼ぶ彼女の声は、ぐったり力が抜けたような聞き取りにくいものだったが、翼はただ懸命に話し、答えることに努めた。

「愛菜、大丈夫かい？」
「……うん」
「そうか」
明らかに彼女が大丈夫ではないのはわかっていたが、今はそっとしてやることが第一だと翼は自ずと言い聞かせる。

「ゴメンね、翼。こんなとこ見せちゃって」
「そんな、気にするなよ」
「いつものあたしじゃないし……こんなことになっちゃったから、引いたでしょ…」
「そんなことないって」
「無理しないで」
「愛菜！」
「……ゴメン」

"いつものあたしじゃない"

それは翼本人も十分にわかっていた。
しかし、今の人の"死"に直面し悲しみに打ちひしがれている彼女のことを考えれば、彼は無理矢理にでも仕方ないと納得しようと思った。

白い布で顔を覆った老婆の横たえる姿が、今彼女の心にどれだけのダメージを与えているかー形は違えど、"大切な人"が自分の目の前から突然いなくなる痛みを嫌なほど理解していた翼には、それ以上何も言うことはできなかった。

「あのぉ……」
「？」

翼の背後から、先程老婆を看取っていたうちの一人の女性が話しかけてきた。
「失礼ですが、アッちゃん……彼女の彼氏さんか何かでしょうか？」
「あ……はい。彼女……病院で大切な人が大変だからってことで、それで」
"客とホスト"と言うわけにもいかないので、翼はうまくごまかしながら答えた。

「そうでしたか…」
「あの、お聞きしていいかわかりませんが、そちらは？」
今度は翼が聞き返す。

「私たちは、以前彼女が生活していた児童養護施設の者です」
「児童養護施設？」
翼が思わず口にすると、女性はコクッと頷いた。

「知らないのも無理はありません。あの子、自分の過去については一切語りたがりませんから。高校を卒業する１８まで、あの子は私どものところにいたんですよ」
「そうだったんですか……。ちなみに、亡くなったあのおばあさんは？」
翼が問い掛けると、女性は一瞬躊躇してから答えた。

「あのおばあちゃんは、ボランティアで私どもの施設によく来て下さった方だったんです。とてもお優しい方でして、ご両親のいない彼女の母親がわりのような人でした」
「その人が、先程亡くなられて彼女はあんなに……？」
「えぇ……。子供たちにも大変慕われてて……。あんないい方でしたのに……」
女性はそう言って再び涙を流すと、それ以上は何も語らなかった。

『愛菜……』

翼は、深く沈んだ愛菜の後ろ姿を見つめた。
すると、彼女は突然スッと立ち上がる。

「お、おい」
翼は思わず声をかける。
「翼……行こう」

愛菜は思ったより冷静な口調で囁く。
「で、でも……」
「私は大丈夫。それと……先生」
愛菜は翼のとなりにいる施設の女性のことを呼ぶと、スッと振り返った。

「私、行くね」
「アッちゃん……」
思ったより健やかな表情の愛菜に、翼と女性は俄かに驚く。
「大丈夫なの……？」
「うん、もうたくさん泣いたし。これ以上泣いてたら、おばあちゃんに怒られちゃうよ」
「そう……そうね」
「北野さん、また来るね」
愛菜のその言葉に、女性は一筋の涙を流しながら首を縦に降った。

「翼、私たちは失礼するわよ」
「え？あ、あぁ。じゃあ、僕らは失礼します」
そう言うと、翼と愛菜は女性に頭を下げ、その場を後にした。

「愛菜、いいのか？」
「えぇ」
病院のエントランスに差し掛かったときまで、愛菜は翼の顔を一切見ようとしなかった。
しかし、彼女はふと翼の方を振り向き口を開く。

「翼」
「ん？」
「お願いがあるの」
「……何だい？」
「今日あなたが締日後の休みだってことはわかってるんだけど」
「うん」
「もうちょっと、一緒にいてもらってもいい……？」
「……あぁ」
「ゴメンね……ありがとう」
「遠慮なんてしなくていいよ」
「うん、ありがとう」

翼と愛菜は、病院のターミナルから一台のタクシーを拾い、それに乗り込む。

「新宿の西口で」
運転手に行き先を告げ、二人を乗せたそれは、暗い闇の中を街の光の明るさに向かって突き進む。
車内での会話を一切することなく、二人はただ目的地まで固い沈黙を守っていった。

約３０分後ー

二人を乗せたタクシーは、目的地に到着する。
「ここは……」
翼は思わず呟いた。
「そう、微妙に懐かしいでしょ？」
「うん」
二人が目の前にしているのは、新宿西口のオフィス街に堂々とその姿を構える、愛菜が御用達のシティホテルだった。

「さぁ、夜もふけてきたし行きましょう」
「あぁ」
翼と愛菜は、まるで普通のカップルのようにホテルのエントランスへと入っていった。

「俺が光星さんに酔い潰されたあの時以来だなぁ」
ホテルの一室に入ると、翼はどこか懐かしみを感じながら言った。

「そうね」
愛菜はスプリングコートを脱ぐと、それをソファに放るように置き、ベッドに吸い込まれるように腰をおろす。

「あの時に比べたら、翼はホントにホストらしくなったわ」
「愛菜のおかけだよ。俺がここまで成長できたのも」
「そんなことないわ。翼自身がちゃんと努力をして自分を証明してきてる証拠よ」
「あ、いや……。でもありがとう。愛菜には感謝してる」
精神的に疲れている愛菜を気遣ってか、翼はどこかいつもよりも優しい口調で言った。
彼女が凛と振る舞っていても、想像以上の悲しみと寂しさで落ち込んでいるのは、翼自身も夜遅くにここに自分を連れてくる時点で気付かざるを得なかった。

「愛菜、何か飲もうか？お酒でも。今日は俺におごらせてよ」
「……うん」
どこと無く力無い愛菜の返事を聞きつつ、翼はルームサービスでシャンパンと軽食をオーダーすることにした。

「ごめんなさい翼、仕事でもないのに気をつかわせちゃって」
「いいって。こんなときは飲もう」
「うん、ありがとう……」

約２０分後ー

翼たちは、部屋に届いたシャンパンを飲み始めていた。
「よし飲もう」
「うん」
人が亡くなったこともあり、二人は「乾杯」の合図はせずにそのままシャンパンが注がれたグラ

スを口に移す。

「今日は振り回しちゃって、ホントにごめんね」
「いいって謝るのはさ。愛菜、さっきから謝ってばっかりだよ？俺にはそんな気遣いはいいからさ」
「うん……」
愛菜はそのまま無言でシャンパンを一気に飲み干す。
「ふぅ」
「大丈夫か？そんなに一気に飲んで」
「大丈夫……大丈夫よ」

『大丈夫なわけあるか』

翼はそう言いたかったが、以前自分にもショックで飲んだくれていた過去があることを思い返すと、とてもではないが言えなかった。
今は、愛菜が少しでも安心できる状態にしよう……翼はそれだけを考えていた。

その時だった。
「翼、あたしさっぱりしたいからちょっとシャワー浴びてくるね」
「え？うん、わかった」
「だから、ちょっと一人で飲んでて」
すると愛菜は、すぐにバスルームへと向かっていった。

「シャワーか…。ちょっとさっぱりしてもらった方がいいかもな」

約３０分後ー

愛菜はいつまでたっても、バスルームから出てくる気配はなかった。
おかしいと思った翼は、こっそりバスルームに近づきドアもとに耳を澄ませる。

すると、無尽蔵に流れるシャワーの音の中に、弱々しく崩れていくような女の声がするのを微かにだが彼の耳は捉えた。

「愛菜？いい加減遅いけどどうしたんだ？」
「……翼……」
心の中でもしものことを想像していた翼の中に、一つの安堵感が生まれる。
すると、バスルームの中の愛菜から、思いもよらない言葉が返ってきた。

「翼……」
「なに？」
「こっちに来て……」
「えっ？」

予想外のことに、翼は目を丸くする。
「だって愛菜、今シャワー浴びてるんだろ？」
「イヤ……？」
「いや、そんなことはないけど……」
「じゃあお願い……一緒にいて……」
次第に彼女の言葉に力が無くなっていくのを感じた翼は、やむを得ずシャワーの音が続いていくバスルームの中に入ることにした。

「入るよ？」
翼は一言断りを入れ、バスルームの中へと足を踏み入れた。
シャワーの音がよりハッキリすると同時に、蒸気に乗った石鹸の香りがフワッとその空間を舞う。
愛菜がいるバスタブは、白いシャワーカーテンで仕切られている。

「愛菜？」
「服を脱いでこっちに来て……」
翼が呼びかけると、愛菜は一言そう答えた。

「いいのか？俺が入っても」
「……」

愛菜はそれ以上は答えなかった。

翼は自らの服を脱ぎ、シャワーカーテンの向こう側に入ることにした。

『愛菜、やっぱり強がって気を張ってたんだな……』

そこらじゅうに雑に散らかされた愛菜の衣服を見て、翼はそう思った。
すると彼は、カットソー・ミニスカート・下着を丁寧にたたんで洗面台の脇にある籠に置き、自らの衣服を脱ぎ始めた。
どこか恥ずかしさはあったものの、全裸となった翼はカーテンの前に立った。

「愛菜、入るよ」
そう言って、呆気ないほどに軽いシャワーカーテンをするりと横に開いた。

「愛菜！」

バスタブの中にガクリとしゃがみ込む愛菜。

それを見つめる翼。

シャワーから容赦ない雨のように降り注ぐ温かい粒が、震えながら沈み込んでいる愛菜の美しく華奢なその身体を濡らしていた。

「おばあちゃん……うっ……えっ」
バスタブに激しく落ちるシャワーの音に雑じり、愛菜の弱々しい声が翼に伝わっていく。

「愛菜…」

翼は、彼女の名前を呼ぶと、それ以上は何も言わなかった。

ただ、何も言わず、

悲しみに臥せる愛菜の頭をギュッと抱きしめていた。

「翼……」

「今は、何も考えるな……」

「うん……」

愛菜は、ぐっしょり濡れたその身体を翼にピタリと埋めた。

翼は、その多量の涙で濡れ、今にも崩れていきそうな愛菜を、ただその腕で支えた。

ただの情か、恋心か、仕事だからかはわからなかった。

ただ、翼の心の中から沸き上がる一つの気持ちが、愛菜を放ってはおけなかった。

気がつけば、二人は互いの背中を両方の手でまさぐっていた。

「翼、お願い……」

「何だ……？」

「今日だけは……今夜だけでもいいから……客じゃなくて、あたしを一人の女でいさせて……！」

翼と愛菜は、重ね合わせる唇を合図に、激しく、どこか儚く、互いを求め合った。

無限に降り注ぐ温かい雨が深い悲しみを洗い流すかのように、

二人の身体を、濡らしていった。

第１５章へ

15-1

「んんっ……」
カーテンの狭い隙間から差し込む一筋の明るい日の光に、ベッドの上の翼の目は覚めた。

「朝か…」
そこを睨みながら右手で目をこすると、彼の左胸部にピタリと頭を埋め眠りこける人物の姿があった。

『愛菜。そうだ、確か俺たちはー』

翼は、しわくちゃに乱れた白い布団の中に全裸で横たわる自分たちの姿を見ては、昨夜のことを思い返していた。

「そうか……そうだったんだよな」
翼はすっかりくしゃくしゃになった愛菜の髪の毛を軽く撫でる。

「う……ん……」
愛菜が色めいた甘い吐息とともに声を漏らしながら、その瞳を徐々に開ける。

「翼……」
「愛菜、おはよう」
「おはよう……。あれっ？あたしたち……」
「うん」
愛菜は、今の自分たちの状態に改めて気付くと、ほんのり顔を赤らめる。

「はずかしい」
「ステキだったよ」
「ばかっ」
頬を膨らます愛菜は、その弾力と張りのある白い胸をギュッと押し付けながら翼に抱き着いた。

「翼も……よかったよ」

「そうなんだ」
「うん」
翼と愛菜は、再び互いの背中に手を回し、固くロープを結ぶかのように舌を絡め合った。

「翼、ありがとう」
「えっ？」
「翼のおかげで、少し元気になれたかも」
「そうか……よかったよ」
翼は愛菜の乱れた髪の毛を直すように軽く撫でる。
その際に、彼に抱き着き甘える彼女の姿は、普段の愛菜からは想像はできない、純粋無垢な少女そのものだった。
翼は、それが意外でならなかった。

「起きようかな」
そう言って、ムクリと起き上がる愛菜。
美しいラインで描いたようなその華奢な身体は、全裸になっていることで、ますますその繊細な白さを表していた。
しかし、その時だった。

『ん？あれは何だ？？』

翼は、起き上がった愛菜の背中の下に、ある小さな模様のようなものを見つける。
薄暗い部屋の中をぼんやりと浮かび上がっている銀色のそれは、一本の縄のような細い物に絡められた鳥の羽根を形どっていた。

「……？？」
翼はそれに目がくぎづけになったまま動かなかった。

「さてっ、カーテン開けようか」
片手に持ったバスタオルで前を隠した愛菜がカーテンを開けると、眩しいばかりの光が一瞬にして部屋全体に行き渡る。

「わっ」

翼は眩しさのあまり目を閉じた。
その際に、光に照らされた愛菜のボディラインが輝きによって浮き出ていく。

「いい天気……」
愛菜は、窓から映る晴れた景色を見つめながら身体を伸ばした。
「……」
翼は目を擦りながら愛菜の後ろ姿を凝視したが、さっきの模様のようなものは、幻だったかのように痕跡のかけらもなかった。
確認できたのは、いつもの彼女の白い素肌そのものだった。

『おかしいな、確かにさっきー』

「翼？」
「あっ」
いつの間にかバスタオルで身体を覆っていた愛菜の声で、翼はハッとする。
「どうしたの？ぼーっとしちゃって」
「あ、いや……」
「？」
「やっぱり、スタイルいいなぁ～と思って」
「もうエッチ！どこ見てるのよバカ！」
愛菜は赤くなりながらも、どこか嬉しそうに顔を背けた。
しかし、一方の翼は何とかごまかせたとホッとしていた。

『あんな模様、昨日シャワー浴びてた時にはなかったはず……』

自分の寝ぼけによる見間違いかー
翼は気にかかっていたものの、これ以上考え込むのはやめることにした。
愛菜本人に詮索することもできるが、昨日の病院での一件もあることを踏まえると、今は聞くべきでないと判断した。

「翼っ」
「何だ？」
「ありがとうね。昨日はホント寂しくて潰れそうだったから」
「愛菜、俺は何もー」
「翼が、いてくれてよかった……」
愛菜は涙ぐみ、一筋の涙を零す。

「愛菜、大丈夫か？」
「うん……。今日、もう一度おばあちゃんがいる病院行ってくるわ。翼は今日から仕事でしょ？だから帰って少し休んで」
「あぁ……」
翼と愛菜は、その後別々にシャワーと着替えを済ませると、部屋を出ることにした。

「ありがとう……」
愛菜は再び翼に抱きつき、顔を埋めた。
ホテルを出て愛菜と別れた翼は、一人タクシーに乗り自宅への帰路についた。

「ふぅ」
シートにもたれ掛かれ深いため息をつく彼の脳裏には、愛菜のことが強くあった。

『天馬さんが前に言っていた、愛菜が悩んでることって……このことだったんだな』

それと同時に、翼の中には愛菜を抱いた感触が未だ鮮明に残っていた。

『最後に紗恵を抱いて以来、かな』

複雑に絡まる思いを抱きつつ、翼はタクシーから見える輝く青い空を見つめていた。

１時間後ー

翼は、自宅のベッドにてドサリと倒れるように横になった。
「ふぅ……」
ふと彼の口から出るため息が、昨日のからのことを思い返させる。
「……」
部屋の天井をを見上げる彼のまぶたは、次第に重さを増していった。

『どこかで……どこかで見たことがある……あの、縛られた羽根のような印』

心の中でそう呟いているうちに、翼は深い眠りへと入っていった。
何か不思議なものに吸い込まれていくようにー。

翼は一つの夢を見た。

『ん？』

『それは……』

『セ……イバ……カ……イ』

『そんな……』

『そんなはずは！』

「そんなはずはっ……！」

翼はそう叫びながら、目をカッと開けた。
「ハァ……ハァ……」
上半身を起こした彼の額や首は、拭い切れないほどの汗で滲んでいる。

「何だったんだ、さっきの夢は……」
そうつぶやきながら、彼は右手をこめかみに当てる。
ハッキリと記憶には残らない不気味さだけが残る夢……。
翼の脳裏には、それだけが強く刻まれていた。

「一体何だったんだ」

そう言いながら、翼は時計を見ようと部屋の中を見渡した。
時刻は午後２時半。
昼下がりになり、店への出勤時間である午後４時へと近づこうとしていた。

「店、行かなきゃな」
翼は重い体を起こして、出勤への準備を始めた。

「**……**」
翼はスーツに袖を通しながらも、さっきの夢のことが気になっていた。
「時間だ、行くか」
どこか蟠りは残りつつも、翼はそのまま家を出た。

たかが夢だ、気にしててもしょうがないー

そう思うことにした。

３０分後ー

翼は【**Club Pegasus**】のあるビルのエレベーターの中に入ろうとしていた。

「翼くん」
背後から翼に声をかけてきたのは、由宇だった。

「由宇さん、おはようございます」
「おはよう」
挨拶を交わした二人は、そのままエレベーターにて４Ｆへと移動する。

「今更だけどさ」
「えっ？」
「翼くん、変わったよな」
「急にどうしたんですか？由宇さん」
「入店のときは、正直何だコイツって思ってたけど。今はすっかりホストらしくなってさ。新人

からも優しい先輩だって評判だよ」
「そんな」
「これも、愛菜さんのおかげなのかな」

『愛菜ー』

由宇の口から出た彼女の名前で、翼は昨夜の出来事を思い出す。

「そうかもしれないですね。俺も彼女にはすごく感謝しています」
「言ってくれるね」
エレベーターのドアが開くとほぼ同時に、由宇はフッと笑みを零す。

「俺は別にいいけど、うかうかしてられないな。光星さんは……。じゃあ、今日もがんばろうか」
そう言うと、由宇は足速に店の中へと入っていった。

「おはようございますっ！」
翼はエントランスから大きい声で言った。

「おはよう翼っ！」
「翼さん、おはようございます！」
周囲のホスト達が、笑顔で迎えるように翼に挨拶を返していく。
入店当初と比べて徐々に変わってきた周囲の反応が、彼の中の仕事の手応えをさらに実感させる。

「翼くんっ！おはよう！」
今日も元気いっぱいの羽月が、張り上げるような大きな声で挨拶をする。

「おはよう」
「翼くん、こないだはゴメンな」
「えっ？」
「俺、めっちゃ酔ってもうて……」

羽月は、恥ずかしそうに頭を掻きながら言った。

「気にするな。でも、これから飲み方気をつけろよ」
「うんっ、おおきにっ！さぁ、今日もがんばろな！」
羽月は翼にそう言いながら、ニカッと笑った。

「あっ！」
翼は何かを思い出したように叫んだ。
「翼くん、急にどないしたん？」
「実はさ、これ」
首を傾げる羽月を前に、翼はジャケットの胸ポケットにゴソゴソと手を入れる。
すると、そこからスッと一枚の写真を取り出した。

「あっ！」
羽月は思わず声を上げる。
「この間愛菜と三人で飲んだ後タクシーで送ったときに、俺の足元に落ちてたんだ」
翼がそう言うと、目を大きく広げた羽月はその写真を彼の手から強引に奪い取る。

「わっ」
「これ、よかったわぁ……翼くんが持っとってくれたんやぁ！」
「やっぱり、君のだったのか」
「うん、めっちゃ大切なものやから……。ホンマどこに落としたかって心配で心配で」
羽月は泣きそうになりながら、手に取った写真を見つめる。
すると彼は、突然目の前の翼にガバッと抱き着く。

「わっ、おいっ！」
「翼くんおおきに、ありがとう！これ拾ってくれて、めっちゃ嬉しいわぁ～☆」
自らの頬を翼に擦り付ける羽月。

「おっ、おい！やめろって！気色悪いな……！」
「あっ、ゴメンな翼くん。つい嬉しゅうて」
羽月は翼から離れ、僅かに乱した彼の服をササッと整える。
翼は、そんな嬉しそうな羽月の手にある写真を改まるように見つめる。

「なぁ、そんなに大切なものなのか？それ」
「え？うん」

羽月はフッと寂しげな表情を浮かべる。

「あのさ、確認のためにちょっと見させてもらったんだけど……もしかしてそれ」
翼が尋ねると、羽月は切なげな笑みを浮かべながら口を開いた。

「あぁ、これはガキの頃の俺やねん。わりとかわいいやろ？んで……」
羽月は写真に写る少女を指差す。

「こっちは、俺のお姉ちゃんや」
「お姉さん？」
翼は笑う写真の中の姉弟を改めて見つめた。
とても楽しげに姉と手を繋ぐ少年"直人"には、思っていた通り羽月の面影を感じていた。
そして弟の横でかわいらしい笑顔を見せる、姉"茜"。

あどけない無邪気さを感じさせるその古い写真を大切そうに手に持つ羽月を、翼は神妙に見つめる。

「ホンマ、よかった……」
その時、羽月の頬に一筋の涙が零れる。
「ホントに、君にとって大切なんだな」
「うん」

しかし、その時翼は胸の中でハッとした。

『たしか彼の家族は……』

「なぁ、答えたくないならいいんだけど一つ聞いてもいいかな？」
「何や翼くん、改まって？」
翼は一度息を呑んでから、再び口を開いた。

「前一緒に飲んだとき、君の家族はバラバラにって言ってたけど、もしかして……？」
突然の翼からの質問に一瞬目を丸くするものの、羽月はすぐに答えた。

「うん。前酔ったときにどこまで言ったかわからへんけど……俺、１月に東京来るまで１０年間京都の親戚んとこにいてな。その前はこっちにいたんや」
「東京に？」
「うん。詳しく言えへんこともわからへんこともあるけど、どこに引き取られたかもわからずに離ればなれになったアネキが、東京の新宿歌舞伎町で働いとるって話をつい半年くらい前に聞いたんや」
羽月の瞳が次第に遠くを見つめる。
彼は続けた。

「ホンマか嘘かわからへん話やけど……俺、いてもたってもいれへんようなって。俺を預かってくれてたじいちゃんに言って東京に来たんや。"いつか絶対、姉ちゃん捜してくる"って」
羽月の口調が少しずつだが強くなっていくのを翼は感じた。
羽月はさらに続けた。

15-2

「もちろん何のあてもないで。けどな、もしホンマに姉ちゃ……アネキが歌舞伎町で元気に生きておるとしたら、と思ったら……。俺、前からやりたかったホストでいっぱい稼いで、アネキに楽して欲しいんやて。俺、ガキの頃アネキに迷惑ばっかかけとったから。他にも色々できることあるかもしれへんけど、アホの俺にはこんなことしかできんのや……」
いつの間にか涙声になっている羽月を、翼はただじっと見つめた。

「だから、これ失くしたときはどうしようかと思うたわ。俺にとっては、もうたった一人かもしれん肉親やから」
羽月は泣いていた。
泣き顔を隠すように、その手にある写真を顔の前につけた。

『たった一人の肉親……』

翼は複雑な想いを抱いていた。

「あっ、ゴメン翼くん……シラフなのにこんなみっともないとこ見せてもうて」
羽月は目をゴシゴシ拭いながら言った。
「あ、いや……」
「ホンマに写真おおきにな。あ、そろそろミーティングや」
羽月がそそくさとフロアに行こうとした時だった。

「羽月！」
翼がそう口にしたとき、羽月の動きが背中越しにピタリと止まった。

「お姉さん、見つかるといいな」
翼がそう言うと、羽月はコクッと頷き、少しずつ肩で笑い始めた。

「どうしたんだ？急に笑ったりして」
すると、羽月はくるりと振り返る。
「初めてやな～と思って。翼くんが俺のこと名前で呼んでくれたの！」

翼と羽月は、互いに見合うとフッと笑みを零した。
「さっ、今日からまた仕事がんばろう！」
羽月は、そう言いながらフロアの方に元気に向かっていった。

翼は言えなかった。

どんな事実があったか不明とはいえ、

自分が、その例の事情に関わったかもしれない"浅川"の血を引いていることなど、

彼の口からは口が裂けても言えなかった。

そう心に抱きながら、

翼も仕事と言う名の戦場へと向かっていった。

「よし、今日もやるぞっ！！」
天馬の掛け声を狼煙に、今日の【**Club Pegasus**】の営業は幕を開けた。
翼たちホストも、それぞれのいつも通りの仕事に入っていく。

「翼、ちょっといいか？」
天馬が翼に話し掛ける。
「社長、何ですか？」
「もう聞かなくても知っていると思うが、愛菜の例のおばあさんのことー」
「えぇ**...**」

「さっきあいつからメールが来たよ。翼がいてくれて助かったってな。これから葬儀やら何やらで辛い時期だろうからな。何かあったらお前が支えてやれ」
「はい」
「もちろん、他のお客のことも忘れるなよ！」
天馬は、そう言うと翼の肩をポンと叩きキャッシャーの方へと向かっていった。

「よしっ！」
翼は、気を改めるように今日の仕事へと入っていった。

PM 6:00－

【**Club Pegasus**】への客足は途絶えることはなく、席は次々と女性客の姿で埋めつくされていった。
もちろん、翼の指名客も来店し始めていた。

「翼っ！」
明るい巻き髪に、今にも見えそうなミニスカート姿のサングラスをかけた一人の客が翼の名前を呼んだ。
「梨麻！」
「へへ～来ちゃった☆」
以前とはさらに比べものにならないほどさらに派手になった梨麻の姿に、翼も驚きを見せる。

「いらっしゃい！また露出が増えたね～」
「えへっ☆だって翼に見てほしかったんだもん！」
「またまた」
翼と梨麻は、そう話しながらソファに座る。

「ねぇねぇ翼聞いて！私ね、店でついに**No.1**になったのぉ！」
「ホントに？すごいじゃん梨麻！」
「あはっ！果穂ちゃんにもついに勝ったしね、これも翼がいつも励ましてくれたおかげだよ☆いつもありがとね」
梨麻はそう言いながら、翼の腕に胸を押し付けるようにギュッとしがみつく。

「梨麻ちゃんはもう酔ったんですか～？」

「はーい♪」
翼と梨麻は、とても楽しげにその場の雰囲気を作っていた。

「すげぇよな〜翼さん、愛菜さん以外にあんな可愛い女の子が太客にいるんだもんな〜」
「あぁ。ダメホストなんて言われてたらしいけど、そんな面影なんて全くねぇよ」
二人の新人ホストがそう話していたときだった。

「お前ら何言ってんだ？」
ギロリと二人を睨み据えながら言ったのは光星だった。

「光星さん…」
「お前らよぉ、あんなカスを褒めてる暇があったらてめぇの指名でも取りやがれ！」
「……はい」
光星は「チッ」と口を鳴らすと、ヅカヅカとその場から消えていった。

「何だよあいつ……翼さんに今にも抜かされそうなくせによ」
「なぁ」
二人がそう話しているのを、翔悟は離れたところでじっと見ていた。
そこに天馬がやってくる。

「光星のやつ、かなり焦ってるな」
「社長にもそう見えますか？」
「あからさまだ。自分の客になるかもしれないはずだったあの梨麻って子を翼に取られ、しかも太い客に育ったんだからな」
「ですかね……あいつももうちょっと骨のある奴だと思うんですがー」
翔悟はため息をつくように言うと、天馬は彼の肩に手を置きながら口を開く。

「翔悟、お前も気をつけた方がいいぞ」
「えっ？」
「翼には他にも客が……特に愛菜がいることを忘れるな。うかうかしてると、お前まで食われかねないぞ」
「社長……社長は俺と翼とどっちが上だと思ってるんですか？俺があいつに負けるなんてー」
「どれだけ実力があろうが客がいようが、ホストは結果がすべてだ。お前も十分すぎるほどわかっているだろう？」

そう言葉を交わすと、天馬と翔悟は接客している翼を見つめた。

『翼……か』

「翼、Ｂ卓に千春さんだ！」
「はいっ！梨麻、ちょっと待ってて」
佐伯に言われ、翼は梨麻といたテーブルを後にし、新しく来店した女性客の方へと向かった。

二人だけではなく、光星も由宇も、佐伯や他のホストも、そして羽月も……皆が認めていた。
入店当初からホストとして凄まじいほどに成長した翼の姿は、まさに光り輝いていく磨かれた原石そのものだったことをー。

数時間後ー

【Pegasus】の営業は終わった。
「ちょっと楓さんのとこで食べてこうかな」
翼は、やや疲れを見せながら、一人ふらりとネオンの中を歩いていた。
歩くこと数分、看板の明かりのついていない"楓"の前に着くと、そこには柴犬のチョコと戯れている羽月の姿があった。

「あれ、羽月？」
「え？あ、翼くん！呼ばれ慣れんからびっくりしたわ！」
「ここでどうしたんだ？」
「あぁ、見てやこれ」
羽月が指差す先には、引き戸に接着された一枚の貼り紙があった。
翼はそこに書いてある内容を口にし始めた。

「"申し訳ありませんが、都合により休ませていただきます……楓"。休みなのか今日、定休日でもないのに？」
「そうみたいなんや。俺腹減ったからソッコー来たんやけど…残念やな」

『どうしたんだろう？』

翼は不思議に思いつつも、今日の"楓"での食事は諦めることにした。

「ラーメンでも食べてくか」
「おっ、えぇなそれ！チョコ、またな」
翼と羽月は、どこか切なそうなチョコの頭を撫でると、その場を後にした。

２時間後ー

帰宅していた翼のケータイが鳴った。
彼は、直ぐさま着信を確認する。

「愛菜」
着信は愛菜からのものだった。
翼はその後の彼女のことが気になってか、すぐにそれに応答した。

「もしもし、愛菜？」

第１６章へ

16-1

愛菜との電話を交わしてから一週間が経過ー

翼は愛菜に呼ばれ、とある墓地・"聖ミカエル霊園"へと来ていた。

「愛菜、一体何でこんなところに俺を？」
翼は辺りを見回した。
所々ステンドグラスに彩られた、白を基調にした入口からすぐの小綺麗な教会・そして見渡す限りの十字架の墓標は、神話のような神々しさを醸し出している。
大地に無数に突き刺さるように広がる白き十字架たちは、翼に不思議な緊張感を与えていた。

「一体ここは？」
敷地内に足を踏み入れた翼がそう呟きながら歩いていると、教会の扉から一人の外国人神父が姿を現す。
すると神父は翼のもとへとゆっくり歩いてくる。
翼も神父の存在に気付き、彼に聞いてみることにした。

「えっと……Japanese speaking OK？」
翼が慣れない英語で問い掛けると、神父はにこりと微笑み口を開く。

「ツバサさん、ですネ？」
神父が片言の日本語を口にしたことで、翼の中の妙な緊張がするりと解ける。

「はい、僕が翼ですが……ここで女の子と待ち合わせなんですが」
「彼女でしたラ、アチラの教会の礼拝堂にいまス。さぁドウゾ」
神父は、翼を警戒することなく簡単に教会の中へと招き入れる。
翼は神父に一礼すると、彼の後についていった。

入っていった教会の中の礼拝堂は、ステンドグラスから差し込む光と、ユラユラと動く陽炎のような蝋燭の炎が薄暗い中を照らしていた。
その幻想的な中を、響き渡るパイプオルガンの音が切なく儚いメロディを奏でている。

『何なんだここは……』

ゆっくり、ゆっくりと奥行きのある道を神父の後に沿って歩く翼は、アロマキャンドルの匂いが鼻を突く別世界のようなその空間に胸が締め付けられるような感覚を覚える。

「アチラです」
ピタリと立ち止まった神父は、礼拝堂の奥の方へ手をかざした。

そこには、祭壇前で膝をついて祈っている一人の女性の華奢な後ろ姿があった。
握った両手を合わせている彼女の向いている方には、子供をその手に抱く聖母の像の存在があった。

「愛菜？」
翼が声をかけた瞬間、オルガンのメロディがピタッと止まる。
すると、彼女はスッと後ろを振り向いた。

「翼、来てくれたのね」
「愛菜、ここは一体？」
「お祈りも済んだから……場所を移して、そこで話しましょう。神父さま、ありがとう」

愛菜は一礼すると、神父はにこやかに頷く。
そして、彼女は翼の手を取り入口へとゆっくり歩き始めた。

「……」
翼は、ただ無言で自らの手を取る愛菜についていった。
教会の外の日差しがが、二人を暖かく包み込む。

「ビックリしたでしょう？いきなりこんなところに呼び出して」
「まあ。でも、どうしたんだ？」
「うん」
愛菜は、ゆっくり歩いていた足をピタリと止めた。

翼もそれにならう。
すると、彼女は白い十字架に埋め尽くされた墓地をまっすぐ見つめていた。

「今日はね、翼に見せたい場所があるの」
「俺に？」
「そう。前から一度、あなたを連れてきたかった場所よ。さぁ、行きましょう」
「あ、あぁ」
愛菜は再び翼の手を取り、歩いていく。

「愛菜」
「なぁに？」
「大丈夫なのか？おばあさんのこと……」
愛菜は歩きながら数秒ほど黙ったが、翼の瞳を見つめながら口を開いた。

「うん、もう何とか大丈夫。ありがとう、心配してくれて」
にこやかさを見せるものの、やつれた感を漂わせる彼女の表情に、翼はどこか違和感を覚えていた。

さかのぼること一週間前の夜ー

「愛菜、どうした？」
「……」
翼はケータイごしに、愛菜と話していた。

ただ黙って、彼女の言葉に耳を傾け、頷いていた。

「わかった……」

翼は、直ぐさま部屋を飛び出し、愛菜に告げられたある場所へと向かっていった。

１時間後ー

タクシーをおりた翼は、外観が白黒の旗で被われた一軒家の目の前にいた。
所々には、きれいにまとめられた菊の花たちがスタンドで飾られている。
それらを目にした翼は、そこのあまりにも静かな雰囲気に息を呑んだ。

「行くか」
翼はそう呟きながら、ゆっくりとその中へと足を運んでいく。
飾られた外観からはわからなかったせいか、そこは木造の古い一階建ての一軒家だった。
辺りを見回すと、ドアが一つ翼の前に現れる。
インターフォンがないその木造のドアを、彼はノックすることにした。

「愛菜？いるのか？」
ノックしながらドアごしに声をかける翼。
すると、意外にも早くそのドアは開かれた。

「翼……」
中から現れたのは、黒い喪服に身を包んだ愛菜だった。
髪の毛もストレートにおろしているせいか、いつものきらびやかな雰囲気を感じさせている彼女とは明らかに違っていることに、翼も違和感を覚えていた。

「愛菜……」
「ありがとう……仕事後で疲れてるのに来てくれて」
その時、愛菜はその場でフラッと身体をよろけさせる。
「愛菜っ！」
翼は彼女の身体を両手で支えた。
「大丈夫か？」
「うん大丈夫、ちょっと疲れたのかな」
「とにかく、中へ入ろう……って、俺が入ってもいいのかな？」
「うん、入って翼……」

いつもとも、半ば元気な今朝とも違う彼女の言葉は、とても弱々しかった。
「では、失礼します……っと」
翼は彼女を心配しながらも、家の中へと入ることにした。

中へ歩いて奥の部屋に着くと、そこには木魚や火のついた蝋燭・棺など通夜の形跡を残していた。
中央には、あの時病院で亡くなった老婆の遺影が飾られている。

「他の人は？」
翼が問い掛けると、愛菜は首を横に振った。
「おばあちゃん、基本的に他に身寄りがなかったから。明日には遠い親戚の人が来てくれるらしいんだけどね。だから、今日は施設の人やおばあちゃんのお友達とお通夜あげたの」
愛菜は俯きながら言った。

「そうか」
線香の煙が昇るそこには、優しい笑顔の老婆の遺影があった。
どこと無く、愛菜と翼を見つめているかのようなその雰囲気は、重苦しい中に不思議な柔らかさを感じさせている。

「お線香、つけてあげて」
「あぁ」
愛菜に促され、翼は遺影の前の座布団に座り、一本の線香に火を燈した。
その線香を添えると、彼は静かに揃えた掌を合わせる。

数秒間ほど閉じた瞳を開けると、翼は改めて遺影を見つめた。
病院で見た老婆が亡くなる瞬間の記憶が、頭の中で甦っていく。

「優しそうなおばあさんだな…」
翼は突然そう呟いた。

「うん…」
愛菜は、静かにそれに相槌を打つ。
そして、彼女は手で隠すように顔を覆った。

「愛菜」

「うん大丈夫……大丈夫だから……」
「気張るなよ」
翼は顔を隠し背けたままの愛菜の肩に軽く手を置いた。

「うん……翼、やっぱりあたし……！」
愛菜は翼に抱き着つくと、泣いた顔を見せないように胸に顔を埋めた。

「うぅ……えっ……」
ホテルの部屋にいたときと同じように、愛菜は甘える子供ように泣いていた。
必死で泣き声を抑えながらも、その頬を伝う涙は次々と限りなく溢れ出していく。
翼は何も言わず、ただ泣きじゃくる愛菜の頭を撫でながら彼女の肩を抱いていた。

「翼ゴメン。あたし、もう絶対泣かないって決めたのにさぁ……」
「いいじゃないか泣いたってさ」
「うん……でも、でもさ……」
「愛菜」
「うん、わかってるよ、今は無理しちゃいけないってのはさ。でもー」
「でも？」
「……」

愛菜はそれ以上は何も言わなかった。
それ以上何も言えず、ただ啜り泣くだけで精一杯だった。

"弱いところを見せたくない"
きっと彼女の中にそんなプライドがあるんだということを、翼はどこと無く気付いていた。

しかし彼は何も言わず、力無く自分に寄り添う愛菜を、その重い沈黙の闇夜の中で支えるように抱きしめていた。

１時間か２時間か、二人にはわからないくらい、翼と愛菜はじっとそのまま動かなかった。
気がつくと、ずっと流れ続くと思われた愛菜の涙も止まり、彼女の頬には流しただろう溢れた涙の痕がくっきりと残っている。
今はじっと瞳を閉じている愛菜は、眠ったようにピクリとも動くことはなかった。

「……」

自分に寄り添うそんな彼女を、翼は子供をあやすように撫でていた。

「翼」
「ん？」
「疲れたでしょ……」
「いや、大丈夫だよ」
「ゴメンね……疲れてるのにたかが一人の客の事情に巻き込んじゃって」
愛菜は目を虚ろにしながら呟いた。

「気にしなくていいっていったろ？」
翼はそう言いながら、愛菜の肩をポンと叩いた。

「うん、ありがとう」
すると愛菜はスッと立ち上がり、老婆の遺影の前にヨロヨロと歩み寄る。

「おばあちゃんね」
「えっ？」
「すっごい優しかったんだよ、こんな汚れたあたしにも」
遺影を前に話し出す愛菜の横に、翼も座り疲れた体を起こすように立つ。

「おばあちゃん、優しかったな……。ホントに優しかった……」
「……愛菜」
「ねぇ翼」
「何だ？」
「人の命ってさ、ホントに意外と呆気ないんだよね。ついこないだまで元気だったかもしれない人がさ、もうしゃべらないし、自分のことを気にかけてくれることもないんだよ」
「……そうだな」

愛菜の瞳が再び潤み始める。

「あたしもね、昔は誰も人を信じてなかったからさ。誰が生きようが死のうが別に関係ないって思ってた……。でもー」
「でも？」

翼が聞き返すと、愛菜は息をスウッと吸い込んで再び口を開いた。

「やっぱりさ……自分に優しくしてくれたり、愛情を注いでくれた人が突然いなくなるってさ。やっぱり……こたえるもんね……」
「……」
「状況は違うけど、翼があの時泣きながら話してくれた自分の過去の辛さが、今は身に染みてわかるわ」
愛菜は取り出したハンカチで、スッと自分の目を拭った。
翼は、常に愛菜の視線の先にある老婆の遺影を黙って見つめる。

「おばあちゃんね、もう体も弱ってたのに、最後まで一生懸命生きてた。痴呆も少し進んでたから、あたし時間あるときはずっと病院行っておばあちゃんのこと看てた。でも……」
愛菜は一旦言葉を止めひと呼吸おくと、すぐに続けた。

「あたし、おばあちゃんのために何もできなかった……あんなに助けられたのにさ……痴呆になっても、亡くなるときまであたしのことは忘れないでいてくれたのに……」

『愛菜……』

翼は、ただ黙って愛菜の横顔を見つめていた。

「ごめんね、おばあちゃん……ごめんなさい……」

遺影に向かって謝る愛菜の瞳からは、

その夜涙は止まることはなかった。

……。

時は戻り、翼と愛菜は白い十字架だらけの霊園の中の通り道を歩いていた。

翼は時折愛菜の顔を横目で見てみるが、あの通夜のときからは想像できないほど、彼女の表情はスッキリとしていた。

「なぁに翼、さっきから見つめちゃって」
翼からの視線に、愛菜は気付いていた。
「あ、いや……思ったより元気だなぁと思ってさ」
「そりゃあれだけ泣けばね」
愛菜が軽く笑いながらウインクしてみせると、翼はどこかホッと胸を撫で下ろしたようだった。

「愛菜、これから行くのって誰かの墓参りかい？」
「そうよ」
「おばあさん……の？」
「まさか。こんな場所はおばあちゃん好まないし」
「じゃあ、誰の？」

翼が最後にそう問い掛けると、愛菜はピタリと立ち止まった。
「ついてくればわかるわ。どうしてもあなたに逢わせたいの」
そう口にすると、愛菜は再び歩きだした。
翼はどういうことか理解しがたかったものの、それ以上は何も言わず彼女についていくことにした。

また少し歩いていくと、愛菜はとある一角にある墓碑の前で立ち止まった。
「ここよっ」

翼と愛菜が立つ前には、一つの墓碑の姿があった。
「愛菜、ここが俺を連れてきたかった場所なの？」
「えぇ……」
すると愛菜は、墓碑の前に近づいて腰をおろし、持っていた花をその前にそっと差し出す。

「あなたのところに来るのも久しぶりね」
愛菜は墓碑に向かって語りだした。
すると、翼の方を振り向き彼にも傍にくるように手で招く。
翼は、無言で愛菜の真横に揃うように立ち、墓碑を見つめた。

そこには、とある女性らしき人物の名前が筆記体のローマ字で刻まれていた。
彼はそれを、ゆっくりと心の中で音読みした。

『…Mei……Fujisaki……』

翼が"彼女"の名前を読み終えると、横にいる愛菜がタイミングを計ったように口を開いた。
「翼は、この人物が誰か気になる？」
「そりゃあ……ね。誰なんだい？この名前の人は」
愛菜は視線を翼から再び墓碑に移すと、再び口を開いた。

「この子の名前は"藤崎明衣"。亡くなった私の後輩なの」
「？？」
「意味わからないのは当たり前よね、翼とは全く面識のない子なんだから」
「あぁ。でも、その人と俺が一体何で？」

「あなたには全てを話すね」

愛菜は翼の手をギュッと握ると、語り始めた。

「私がホストに行き始めたこと、私があなたを指名したのも、全てはこの子とのことから始まったの」

「この人との？」

「えぇ……。３年も前に、彼女は私と同じ店のキャストとして働いてたの。飛び抜けて容姿も良くて、女なら誰もが羨むくらいの子だった……私も含めてね」

「……」

「彼女には、大きな心の傷痕があった。愛した人たちに裏切られて大切なものも奪われて」

「……」

「そんな彼女をねじふせて支配したのは"お金"の存在だった。それらのせいで、優しかった彼女は……自分自身とお金しか信じられない人間になったの」

「……！」

その時吹き抜けた風のせいもあるのか、翼は身に覚えのある事実に、身体を僅かに震わせた。

愛菜は続けた。

「でも彼女には、新しい愛する存在ができたの。もう傷つきたくないからって理由で愛することを恐れて拒否していた彼女は、もう一度愛することに素直に向き合おうとしたわ……」

「……」

「でもー」

「……」

ひと息落ち着けると、愛菜はさらに続けた。

「その愛する存在を、お金や力ではどうにもならない"死"というカタチで失った彼女にやってきたのは……」

そこから先の部分はどうしても言いたくなかったのか、愛菜は言葉を詰まらせていた。

「愛菜、無理するなよ」

「……彼女は……自分の無力感や愛するものを再び失った極度の恐怖や絶望に耐え切れなくなって……」

愛菜は顔を背けたまま、それ以上は話さなかった。
手を握る彼女の力が翼の手を圧迫し、つけ爪の先がそれにグッと突き刺さる。

それからわずか約１分の間だが、二人の間に恐ろしく永く感じるような沈黙の時が流れた。

しかし、その沈黙が終わる頃には、愛菜は再び意を決したように話し始めた。

「彼女は最期に、天使のように微笑んで消えていったわ**……**。まるで、魂のひとかけらになるまで生き抜いたみたいに」

愛菜は遠くを見つめていた。
緩やかになった風が、彼女の髪の毛をふんわりと揺らしていく。
今も愛菜の中では、３年前の雪の舞い落ちる中に消えた"彼女"の姿が、鮮明に映し出されていた。

「そんな人がいたのか**……**」
翼は、その"明衣"という人物のことを心の中で思い描いていた。
愛菜は翼に対し頷くと、さらに続けた。

「それから変な喪失感にかられた私は、寂しさもあってかそれまで絶対に行かないと思っていたホストクラブに行ってみたの。その時行った【**Unicornis(**ユニコーン**)**】ってお店のとあるホストに心を救われたの」
「あるホスト？」
「そうよ。翼も知ってる人だけど」

『まさか』

翼はハッとしながら愛菜の顔を見た。

「その通り。当時まだ【**Unicornis**】で、あなたと同じく新人ホストだった当時２４歳の天馬のことよ。前も言ったと思うけど、天馬も昔は新人の頃の翼みたいにダサくて貧相なホストだったわ」
「ダサくて貧相で悪かったね」
「フフッ、ごめんね。天馬は当時持ち前のガッツやら気合いやらで、不器用だけど少しずつホストとして成長していったわ。私はあの時、天馬のそんながむしゃらな姿にどれだけ元気をもらったかわからない」
すると愛菜は、翼の肩にピタリと頭をくっつける。

「それに天馬はただカッコつけてるだけのチャラい男じゃない。きっとたくさんの女の人を元気付けるホストになるって思った。だから私は、天馬のことを**No.1**にしようと思ったの」
「そうだったのか**……**社長と愛菜の関係にはそんな。それが今はー」
「そう、翼のことよ。ただー」
「ただ？」
「翼には天馬とは決定的に違っていたものが一つあった」
愛菜は再び墓碑の方に視線を向けた。

「あの子**……**初めて会ったころの明衣とあなたの瞳の雰囲気がすごい似てたってこと」
「俺と明衣さんの瞳が？」
愛菜はコクリと頷いた。

「この世の何も信じていない**……**金と力に理不尽にねじふせられて、憎しみでしか自分の心を支えきれない。初めて翼と会ったとき、見事なほどにあなたとあの子がオーバーラップしたわ。だから私思ったの、天馬と似てるようで実は全く異なるタイプのホストを育ててみようって。それにー」
「それに？」
「あの子と同じ瞳をした人間が、必ずしもあんな結末になるんじゃないってことを証明したいの。不器用に傷ついてく人間がバカじゃないってことを証明したいの**……**！」

そう強く囁く愛菜の瞳は、翼から見たいつもの彼女のそれとは違っていた。
それを感じ取った翼は、愛菜に一つの質問をしてみることにした。

「愛菜、一つ聞いてもいいかな？」
「なに？」
「俺にはよくわからないけど、俺とその人にあるその接点にやたらこだわってるけど、何でな

んだ？」
「それは……」

愛菜は一瞬回答をためらったが、すぐに答えた。

「私も……昔おばあちゃんに出会うまで同じだったからよ」
「えっ？」
「おばあちゃんと出会うあの時までは、同じ瞳だったと思う……」
その瞬間、翼は愛菜の瞳が恐ろしいほどに黒く濁っていったのを見てしまった。
それは、いつもの彼女ではなく全くの『別人』のような。

「愛菜……？」
「私も昔は翼や明衣と同じだった……すべては、あんな事件があったせいで！」

『あんな……事件……？』

不思議に徐々に強く変わっていく愛菜の口調が、翼の中に戦慄すら覚えさせた。

「どうゆうことだ？」
翼は愛菜の手を握りながら尋ねた。
すると、愛菜はすぐに答えた。

「もう十年も前の話だけど。私にはね、家族がいたの」
「家族が？」
「えぇ。仲良い家族だった……」

愛菜は言葉を詰まらせるも、すぐに続きを話し始めた。
その際に、彼女の頬を涙が伝う。

「たった一人生き別れた弟を残して、みんな死んじゃったの……」

「そんな……。でも、弟さんが？」

「うん。今はどこにいるか、生きてるかすらわからないけど……」

その時、愛菜は一枚の写真をバッグから取り出した。

しかし、

何気なく覗いたその写真を見て、翼は驚愕した。

『羽月が持っていたのと同じ……！？』

翼が以前見たように、愛菜の手にあるそれには羽月が持っていたあの写真同様の仲よさ気な幼い姉弟の姿がほほ笑みながら写っていた。
その時、翼は羽月の言葉を思い出していた。

『俺、十年前に生き別れたアネキを捜しとるんやー』

翼は、横にいる愛菜のことを目を大きく開けて見つめた。
そして、愛菜は呟いた。

「もし生きているなら……元気にしているのかな、直人……」

その瞬間、翼は気付いてしまった。

今、自分の目の前にいる愛菜こそが

羽月が捜しているという

十年前に生き別れになった《彼》の実の姉だということをー

そしてその後、愛菜から語られたのは……

一人ノ少女ガ歩ムニハ堪エガタイ

凄惨ナ道程ダッタ。

第１７章へ

17-1

今から十年前の１９９Ｘ年６月。
東京某所のとある住宅街ー

そこに平和に暮らしていたと思われる一家４人の姿があった。

一家の名は"星宮家"。
そこに暮らす１５歳の長女・茜は、両親と１０歳の弟・直人とともに、明るく健やかに育っていた。

「ただいまっ！」
午後５時過ぎー
学校から帰ってきた制服姿の茜は、元気よく靴を脱ぎ家の中へと上がる。

「茜っ、中学三年生の女の子なんだから、もうちょっとおしとやかにしなさいっ！」
そんな彼女に、母が注意するように声をかける。

「はぁ〜い。あ、お母さん、今日の晩御飯はぁ？」
「カレーよ。早く着替えて茜も手伝ってちょうだい」
「はーい」
茜はそう言って、着替えるために２Ｆにある自分の部屋に行くことにした。

「あっ、それと茜」
「お母さん今度はなぁにー？」
「あんた制服のスカートちょっと短いわよ？」
「えーっ？だって学校のみんなもっと短い女の子いるもん」
「変な男でもついてきたらどうするのよ」
「こんくらいいいでしょー？彼氏いる子なんて、もっと短いんだから」
「彼氏っ？茜あんた今いるの？」
「いーなーい！じゃあ着替えるね」

茜はため息をつきながら、部屋へと上がる。

「はぁ」
部屋の中の茜は、スタンドミラーに映る自分の姿を見つめる。
「もう中三なんだし、あたしだって彼氏の一人くらい欲しいわよ」
茜は、ふくれながら制服からミニスカートの私服に着替えた。

すでにこの時点で１６７センチという高い身長と抜群のスタイルを持っていた茜。
中学三年とは思えない大人びた体型とかわいらしいルックスは、クラスでも近所でも評判だった。
しかし、男勝りなところもあるテキパキした性格のせいか、今のところ男子との付き合いなどは無いというのが現状だった。
だからせめて服装だけでも…と言った具合で、思春期真っ只中の彼女は、自分の中の女らしさを出そうと半ば必死になっていた。

「さて、母上様を手伝うかな」
茜はそう言うと、再び１Ｆのリビングへと戻ることにした。

階段を降りると、リビングの方から一人の子供の泣き声が聞こえてきた。

「あれっ？また直人かな」
リビングのドアを開けると、部屋の中のソファには背の小さい一人の男の子が座って泣いていた。

「えっ……うぇ……」
それを見た茜は、スタスタと歩いて近づき男の子の隣に腰をおろす。
「直人っ、どうしたの？」
「おねえちゃん」
直人は、弱々しい声を出しながら姉の顔を見上げた。
顔中は涙で濡れ、腫れ上がったように真っ赤になっている。
服や顔に付いた砂や埃が、彼に何があったのか茜には察しがついていた。

「また誰かにいじめられたの？」
「うん、みんな僕がチビだからって……うぅっ」
「直人、背が小さいのはしょうがないけど、直人がそうやっておどおどするから、そうゆう子達

はいじめるんだよ」
「うん……でも、ケンカするの悪いことだしこわい……」
ヒックヒックと声を漏らしながら俯く直人。
すると茜は、スッと直人の頭を抱いた。

「そうだよね。直人は優しい子だもんね」
「お姉ちゃん……」
「でもね直人、ケンカは嫌いでも、どんなに泣きたくても、男の子はどんなにつらいことがあっても負けちゃダメなんだよ」
「負けちゃダメなの？」
「そうよ。ケンカに勝つとか強いとかじゃなくてね、絶対に負けないぞってずっと思うことが大事なんだよ」
茜はそう言いながら、直人の頭を優しく撫でていた。
すると、次第に直人も泣き止み、顔も綻んでいく。

「お姉ちゃん、大好き！」
直人はそう言いながら、茜の胸にギュッと抱き着いた。
「もう、直人のエッチ！」
茜は、恥ずかしがりながら笑った。

「茜ー、ちょっと手伝ってー」
キッチンからの母の声が茜たちのところに届く。

「はーい！直人、今日カレーだって！お姉ちゃんも手伝ってくるから、たくさん食べようね」
「うん！僕、カレー大好き！」

茜はピンク色のエプロンを取り出し、ササッと身につけた。

「茜あんた、またそんなミニスカート履いて！」
「別にいいでしょ、家の中なんだから！」

何事もない平和な一日の終わりが星宮家にも訪れる。

しかし、

その日の夜を境に、

茜たちの人生は一変することになる。

そんなことを、茜と直人の姉弟は知るよしもなくー。

そして、その深夜０時ー

喉が渇いた茜は、飲み物を取りに１Ｆのリビングへと降りようとしていた。

「あれっ？」
階段を降りかけていた茜は、リビングで両親が何かを話していることに気付く。
彼女はそこで立ち止まり、耳を澄ませることにした。

「本当なの、あなた……？」
「あぁ。大変なことになってしまった」
「そんな……」
「"星羽会(セイバカイ)"をアサカワカンパニーが潰しにかかろうとしていたのは聞いていたが……まさかここまで…」

『アサカワカンパニー？何のこと……？』

隠れてその会話を聞いていた茜には、全くと言って良いほど理解できない内容だった。
しかし、両親の深刻に話している様子に、１５の彼女でもただ事ではないのは読めていた。
すると、茜はたまらずその場に飛び出していった。

「お父さん！」
「茜、お前」
「今の話、何？アサカワカンパニーとか、それが星羽会を潰そうとしてるとか」
「いや、何でもないんだ……」
「何でもないわけないでしょ！？何かお父さんとお母さん変よ！私たちに何を隠してるの！？今の星羽会に何があるの！？」

茜が大きい声で問いただすが、父は何も言わず彼女の肩に手をかける。

「茜、ホントに何でもないんだ。決してお前たちや私たちに何かあるわけじゃない。仮にそうだとしても、必ず星母様が守って下さる」

父にそう言われてか、茜は落ち着きを取り戻し、ゆっくりと頷いた。

「わかったわ……私は星母様を信じる」
茜は、すんなりと納得した態度を見せると、再び自らの部屋へと戻っていった。

『星母様が私たちを守ってくれる』

茜は、ずっとそう信じていた。

星の母"マザー・ミカエル"の教えを仰ぐ信教"星羽会"ー

茜たち星宮の家系は、生来その教えを請う直系の信徒として生きていた。
しかし、正体の知れない謎の信教という世間での偏見や差別を受けてきたため、彼らは公では正体を隠しつつも、信徒としての信仰をひそやかに続けていたのだった。

当時、世間で"宗教テロ"が騒がれた中か、茜たち星羽会も一般人からの差別的迫害を少なからず受けていたが、何とかごく日常の生活を送っていた。

しかし、茜が一抹の不安を抱いて過ごしたその翌日ー

事件は起こった。

「♪♪♪～♪♪♪～」

午後６時過ぎー
家の電話が鳴ったことに気付き、 茜はすぐに受話器を手に取った。

「もしもし、星宮ですが」

……。

「えっ」

受話器の向こうから聞こえた一言に、茜は絶句した。
すると、すぐにその場に力が抜けたように座り込む。

「茜、どうしたの？」
様子を見に来た母が話し掛けるも、茜は茫然としながら動かなかった。

「茜？」
受話器を持ったまま動かない茜は、次第に小刻みに震え始め、ゆっくりと母の顔を見上げた。

「お父さんが……事故で亡くなったって……。病院から……」

「えっ……？」

それを聞いた母も、時が止まったかのように固まった。

「もしもし、もしもし」と受話器の向こうから応答を求める声が聞こえるも、二人とも反応できる余裕すら失っていた。
突然耳にした現実を、直ぐさま受け入れるには時間がかかっていた。

約１時間後ー

病院に着いた茜達三人を待っていたのは、病室のベッドで永眠している父の姿だった。

「お父さん……？」
茜が声をかけるも、もちろん白い布に覆われ横になる父がピクリとも反応するわけもないのはわかっていたことだった。

「あなた……」
「お父さん……どうして……？」

母と直人が声をかけても、床に臥せる父から言葉が返ってくることはなく、静寂だけがその場を包んでいた。
そこにしずかに響く三人の啜り泣く声が、徐々に大きくなっていく。

「何で、どうしてよお父さん……」
茜がそう囁いたとき、後ろにいた一人の医師が彼らに話し掛けた。

「死因は、自動車整備不良による事故死だそうです。発見された現場で、自動車のタイヤが外れているのが警察に確認されたそうです…」

「そんな……お父さんが……今朝まであんなに元気だったのに」
「お父さぁぁん！！いやだぁぁあ！！」

泣きじゃくる直人の泣き声が響き始めたのが示す通り、茜たち家族の悲しみは、その夜とどまることを知らなかった。

茜は、もう永久に起きることのない父の遺体に顔を伏せ、弟の前で大声を出したいのを我慢しながら涙を流していた。

しかし

それだけでは終わらなかった。

事故死した夫の葬儀の翌日に、

今度は母が自宅で首を吊って死んでいるのを発見された。

怪死事件のように立て続けに両親が亡くなっていった現実を目の前に、

泣き崩れる直人をなだめていた茜は、死んだ魚のように動かず憔悴しきっていた。

そして、両親を亡くし孤児となった茜と直人は、

わけのわからないまま、それぞれが別の親戚に引き取られ、離ればなれに暮らしていくことを余儀なくされた。

「お姉ちゃん……」
泣き顔の直人は乗り込んだ車から、茜のことをじっと見つめた。
瞳から流れる多量の涙が、姉の彼女には見るにたえないほど愛しく、辛かった。

「直人……ちゃんとみんなの言うこと聞くんだよ。元気でね……直人」
「お姉ちゃん……お姉ちゃ～ん！！」
直人の叫びも虚しく、彼を乗せた自動車は無情にも茜のもとから走り去っていった。

「直人……」
茜は涙を流しながら、走り去る自動車から手を振る直人の姿が見えなくなるまで見続けた。

『さようなら、直人……。どんなつらいことがあっても負けちゃダメだよ…』

茜は、涙を零しながら心の中で呟いた。

「茜、何してんだい！さっさと行くよ」
「あっ、はい、すいません」
自分を引き取る叔母に促され、茜はその場から離れることにした。
１５年間暮らしていた、その家の前から……

それから半年間の茜に待っていたのは、

叔母たち一家に過剰にこき使われていく、奴隷のような日々だった。

「茜！早く洗濯と掃除も済ましなさいよ！」
「は、はい……わかりました！」

罵倒ともとれるような叔母たちの茜に対する扱いは、日を経つごとにエスカレートしていった。
必要以上に早朝に起床させ、学校以外の時間は家事などをすべてさせられ、気に入らなければやり直しまでさせられる。
叔父・叔母・そこの大学生の長男の分の家事をこなしながらの慣れない環境での労働生活は、まだ１５歳の彼女にとってしのぎを削るものだった。

高校受験を控える中学三年生として勉強もしなければならないところだが、もちろんそんな暇なども与えてくれるわけもなくー。

そしてその年の１２月ー

街はクリスマス雰囲気で彩られていく中でも、茜の生活は良くなっていくわけがなかった。

「ちょっと茜ちゃん！ちゃんとトイレは綺麗に使ってよね！こびりついてるじゃないか！」
長男が茜に言い寄ってきた。
「えっ？私知りません」
茜が言い返すと、長男はキッと顔を引き攣らせる。

「お母さーん！茜ちゃんが便器汚したくせにちゃんと掃除しないんだよ～」
「ちょっ……」
茜が言い止めようとすると、叔母はすぐにその場にやってきた。

「何よ茜、トイレ汚してたくせにちゃんと洗わないってどうゆうこと？」
「叔母さん聞いて下さい、それは私じゃなくー」
「言い訳をするなっ！！」
叔母は茜に怒鳴り付ける。

「ウチの子が嘘をついてると言うの？！居候のくせに生意気に口答えするんじゃないよっ！」
「まったく、星羽会の人はこれだから困るね……母さん」

「ホントよ。星羽会の人間を家に置いとくだけでハラハラなのに……。それにしても身体だけはいっちょ前に成長してんのねぇ～役立たずのくせに」

茜は言いたい放題言われても、唇を噛みながらずっと堪えた。
言い返したい気持ちはあっても言い返せない歯痒さが、強く噛んだ唇から一滴の血を垂らさせていた。

『いつかまた弟に逢うためー』

それだけを胸に、弱冠１５歳の茜は涙を飲んで耐え忍ぶことを続けた。

そして時は流れ、１２月２４日のクリスマス・イブのことだった。

「ただいま」

午後４時半…中学校から帰った茜は、家の中がいつもと雰囲気が違うことを察していた。

『なに……この臭い』

玄関まで漂うアルコール臭が、それに慣れていない茜の嗅覚を襲っていた。
ただ事ではないと感じ取った彼女は、直ぐさまリビングルームへと足を運んだ。

「えっ？」

そこには、仕事でその時間に家にいるはずのない会社員である叔父が、ネクタイを緩めたスーツ姿のまま、だらけるように座っていた。
彼の手にはロックグラスがあり、周りにはウイスキーや焼酎のボトルが散乱していた。
やってきた茜の存在に気付いたのか、酔って頬を赤らめていた叔父はギョロリとその視線を彼女に向けた。

「なんだぁ……茜、いつ帰った」
「叔父さん、こんな時間に何してるんですか……！？」
「何だっていいだろうがぁっ！！」
叔父は怒鳴り付けながら、今にも割れそうな勢いでロックグラスをテーブルにたたき付ける。
茜は「ヒッ」と言いながら目を閉じる。

「おい茜ぇ……」
「は、はい」
「つまみ作れぇ」
「あ、わかりました。じゃあ、鞄を部屋に置いてきたらすぐに戻って作ります」
茜は緊張した面持ちでそう言うと、自分の部屋へとそそくさと歩いていった。

「ふぅ……。叔父さん、どうしたんだろう……」
部屋の机に鞄を置いてそう呟いていたその時だった。

突然彼女がいる部屋のドアが、勢いよく「バン」と開いた。
「えっ！？」
茜が振り返ると、そこにはリビングにいるはずの叔父が立ちすくんでいた。
同時に、アルコールの臭いが部屋へと充満していく。

「お、叔父さん……？」
「……トラ」
「えっ……？？」
「リストラされちゃったんだよーん！！ギャハハハハ！！」
すでに自暴自棄状態の叔父は、強引に物を振り回すように声を上げた。

「リストラ？？」
「そう、クビだよクビ！会社クビになっちゃったよ～♪」
空回りな明るさが、目の前にいる茜には不気味にしか感じられなかった。

「叔父さん……」
すると、叔父はピタリと止まり、目の前にいる制服姿の茜を下から上まで舐めるように凝視する。
そして恐ろしいほどに目付きを鋭く変え、茜に歩み寄った。

「おっ、叔父さん！？」
「おい茜っ！何だこの短いスカートは！！」
叔父は茜のスカートを右手でギュッとわしづかみにし、そこから見える脚を見つめた。

「キャッ！叔父さん、何をっ！」
「中学生のくせにこんないやらしい身体に育ちやがって」
「イヤッ！やめて！！」
茜の制止も効かず、叔父はそのまま彼女を部屋のベッドへと押し倒した。
紺色のスカートが捲くれ、細くて白い脚があらわになる。
それを叔父はハイエナのような目付きで眺めては、酒雑じりの吐息を茜に吹きかける。

「うっ……！」
むせ返りそうな臭いが、茜の顔を背けさせる。
そんな彼女を見て、叔父はニンマリと不気味に微笑み始めた。

「よく見ればいい女だなぁ……お前の母親そっくりだ……」
叔父は舌なめずりをすると、異常なほどの強い力で茜の白いブラウスに手をかける。

「イヤァアァ！！」
裂けるような茜の悲鳴とともに、彼女の白いブラウスはビリビリと音をたてて破れていった。
そのすき間から、白いブラジャーに覆われた透き通る白い肌が姿を見せる。

「うまそうな身体だ」
「やめて！！やめて叔父さん！！イヤァ！！」
「黙れ！！！」
叔父はそう言って茜の頬を「バシッ」と叩く。

「キャアアアァ！！」

「大人しくしろ！」
叔父は、泣きながら暴れようとする茜のブラジャーを強引に剥ぎ取った。
プルンと膨らみつつも幼さを残す乳房が叔父の視界の中に現れると、彼の理性を壊すのに、そう時間は要らなかった。

もう止まらなかった。

肉食動物に食い散らかされた小動物のように、

茜は、あまりの恐怖で無抵抗なまま華奢なその身体を、多量な唾液を浴びながらむさぼりつくされ、

初めての『男』を無理矢理に刻まれた証として、

ベッドの白いシーツを、紅い鮮血で生々しく染め上げた。

気が付くと、

果てた叔父はすでにそこからいなくなり、

部屋には、乱れた制服姿のまま、仰向けで虚ろに部屋の天井を見上げる

惨殺死体のような茜だけが残った。

泣いているのか、笑っているのか、わからないほど

彼女の表情は、すでに息絶えたように動かなかった。

ただ…涙だけが、限りなく溢れていた。

それから一ヶ月以上にわたり、

叔母からの目を盗んでは、叔父からの茜に対する行為は毎日のように続いた。

いつの間にか、それに途中から気付いた長男をも加えた二人からの慰み物となり

次第に抜け殻のようになっていった茜の表情には

もう、生きる力は僅かしか残っていなかった。

「うっ……ううっ」

「ほらほら茜ちゃん、ちゃんと触らないと……」

「はぁ……はぁ……。やっぱり若い女の身体はいいもんだななぁ」

「本当だねお父さん、僕一度こんなかわいい女の子とこうゆうことしてみたかったんだぁ……。あれっ。何だこの背中の下にある羽根みたいなアザみたいなやつ」

「あぁ……よくわからんが何か、マザー何とか……って星羽会の人間特有のものらしい。まぁ、危ない星羽会の人間なんか、こうなるくらいがちょうどいいんだ」

「うわっ、茜ちゃんのスカートお父さんの痕が付きまくってるじゃ～ん。きたね～」

「母さんには内緒だぞ」

「わかってるよ～ハハハッ」

「茜、お前も他言するなよ。もし他言したらお前はここで生活できなくなって弟とは一生逢えなくなるんだからな」

「まっ、仮にここを出ても星羽会の人間を生活させてくれる人なんていないだろうけどね～ハハハッ」

"狂ってる"
茜は二人の男の手にむさ苦しく触られ、乱されながら思った。

悔しかった。

何もできない自分が、茜は悔しくてたまらなかった。

そんな茜の思いをよそに、二人の行動は、縄で縛りつける・物をくわえさせるなど、日に日にエスカレートしていき…

叔母からのしごきも重なってか、

茜の心と身体はすでに限界にきていた。

『助ケテ……直人……助ケテ……』

悲しさとつらさに顔を歪ませた茜は、心の中で弱々しくそう叫び続けていた。

そして、年明けの一月末……
ついにその時がやってきた。

「茜～、早く掃除済ませてしまいなさい！」
叔母の罵声が、よろめきながら動く痩せきった茜の耳に響く。

「あっ、はい……すいまー」
茜の言葉が不自然にそこで途切れたとき、家の中に「バタン」と倒れる音が響き渡る。

「ん？あ……茜？茜っ！？」

そのまま床に倒れた茜は、意識を失ったまま、目を覚ますことないまま病院へと運ばれていった。

第１８章へ

「……」

墓碑を前に動かずに語る愛菜を前に、翼はただ黙り込み彼女の話を聞き続ける。

愛菜は一旦「ふぅ」と一息つくと、再び"十年前"を話し始めた。

十年前・年が明けた一月末日ー

家の中でバタリと倒れた茜は、その表情を青白くしながら病院へと運ばれていった。

「茜！しっかりなさい！茜っ！！」
叔母の怒号も、未だ病室のベッドの上で意識を失っている彼女には届いているはずもなく。

「あっ、先生、茜は一体どうしちゃったんですか！？」
叔母が一人の男性医師に尋ねると、彼は冷静に答えた。

「まだ検査もすべて終わっていませんので、詳しいことは言い兼ねます。ですが、想像以上に疲労が蓄積しているのか、もうしばらくの間は目を覚まさないでしょう」
「目を覚まさないですって…？」
「えぇ。この歳の女の子が何故こんな昏睡状態なのか不思議でなりませんが……。とにかく今は安静にしてあげて下さい。とにかく、検査次第によっては、今夜だけでなくしばらくの入院が必要かもしれませんから」

医師がそう言ってその場を後にすると、叔母は口をあんぐりと開けながら愕然とする。

「入院……ですって？うちの人が会社リストラされてお金苦しいってときに……」

叔母は、病室の中で同室の患者に聞こえない程度の小さい声で愚痴のように呟いていくと、茜の入院手続きをしてはさっさと帰っていった。
その様子を、同室の別の患者の子供を見舞いに来ていた一人の老婆が神妙な表情で見ていた。

その夜、茜はまるで死んだように眠りこけ、全く起きる気配を見せなかった。
まるで、今まで溜まっていたものをわずかながらでも洗い流すかのように……

翌朝を通りこし午後３時ー

「ん……」
茜はうっすらと目を覚ました。

「……？？」
目が覚めた場所が、いつも生活している自分の部屋でなく白を基調とした病室であることに気付くまで、彼女自身わずかながら時間がかかった。
自分が寝ていたところ以外にも点在しているベッドや、それの上にいる人間…、そして白衣を来ている医師に、点滴で繋がれている自分の左腕や着慣れない現在の患者衣。

茜は、それらの事実を認識して今自分が病室にいるということをやっと自覚していた。
キョロキョロ見回していると、それに気付いた老婆が嬉しそうに彼女に歩み寄った。

「こんにちは。あなた、やっと目を覚ましたのね。昨日の夜からずっと倒れたままだったのよ」
「えっ、私が……？ここってもしかして」
「そう、病院ですよ。あっ、私はあそこにいる男の子のお見舞いに来ていてねぇ。いきなり話しかけてびっくりしたかしらねぇ」
老婆が指さす方には、おとなしげな男の子がベッドで本を読んでいた。
茜はその子を見ながら心の中で呟く。

『直人と、同じくらいかな』

表情が少し緩む茜を見て、老婆はにこりと笑顔を見せる。
「顔色も少しよくなったみたいね。じゃあ、先生か看護婦さん呼ばなきゃね」
老婆は、そっと茜のベッドのナースコールを押した。
「あ、すみません」
「いいのよ。それにしても、あなた可愛いわねぇ。お名前は？」
「あ、茜です。星宮……茜」
「あかねちゃんね。お名前も可愛いのね。私は菜津、よろしくねぇ」
"菜津(ナツ)"と名乗った老婆は、茜の手を優しく握り満面の笑みを見せた。
茜は、どこかとまどいながらも、心の内でどこか懐かしいものを感じていた。

数分後、医師と看護士が茜のもとに駆け付ける。
「茜ちゃん、目が覚めたのか。おばあちゃん、知らせてくれてありがとうございます」
「いえいえ。じゃあ、私はこれにて。茜ちゃん、またね」
医師との会話を終えた菜津は茜に一言言うと、向かいのベッドの男の子にも何やら言って病室を後にしていった。
茜は不思議そうにゆっくり歩く彼女の後ろ姿を見ていた。

「あの……」
茜は、自らの点滴を外す看護士に問い掛ける。
「なに？」
「あのおばあさんは？」
「あぁ、菜津さんのことね。あの方は、あなたの向かいにいる裕二くんって男の子のお見舞いに来てるのよ。いきなり話しかけてきて驚いたかもだけど、いい人だから大丈夫よ」
「あの男の子、お孫さんですか？」
「詳しくは言えないけど、そんなとこね。さっ、それより気分はどう？あなた、昨夜から全然目を覚まさないから、心配していたのよ」
「……すいません」

茜は小声でペコリと謝った。
すると看護士の後ろにいた男性医師が、真面目な面持ちで茜に話し掛ける。

「茜さん、具合の方はどうですか？どこか痛かったり、気持ち悪かったりするところは？」
「えっ？いや、今は特に何とも」
「……そうですか。無事目覚めたのは何よりですが、あらためて今から検査をしましょう」
「検査を？」
「えぇ。特に疲労以外これといった病状は見当たらないと思いますが、念のために……ね」
医師に促されるまま、茜は検査を一度受けることにした。

数時間後ー

外もすっかり暗くなった頃、茜は病室のベッドへと戻ってきていた。

「ふぅ」
ため息をついていると、茜は病室には"裕二"と呼ばれる男の子しかいないことに気がついた。
本を読んでいる裕二は、茜からの視線に気づくと、本を読む手をピタリと止める。

「なに？」
裕二は茜にそう問いかけた。
「あ……うぅん。ちょっと、弟に似てたから」
「ふぅん」
裕二は素っ気なく言うと、再び本に目を移した。
それから特に会話をすることもなく、茜は再び横になった。
いつも家の仕事を奴隷のようにやらされていた毎日が嘘のように、彼女に久々に訪れたのんびりとした時間は、病院とはいえとても新鮮なものだった。

『ここなら……何もされずに済む……』

茜はここ一ヶ月の性的虐待とも言える日々を思い出しては、ベッドの中で肩を震わせた。

そんな彼女を、向かいのベッドの裕二はじっと見つめていた。

翌日ー

時刻は昼になり、茜は目の前にある食事を苦い顔で見つめていた。

「茜ちゃん、食欲ないの？ダメよ、少しでも食べて栄養つけないと。あなた朝もろくに食べてないじゃないの」
看護士にそう言われても、茜は置いてある箸を手で持とうとすらしなかった。

「食欲が……気分が良くないんです」
茜は小さい声で呟いた。
「どうしたのかしらねぇ。昨日のお昼は普通に食べていたのに」
看護士がそう言ったときだった。

「うっ！」
茜は突然口を両手で覆った。
傍にいた看護士も、すぐにそれに気付く。
「茜ちゃん、どうしたの！？」
茜は何も言わず、病室のすぐ前にあるトイレへと駆け込んでいった。
看護士も急いでその後を追うと、通路を歩いていた何人かが何事かとそれを見ていた。

「ケホッ！ケホッ！」
茜は洗面所の水道の水をフルに出し、そこに苦しそうな表情で臥せていた。
その左手は、苦しみを抑えるように胸を支えている。
すぐに駆け付けた看護士は、そんな彼女の背中を優しく摩った。

「茜ちゃん、大丈夫！？」
「ハァ……ハァ……。はい」
一旦落ち着いた茜は、弱々しく返事をしながら呼吸を調えた。

『突然気持ち悪くなった……』

茜は鏡に映る自分を見つめながら、突然の不調に不安を募らせた。

「茜ちゃん、ベッドで休みましょう」
「はい……」
看護士に導かれるまま、茜はおとなしく病室へと戻っていった。
そんな彼女を、裕二は神妙な表情で見ていた。

数時間後ー

医師は、看護士とともに複雑そうな表情でドアかげから茜のことを見ていた。

「まさか、何てことだ……」
医師は顔をしかめながらそう呟いた。
「先生、やはりあの子には……」
「あぁ、とても酷なことだが本当のことを言わざるを得ないだろう。家の方は来ていないのか？」
「それが、手続き以来どなたもいらしてないんですよ。先程同じ学校のお友達が何人かお見舞いには見えてましたけど」
「そうか」
医師と看護士が会話を終えると、二人は意を決して茜のもとに向かって歩いていった。

「茜ちゃん」
医師が話し掛けると、茜はゆっくりとやつれた顔を見上げた。
「はい」
「ちょっと大切な話があるんだが……いいかな？家の人も一緒にいてほしいんだが」
「仕方ありません。今家のほうはドタバタしてますから……今は私一人でお話を聞きます」
「いや、そうゆうわけにはいかない。家の人には連絡したから、いらしたらその時にゆっくりとでいいから、落ち着いて冷静に答えてくれ」
医師は、茜がゆっくりウンと頷くのを確認する。

……。

その後、渋々とした態度の叔母が病院に到着すると、診察室にて医師は話を切り出し始めた。

「えっ……」
医師の言葉に、茜と叔母は絶句した。
しかし、次の言葉を発するのにそう時間はかからなかった。

「あの、私」
「言った通りだ。君が入院したとき、看護士が見たらしいんだが」
茜は自分の身体を覆い隠すように、ハンカチを抱きしめる。

「茜ちゃん、君の身体じゅうのアザや切り傷に栄養失調……普通に生活を毎日送っていたらまずできないものだ。もし君が、家庭で虐待的行為を受けているのだとしたら……」
医師はチラリと叔母の顔に視線をやった。
叔母は、引き攣った表情を見せる。

「な、なんなんですか！わ、私達が茜をちゃんと育ててないって言うの！？ちゃんと食事を与えてたのを、この子は食べなかったのよ！」
「ですが、その原因は何なのかを考えられてはいなかったんですか？」
「えっ？」
「先程も言いましたが見てください」
医師はそう言うと、茜の患者衣の袖を捲くった。

「なっ……」
叔母の目に映っていたのは、まるで凶器で殴られた痕のような赤く生々しいアザや切り傷だった。

「茜これ、どうしたの！」
「どうしたのではないでしょう！」
叔母に対し、医師の怒りの雑じった言葉が飛ぶ。

「外傷からして、これはここ最近でできたばかりではないものもあります。年頃の娘さんがこんな酷い目になっているのに、保護者のあなたがたは一体何を見ていらしたんですか！」

「あ、茜……あんた」

よろめく叔母にを、茜は見ようともせず顔を臥せる。
そんな彼女の瞳には、大きな涙の粒が溢れていた。

医師はさらに続けた。

「それだけではありません。ここ最近の彼女は生理が全くきていないことがわかり……先程、突然の吐き気に襲われました。これは、つわりの症状です」
医師の言葉に、茜と叔母は目を見開いた。

「な、何ですって？茜がつわり？それって……」
「そうです」
医師は、顔をしかめながら答えた。

「検査の結果……茜さんは、現在妊娠しています」

その場が一瞬にして蒼白へと化した。

叔母は顎が外れたかのように口を塞がず、

茜は、死んだかのように動かなかった。

「妊……娠？茜が？？茜はまだ中学生よ？なのに……」
叔母は目付きを鋭く変え、茫然自失の茜をギョロリと睨みつけては掴みかかった。

「茜ぇ！！あんた子供のくせに何ふしだらなことをしてくれてるのよぉ！！えぇ！？」
「ちょっと！やめなさい！」
看護士が、叔母を羽交い締めにしておさえる。
しかし、息を荒げる叔母の恐ろしい視線の先は茜を突き刺していた。
しかし、一方の茜は、何が何だかわからないのか、虚ろに医師を見つめていた。

「先生あたし、あたし……」
茜はそう言いながら自らの腹部に手をあてた。
その弱々しい瞳には涙がじんわりと溢れ、大粒となって頬を伝っていった。

「茜ちゃん、秘密は厳守するから本当のことを話すんだ。もし、学校のクラスの男の子との間にできた子だとしたら、それは話し合わなければならないんだよ」
医師が優しい口調でそう告げると、茜は俯きながらゆっくりと首を横に振った。

「茜ちゃん？」
「違うんです……」
「違うって、何がかな？」

茜は顔を臥せたまま、何か気味の悪いな塊のようなものを吐き出し始めるかのように、事実を語り出した。

叔父がリストラされた１２月２４日のクリスマスイヴ、初めて強姦されたこと。

それ以降一ヶ月以上に渡り、弟に逢わせることを盾に毎日のように息子とともに性的虐待を繰り返されてきたこと。

日がたつにつれ、その行為は傷やアザができるほどさらに過激になっていったこと。

茜は泣きながら、胸の内に溜まっていた思いをその場でぶちまけた。
それをすべて話し終えたときには、すでに３０分の時間が流れていた。

「そ、そんな……。ウチの人が……」
叔母はガクリと膝から崩れ落ちた。
空いた口が塞がらず、焦点の定まらない視線は、不規則に宙を泳いでいた。

そして、それと同時に深い深い沈黙が訪れた。
壊れそうな心の内を振り絞って泣き崩れている茜の声を除いてー

そして、その空間を医師が破った。
「とにかく……一度ご主人にも事実を話されて確認していただかないといけませんね」
その言葉にビクついた叔母は、医師に突然しがみつきだす。

「わっ、何ですか！」
「そんな、そんなわけありませんよ……私の夫ですよ？この子の叔父ですよ？ましてや中学生の。何かの間違いだわ。きっとこの子が嘘ついてるんだわ、きっとそうよ！」
「嘘かどうかは、ＤＮＡ鑑定などの検査をしてみればわかります。それにー」

医師は一旦一息つくと、再び口を開いた。

「こんなか弱い女の子が現にこんなに辛い事になっているのに、何てことを言うんですか！それでも保護者ですか！」
医師の怒声が鳴り響き、叔母はペタリと崩れていった。

そんな中、茜は何も言わず、ただじっと啜り泣きを続けていった。

後日ー

婦女暴行及び・虐待などの容疑で、叔父と長男は逮捕・未成年に対する最低限の生活の保護を無視し、過重労働を半年間に渡って強制してきた叔母は書類送検された。

叔父と長男の部屋に閉まってあった茜の下着数点・そして彼女の衣服に付着していた二人の体液が検出され、それらが決定的な証拠となった。

そしてそれにより、茜の身体に宿った胎児の中絶手術が、彼女自身の辛すぎるまでの決心をもとに行われることとなった。

初めての体験を親族に理不尽に奪われ、それによってできた初めての子供を堕胎しなければならないー

手術当日、様々な痛い思いが巡る茜の心と身体には、さらなる痛烈な傷痕だけが刻まれた。

しかし……若すぎる茜には心身ともに負担が大きすぎたのか、

子宮や肉体……そして心への想像以上のダメージが重なり

茜ハ、一生子供ヲ産メナイ身体ニナッタ。

それから三日後ー

ショックの連続のあまり茫然自失となった茜は、病室のベッドからピクリとも動かなかった。

その一方で、向かいのベッドの裕二を見舞いに菜津が訪れていた。

菜津は、ずっと寝たきりの茜に視線を向けると、彼女のもとに歩み寄った。

「こんにちは、茜ちゃん」
「……」
菜津が声をかけても、茜は一言も反応しなかった。

「無駄だよ菜津ばあちゃん。僕が何言っても、何も言わないんだ」
裕二がそう言うと、菜津は心配そうに茜を見つめる。

すると、菜津は裕二のためにと剥いていた林檎を、皿ごと茜の方へと持って行った。

「ちょっと、おばあちゃん！僕の林檎……！」
「また今から剥いてあげるから。茜ちゃん、林檎をここに置いておくから……少しでも食べなきゃダメよ」
菜津は林檎を茜のベッドの横に置くと、裕二のもとへとよたよた戻っていった。

「……」
その間、ベッドの中の茜は、何もせず、ただじっとしたまま動かなかった。

そして、その後のことだった。

「裕二くん、診察室に来て下さい」
「はーい。いやだな～」
裕二は言われるまま、看護士とともに診察室に移動していった。

……。

外は雨が降りつつも、どこか静まり返る病室ー

「……」
茜はむくりと起き上がると、向かいにある裕二のベッドにキラリと光る物を目にした。
彼女は、それに吸い込まれるように引き寄せられ、そのまま、病室を出ていった。

ゆっくり……ゆっくりと、
どこへ向かうかもわからず、歩いていった。

「あれっ？茜ちゃん？？」

看護士の一人が、病室にいるはずの茜の姿がないことに気がついた。

「茜ちゃん、どこ行ったのかしら」
看護士がそう呟いていると、そこに菜津が通り掛かった。

「あら、どうしたの？」
「菜津さん、茜ちゃんがどこかにいなくなっちゃって。すぐそこのトイレにはいませんし、急にいなくなる子じゃないから……」
「まぁ。裕ちゃんはまだ診察室だし、じゃあちょっと私も捜すわね」
菜津はそう言うと、いなくなった茜を捜しに病院の中を歩き回り始めた。

「しかしこの広い病院のどこに行ったのかしら」
そう言いながらキョロキョロする菜津。
すると、近くから話し声が彼女の耳に入る。

「さっき、患者さんらしき女の子がよろよろ上の方に向かって歩いてたわねぇ」
「あぁ〜、すごく可愛い顔をしてたから気になってたけど、どうしたのかしら？何か思い詰めた顔してたわねぇ」
菜津はそれを聞いて、上の階の方へと向かった。

『茜ちゃん……』

一方の茜はー

薄暗い夕刻の激しい雨が降り注ぐ中、彼女は病院の屋上を歩いていた。
ゆっくり歩く足をピタリと止めると、立ちすくみペタリとしゃがみ込む。
暗黒の空から降り続ける雨は、容赦なく彼女の華奢な身体を打ちのめしていた。

「……」

言葉を発することなく、茜はただ雨に打ちひしがれていた。
すると、彼女の右手に持つ何かが漆黒の中ギラリと鋭い輝きを放つ。

「おかしいです、茜ちゃん帰ってきてません！」
「どうしたんだ……」
医師と看護士が話していると、そこに裕二がやってきた。

「ねぇ、おばあちゃんが林檎剥くのに使ってたナイフがないんだけど、どこ行ったのかなぁ？」

「えっ？」
一同に、一瞬の緊張と悪い予感がが走る。

「……うっ……えっ……」

雨でずぶ濡れになる茜は、一人右手に光る果物ナイフを逆手に構えていた。

「もう……いや……。星母様も……直人も……助けてくれない……」

そして、ナイフの刃の切っ先を自らの腹部に向けた。

「もう赤ちゃんを作れないお腹なんて……こんなお腹なんて……」

頬を流れる雨の粒は、まるで茜から溢れ出す全ての涙の量を表すかのようにー

そして、光る刃は茜の腹部目掛けて振り下ろされていく。

「もういらない！」

ブシュッという鈍い音とともに、屋上のコンクリートに赤い血がポタポタと流れ落ちた。

振り下ろされたナイフは、不自然にも茜の腹部に突き刺さる直前で止まっていた。

いや、止めていた。

何者かの手が、茜を刺そうとしていたナイフの刃をギュッと強くにぎりしめていた。

それに気付くまで、茜は僅かな時間を要した。

「あっ……あ……」

茜が震えながら見つめる目の前には、悲しげな優しい顔で彼女を見つめる菜津の姿があった。
その老いた手は、自分を刺そうとしたナイフの刃を強く握りこんでいるために、どす黒い血が溢れだしている。

「あ……えっ……何で……」
茜がそう言いながらナイフから手を放すと、菜津はニッコリしながら握ったそれを下に置いた。

「茜ちゃん」
「えっ……」
茜はビクッとした。
しかし菜津がかけた言葉は、彼女が思いもしないものだった。

「大丈夫？風邪、ひいちゃうわ。中に戻りましょう」
菜津は痛い顔一つせず、雨に打たれながらも笑顔を崩さず茜を見つめた。

「なんで」
「？」
「何で死なせてくれなかったのよ！私なんか死んだ方がいいのに……何で私のためにそこまでになるのよ！何で……！何で……！」
言葉が詰まってか、茜はそれ以上は何も言えなかった。

すると何も言わず、菜津は泣きじゃくる茜の身体をそっと抱きしめた。
茜の服には、まだ止まらない血がじんわりと滲みだしていった。

「茜ちゃん！菜津さん！」
医師と看護士が駆け付け、茜は病室に、菜津は切った手を治療に診察室に行くこととなった。

数日後ー

茜は身元を引き取ってくれる養護施設に入るために、退院となった。

「茜ちゃん」
身の回りを整理していると、そこに菜津が姿を現した。
その両手には、包帯が厚めに巻かれている。

「元気そうね」
「あの……」
「？」
「この間は……すいませんでした」
「茜ちゃん」
「私のせいで……こんなことになっちゃって……」

茜は何度も菜津に頭を下げた。
すると菜津はニコリとしながら、口を開く。

「茜ちゃん、行きますよ」
菜津に促されるまま、茜は彼女の後についていくことになった。

「お世話になりました」
茜は医師達にそう言って病院を後にした。

１時間後ー

茜と菜津は、とある古びた一軒家に到着した。

「さっ、どうぞ茜ちゃん」
「お邪魔します。ここ、おばあちさんのおうち？」
「そうよ。あっ、コタツつけたから座ってて」
菜津はそう言うと、台所の方へとよたよた歩いていった。
茜は少しそわそわしつつも、コタツにゆっくりと足を入れていった。

『あったかい……』

久しく味わっていなかったコタツの暖かみが、茜の足から伝っていく。

「はい、茜ちゃん」
菜津は、トレイに乗せてお茶が注がれた湯呑みとクッキーを持ってきた。
包帯の巻かれているそんな彼女の手を見て、茜は顔をしかめた。

「あの……」
「？」
「ホントに、ごめんなさい……」
「いいのよ茜ちゃん」
「でも、私のせいでおばあさんの手が」
「大丈夫よこれくらい。さぁ、クッキーも食べて、形は悪いけど私が作ってみたのよ」

「これ、おばあさんが？」

茜は、そっとクッキーを一枚手に取り、口にゆっくり運んだ。

ポロリと崩れながらも、懐かしく優しい甘さが彼女の口の中に広がっていく。
一口一口クッキーを頬張る度に、茜の中では遠い昔の家庭の温もりと思い出が蘇っていた。

「うっ……えっ……」
茜はクッキーを食べながら泣いていた。
涙と鼻水が溢れて止まらなかった。
そんな彼女を、菜津はそっと抱きしめた。

「聞いたわよ。前のおうちじゃ酷い目に合わされてたんだって」
「うん……」
「お菓子も、食べさせてもらえなかったのよね」
「う……ん……」
「つらかったね……。こんなに可愛い子が……本当につらかったねぇ……茜ちゃん」
菜津は、包帯の巻かれたその手でさらに強く茜を抱きしめた。

「おばあちゃん、手が……」
「いいのよこれくらい。あなたの心の痛みやつらさに比べたら何でもないわ」
「おばあちゃん……」
「つらかったよね。でも、もう大丈夫だからね……おばあちゃんが、守ってあげるから」
優しく囁く菜津の瞳からも、一筋の涙が零れていた。

「おばあちゃん、いいの……？あたし、星羽会の人間の子だよ……それでもいいの……？おばあちゃんまで迫害されちゃうかもしれないんだよ……」
「いいに決まってるじゃない」
「あたし……生きていいの……？」
「何度も言わせないの。生きなさい……いつか、弟の直人くんに逢うんだから」

溢れる涙を抑えられず、茜は菜津の胸に抱き着き顔を埋めた。
「おばあちゃん、ごめんなさい！死ぬなんて言って、ごめんなさい…！本当は……誰かにずっと助けてほしくて。うっ……えぇっ……うっ」
まるで小さい子供のように泣き続ける茜を、菜津は優しく暖かく、その手で抱きしめ、撫でていった。

家族が離散してから、つらい日々を送ってきた茜に、やっと平穏の日々が戻ってきたのだった。

それから数日間菜津の元で生活していた茜は、あらゆる理由で家族と暮らしていない子供が入る養護施設"緑の家"に預けられることとなった。

それと同時に学校生活も復帰し、公立高校の残りの募集への応募を決意した。

「やっ、ここにきたんだね」
茜に一人の男の子が声をかけてきた。
「裕二くん。退院したの？」
「うん、まだ一時退院だけどね。まぁ、同じ事情を持つ者同士よろしく」
「えっ？」
「俺も同じ、星羽会の信者の子なんだ。ここは、宗教上や部落差別などを受けた人の子も集まるからね。……じゃっ」
「あっ」

ふと寂しげな表情を浮かべた裕二に、茜は不思議な感覚を覚えていた。

それからの茜は、残った僅かな時間を受験勉強に使った。
元々優れた学力を持っていた茜は、一本に絞った公立高校に見事合格し、晴れて高校生としての春を迎えた。

「おばあちゃん！」
入学式帰りの茜は、真っ先に菜津の元へと寄った。
「あらアッちゃん！」
「無事、高校生になりましたぁ！」

「よかったわ本当に。新しい制服似合ってて可愛いわよ」
「ありがとうっ！でもそのアッちゃんて呼び名、変じゃない？」
茜と菜津はほほ笑みながら見つめ合った。

それから時は流れ**...**

高校を難無く卒業した茜は、養護施設**"**緑の家**"**を出て働いて生活していこうと決めていた。

同時に弟を捜す時間とお金が欲しい**.....**
子供はもう産めないけれど、女として輝きたい**.....**
でも、星羽会の素性がばれたらー

それを思った彼女は、水商売の世界で働こうと決心した。

そして、日本トップの歓楽街・新宿歌舞伎町に堂々と名を馳せる【**Club Mirror**】で働くこととなった。

溢れる**"**愛情**"**の大切さを菜津から学んだ茜は、彼女の名前から一文字もらい、

自らに**"**愛菜**(**マナ**)"**という源氏名を名付け、

夜の世界へと、羽ばたいていった。

どこかで生きている弟・直人と、いつか逢える日を信じてー

「すごいよ愛菜ちゃん！ついに**No.1**だね！」
「ありがとうございます！」
すっかり容姿がキャストらしくなった愛菜がそう盛り上がる中、飛びぬけて美しい一人の少女がやってきた。

「みんな、今日からうちに新しく入る女の子だ。さっ、挨拶して」

「明衣です、藤崎明衣。よろしくお願いします」
明衣と名乗ったその少女は、愛菜に負けず劣らずの恵まれた容姿の持ち主だった。
しかし、愛菜は彼女の薄暗い瞳を見て何かを感じていた。

『この子もまさか』

ドレス姿の愛菜はスッと明衣に歩み寄った。

「あたし愛菜よ。よろしくね、明衣ちゃん」
「よろしくお願いします」

ついに出会った愛菜と明衣ー

この二人の出会いが、一つの物語を紡いでいくパズルのピースとなるなど、この時は誰も思ってもいなかった。

「こんなとこかな」
話し終えた愛菜は、涙を浮かべつつもどこかスッキリしていた。

「愛菜……」
「ありがとうね、翼」
「えっ？」
「最後まで聞いてくれて。なんか全部話したらスカッとしちゃった」

ケロッと開き直ったような彼女を見て、翼はそれ以上何も言わなかった。

「飲み、行こう。【Pegasus】に」
「あぁ」
「私、決めたよ」
「何を？」
「翼を、あの店のNo.1にする」
「愛菜」
「私がここまで選んだ男だもん。なってほしいの……女としての機能を一つもう失ってる私が好きな男にできるなんて、こんなことしかないから……」

愛菜は揺るがないその決心を、どこか寂しそうに翼に囁いた。

そして翼も、何も言わず…ただ黙ってその首を縦に振った。

第１９章へ

19-1

翼と愛菜が、ミカエル霊園を後にしたその日の夕方ー
【**Club Pegasus**】は、いつものように"一部"の時間での営業を開始しようとしていた。

「社長、さっき翼から連絡がありまして、今日は愛菜さんと同伴だそうです」
「そうか。わかった、ありがとう」
事務所のデスクに座っていた天馬は、佐伯からの報告を受けると、くわえた一本の煙草に火をつけた。

『翼のやつ、愛菜を立ち直らせたのか**……**』
心の中でそう囁きながら、天馬はフーッと煙を吹いた。

「佐伯っ」
「はい？」
「いよいよ、うちの店もまた一つ変わるかもな」
「愛菜さんと翼のことですか？」
「あぁ。あいつは俺を除いて唯一愛菜からの指名を取ったホストだ。昔から店に来るのもたまにで気まぐれだった愛菜が、突然の同伴ってことの意味がわかるか？」
「**……**社長、もしかすると」

佐伯は笑みを浮かべる天馬を見つめた。

「近々、【**Pegasus**】に何かが起こるかもな」

そして、【**Club Pegasus**】は開店前のミーティングとなった。

「お疲れッス！！」
「お疲れ様ッス！！」
天馬とホスト達の声がいつにも勝るとも劣らない元気さでぶつかる。
その際に、天馬はその場にいるホスト達全員を見渡していた。

「よしっ。佐伯、今日の同伴は？」
「えぇ、今日の同伴組は……翔悟と早紀さん・由宇とアユミさん・翼と愛菜さん・流輝(リュウキ)とルミさん……ですね」
「同伴は４組か」

すると天馬は、ミーティング席に座っている光星に視線を向けた。

「光星」
「はい、何スか？」
「最近のお前、精彩を欠いてるぞ。今日指名の予定は入ってるのか？」
「……いいえ」
光星が、視線を逸らしながらポソリと呟くと、天馬は再び口を開く。

「まぁ今日じゃなきゃダメとは言わないが、どうにかしないとならないのはお前自身がよくわかってるはずだよな？このままだと翼や羽月にまで抜かれるぞ」

天馬がそう告げると、光星は黙ったまま俯いた。
そんな光星に、天馬はそれ以上何も言おうとせずミーティングの先を続けていった。

『くっ……』

その間、光星は歯を食いしばりながら床を睨んでいた。
そんな彼を、羽月は少し離れた席から複雑な気持ちで見つめていた。

「今日も一日やるぞ！！」
天馬のその一言で、【**Club Pegasus**】は今日の営業を開始した。

「おい、羽月！」
「？」
光星が羽月に強い口調で話し掛ける。
「な、何です光星さん」

「翼の奴もそうだけどよ…」
「？？」
「売れてきたからって調子こいてやがったら、お前も承知しねぇからな」
「光星さん」
「新人ときから俺がお前を可愛がってきたこと、忘れてねぇよな？」
「も、もちろんや」
「だったらよぉ、あんまり翼の野郎なんかとつるんでんじゃねぇよ。俺ぁ知ってんだぞ？お前と翼がよくメシ食いに行ったりしてんのをよ？」
「そんな……」
「何だ羽月、お前俺に逆らう気か？だってお前はー」

光星は、何かを羽月に耳打った。

「……」
「わかったな？俺だってお前にんなこと言いたくねぇしよ。とにかく、翼の奴とは切るんだ。わかったな？」
光星は一方的に羽月にそう言うと、その場からスタスタと足速に去っていった。
羽月は突然の言い付けに、何も言うことができず、ただ目を震えるように泳がせていた。

「いらっしゃいませぇ！！」
営業を開始して１時間ほどが経過し、翔悟や由宇たち同伴組が次々と入店してきた。

「いらっしゃいませ、早紀さん」
「佐伯さんこんばんは。ちょっと今日はお祝い事なの、すぐにシャンパン持ってきてちょうだいね」
「わかりました、では御席の方にてお待ち下さいませ。いつもありがとうございます」
佐伯が深々と頭を下げると、早紀は嬉しそうに翔悟と腕を組みテーブル席へと向かっていった。

「やっぱり今日はご機嫌だね、早紀ちゃん」
「まぁね、仕事が順調だからこうゆう日はちょっと遊びたいし」
翔悟と早紀は、ソファに着いて見合っては笑っていた。

「いらっしゃいませぇ！！」

店内のホスト達が再び元気に迎える先のエントランスには、もう一件の同伴組の姿があった。
完璧なまでのきらびやかさを放つまでに身なりを整えられた、翼と愛菜の二人だった。

「おはようございます」
「こんばんは☆」
翼と愛菜がほぼ同時にそう言うと、彼らの目の前にいる佐伯は目を円くしながらキョトンとしていた。

「あ、いらっしゃいませ、愛菜さん。今日はまた一段と磨きがかかった美しさで」
「ありがとう佐伯さん！」

そう話している彼らの所に、天馬がやってきた。
「よう、愛菜」
「天馬！」
「珍しいな。愛菜が同伴で来るなんて」
「フフッ」
愛菜と天馬はニコリと笑い合った。

「愛菜、ちょっとだけ翼を借りていいか？佐伯に席まで案内させるから」
「うん、わかったわ」
天馬は佐伯に愛菜を席まで案内させたのを見送ると、そこに残った翼に目を向けた。
そして、彼の肩を強めにポンと叩く。

「翼、やったな。愛菜に同伴させるなんて、お前ホントにやるじゃないか！」
「いえ」
「俺の目に狂いはなかったのが証明されて嬉しいぜ」
天馬は嬉しそうに笑いながら言った。
そして、今度はまじめな表情で翼の肩に軽くポンと手をおく。

「社長」
「翼、愛菜のこと、ご苦労だったな」
「社長は、知っていたんですか？彼女のことを」
天馬はすぐにその質問に答えた。

「あぁ。まぁ、詳しいところまで全てを聞いたわけじゃないけどな。先日のおばあさんのことや、弟を探してるってのは聞いたぐらいか。お前も聞いたんだろ？」
「……えぇ」

「……？まぁ、愛菜はかなり辛い生い立ちをくぐり抜けてきたんだ。ホストクラブにいるときくらい楽しんでもらわないとな」
「はい」
「それが今できるのは、お前だ翼。行ってこい！」

天馬の言葉に頷くと、翼は颯爽と愛菜の待つテーブルへと向かっていった。

「愛菜、待たしてゴメン」
「うぅん、天馬と話してたんでしょ？」
「あぁ。社長もとても心配してたよ」
「そう」
愛菜はふと寂しげな笑顔を見せる。

「愛菜？」
「うぅん、何でもない。さぁ、今日は飲もうね翼！早速ドンペリいっちゃおっかな！」
「よし、今夜は飲もう！」
どこかまだ無理をしているように見えたのは気のせいだったのか……翼はそう思いながらも、今は仕事として愛菜と接することに専念した。
しかし翼には、ある意味それ以上に気にしていることがあった。

「あ～い！もちろん今日も飲もな！」
斜め向かいのテーブルで、いつもと変わらず元気に女性客に接している羽月の姿が翼の視界から中々離れることはなかった。

『羽月が、愛菜の弟……』

翼は心の中でそう呟く。

十年もの長い間を離ればなれになっていた姉と弟が、互いの正体に気付かずこんな近くに居合わせている事実に、翼はどこかいたたまれない感情を覚えていた。

「どうしたの、何か変よ翼？」
愛菜が尋ねてくると、翼は思わずハッとする。

「あっ、いや……何でもないよ」
「そう、それならいいんだけど。私が色々と連れ回したから疲れさせちゃったかと思ったの」
「いや、何でもないだホントに。さっ、もうすぐお酒来るだろうから、とことん飲もう」
翼は、羽月への視線を愛菜に悟られぬよう冷静さを保つことに努めた。

数十分後ー

「愛菜さん、本日３本目ありがとうございまーす！！！」
ドンペリが入るたびに、店内のホストたちからの盛大なコールが沸き起こった。
短時間で次々と行われるシャンパンコールに、店内にいるホストや女性客全てが、翼と愛菜のテーブルに視線を注いでいた。

「すげぇ……。さっきピンク２本開けたばっかしだろ？それでもうかよ」
「今日のペース、いつもと違くねぇ？」
「あぁ。いつもはコールは断る愛菜さんが、今日はコールさせてるしな」
店内のホスト達は、次々と盛り上がりを見せる翼と愛菜のいるテーブルを見ては驚きの声を漏らしていた。
もちろんその光景は、トップホストである翔悟や由宇・その客達の目にも見事なまでに留まっていた。

「ねぇ翔悟、あの席のホストってさぁ、何ヶ月か前に私がダメ出しした新人くんよね？」
「あぁ。早紀、どうしたんだ急に？」
「いいえ。ただ、ちょっとうるさくて生意気だと思ってね」
翔悟の横にいる早紀の鋭い横目は、数ヶ月前とは見違えるように変貌した翼を捉えていた。

「……」
同じく翔悟も翼たちのテーブルを見つめていた。
今までと違う新鮮な形で盛り上がっているその光景に、彼は苛立ちを感じていた。

「翼！Ｃ３テーブルに梨麻さんがいらっしゃったぞ！」
「わかりました」
佐伯の指示により、翼はテーブルから立ち上がる。
「ゴメン愛菜、ちょっと行ってくる」
「いいわ、私はヘルプの子に相手してもらうから行ってきて」

「あぁ。じゃ頼むな」
翼はどこか申し訳なさげにヘルプに愛菜の相手を託してテーブルから離れていった。

「翼っ！」
「梨麻いらっしゃい！ゴメン、ちょっと待たせちゃって」
「いいよぉ別に。それにしても盛り上がってるねぇ！」
「うん、今日はナンバーの人けっこう同伴とかも多かったし」
「へ～！でも、この盛り上がりは翼のお客さんのおかげでしょ？たしか愛菜さんて。いいね、あたしなんかより太いお客さんもついてて」
「さぁ～どうなのかな」
意地悪な口調の梨麻に、翼は冷静にごまかしながら答えた。
すると、梨麻はクスッと笑う。

「ゴメンね意地悪言って。ちょっとだけヤキモチ妬いちゃったの。でも、今あたしといるときだけはあたしだけを見ててよね☆」
「わかってるって、そんなの当たり前だよ」
「それを聞いて安心したっ！でも気をつけてね。あたしはそうじゃないし、みんながみんなじゃないけど、女はヤキモチ妬く生き物だからさ。さっ、飲もう☆」
梨麻はそう言うと、笑顔で翼の腕にしがみつく。

『ヤキモチ……か。ホスト始めた頃は、そんなこと考えもしなかったな』

その際に、翼はそれが頭に残って離れなかった。
売れてきたと同時にホストが背負う宿命……彼はそれを実感し始めていた。

ー方ー

愛菜のいるテーブルには、二人のヘルプが必死で盛り上げようと相手をしていた。
「いや～、やっぱり愛菜さんのお相手できて光栄っすよ！」
「えぇ、なんか他のお客さんと違うっていうか！」

向かいに座る二人のホストの言葉を片耳に、愛菜は吸った煙草の煙を吹いた。

「フー……いいわよ、そんな無理に上げなくても」
愛菜は二人を窘めるように呟いた。

「いやっ、でもやっぱり盛り上がるのがホストクラブじゃないっすかぁ！それにー」
「？」
「愛菜さんは、どうして翼さんを指名してるんですかぁ？何で翔悟さんとかじゃないんですかぁ？」
ヘルプホストのその言葉を聞いたとき、愛菜はキッと目を鋭くさせた。
それを見てか、二人の顔にも緊張の色が走る。

「あのっ……愛菜さん？」
手に持った煙草を灰皿で揉み消すと、すぐに愛菜は口を開いた。

「私がこのお店でどう楽しもうと私の勝手でしょ！？他の人がどう盛り上がって楽しんでるかは知らないけど、何であなたにそんなこと言われなきゃいけないのよ！」
愛菜はテーブルをドンと叩きながら、怒りを込めた口調で言い放った。
そのことで、ヘルプについていた二人はおろか、他のホストや女性客までもがその状況に目を向け始めていた。
愛菜は続けた。

「それにね、ここの店では"普通はこのホストを指名しなけりゃいけない"なんて決まりでもあるの！？ましてや、翼はあなたたちの先輩でしょ！？新人とはいえホストなんだから言葉を考えなさいよ！！」

愛菜の激昂に、そのテーブルを中心に周囲はシーンと沈黙が流れた。

19-2

「す、すみません愛菜さん……」
「すいませんっした……」
ヘルプのホストたちは、愛菜の態度に威圧されてか、すっかり萎縮してしまった。

「愛菜さん、どうされましたか？」
すかさずそこに内勤の佐伯が慌てて飛んでくる。

「佐伯さん、ちょっとこの人たちありえない！！」
愛菜は噴き出した怒りをおさめられないのか、佐伯に一部始終を話した。

「なるほど……わかりました。私どもの指導不足で不快な思いをさせてしまいまして、大変申し訳ありません。ほらっ、謝らないか！」
佐伯が頭を下げながらそう言うと、ヘルプの二人もそれにならう。
腰の低い佐伯の態度に、愛菜も少しずつ機嫌を取り戻していった。

「もうそんなかしこまらなくていいわよ佐伯さん。私も急にカッとなって悪かったし……あなたたちもこれから気をつけてね」
ヘルプの二人は無言のままで頭を下げると、その場から離れていった。
周囲の様子もそれに合わせて、先程までの楽しい雰囲気を取り戻していく。

「ありがとうございます愛菜さん。それでは、翼が戻るまで代わりのヘルプを付けさせますので」
佐伯がそう言うと、愛菜は何かを思い浮かんだように口を開いた。

「羽月くん、羽月くんはいるんでしょ？」
「えぇ。では、様子を見て羽月を連れて参りー」

「俺が今だけここのヘルプにつきますよ」

愛菜と佐伯は声のした方を見た。
そこには、威風堂々と立つ翔悟の姿があった。

「翔悟」
「佐伯さん、羽月は今の席を離れるまで僅かに時間があります」
「だが翔悟、お前早紀さんは？」
「大丈夫、ホントにそれまでのちょっとだけですから。それまで俺でよけりゃ一緒にいたいんですが、ダメですか？愛菜さん」

突然の翔悟の発言に、愛菜は一旦言葉を止めるものの、軽くニコリとしながら頷いた。

「どうぞ」
「ありがとうございます！翼や羽月来るまで俺がお相手させていただきますね」
そう言って、翔悟は愛菜の向かいのヘルプ席へとついた。

「失礼します！」
「久しぶりね、翔悟とこうやって向き合うなんて。【**Unicornis(**ユニコーン**)**】にいたとき以来かしら？」
「そうですね」
「あの時は現役の天馬のヘルプについてたのに、もう今や【**Pegasus**】の不動の**No.1**だもんね」
「もうかなり前の話ですよね。いただきます！」
話しながら自分のドリンクを作っていた翔悟は、愛菜に乾杯を求めた。
愛菜もそれに応じる。

「しかし何よ、さっきの**"**俺でよけりゃ**"**って改まった台詞はさ？」
「いやね、以前偶然見かけた出張ホストのサイトでそうゆうのを見てまして、それにあったんですよ。**"**俺でよけりゃ一緒に楽しい時間を**……"**ってな感じで」
「相変わらず話のネタが多いのね。ちょっとは翼にも見習わせたいくらいだわ」
愛菜はため息をつきながら笑いを零した。
翔悟もそれにテンポ良く合わせるように笑う。

「先程はうちの新人たちのせいで、申し訳ないです」
「もういいってそのことは。**No.1**だからって翔悟が謝ることじゃないでしょ？それにー」
「？」
「あなたが私と話したいのはそんなことじゃないでしょ？」
「**……**。愛菜さんにごまかしはきかないからなぁ」
すると、翔悟は間髪入れることなく自らの本題を愛菜へと切り出した。

「最初に言っておきますけど、愛菜さんの気分を損なったらすみません」
「いいわよ。そこらへんのホストじゃないんだから、あなたなら怒らずに聞くわ。まぁ、何となくはわかってるけど」
「じゃあ単刀直入に聞きます。どうして愛菜さんは、翼を選んだんですか？別に翼がダメだと言うんじゃないですが、あいつはまだホストを始めて半年に満たないし……まして天馬さんとはタイプが似ても似つかないでしょう？」
翔悟がそう告げると、愛菜は一本の新しい煙草を手に取って口にくわえた。
翔悟はすかさずそれに火を燈す。

「ありがとう」
一旦フーッと煙りを吹き呼吸を落ち着けると、愛菜は再び口を開き始めた。

「だからよ」
「えっ？」
「天馬はあなたやみんなが知ってる通りすごいホストよ。容姿も人柄も知名度も。ホストの天性を極めたような男だと思うし、今でも親しみを持ってることには変わらないわ。でもねー」
「でも？」
「天馬とどこか似てるようで実は全く違うタイプを私は求めていた。それが翼だけだったってだけよ。簡単でしょう？」
「翼が……天馬さんとどこか似てる？」
「えぇ。まぁ、深いところは私と彼にしかわからないことだけどね」
「……」

愛菜は煙を吹きながら、翔悟への言葉を終えた。
翔悟もどこか気になるところはあったものの、それ以上は追求しまいとそこで話を終えることにした。

「すいません愛菜さん、大切なお時間いただいてしまって。翼はまだかもしれませんが、すぐ羽月が来ますので」
「えぇ、ありがとう」
翔悟は席をたち、ペコリと頭を下げる。

「翔悟っ」
愛菜が突然翔悟に声をかけた。
「何ですか？」

翔悟が背中越しに答えると、愛菜は言い放った。

「私が**……**翼をここの**No.1**にするから」

そう静かに言い放った後の数秒間が、やたら長く重く二人の間を支配した。
翔悟が無言で、そこから去っていったのは、羽月の姿がちょうど見えた頃だった。

「お待たせですぅ」
羽月が入れ代わるようにやってきた。
「羽月くん！やっときたわね」
「いやぁ、翼くん他にもお客さん来とるからもうちょっとで戻ると思うさかい、それまでよろしゅう☆」
羽月はササッとグラスに酒を注ぎ、愛菜に乾杯を求めた。

「ほな、いただきますっ！」
「カンパイ！」
愛菜と羽月はグラスを合わせた。

『……？？……』

その時、愛菜はある不思議な感覚を抱いた。

「カーッ、うまいわぁ！やっぱ愛菜さんと一緒だとうまいわぁ！何か今日はいつにも増して綺麗やしね！」
羽月が楽しげに笑っている一方で、愛菜はその表情を神妙にさせていた。
羽月も彼女の様子にすぐに気付く。

「愛菜さん？」
「へっ？」
「どないしたん？」
「あぁ……。そういえば、こうやって二人で話すの初めてよね、店だけど」
「そういえばそやなぁ。感激やぁ！翼くんがうらやましいわぁ☆」
しかし、そんな喜ぶ羽月を愛菜はさりげなく見つめた。

『何だろう、この不思議な気持ち。私、この子と昔どこかで会ったような……？？』

その時だった。

「愛菜？愛菜？？」
「愛菜さーん？？」
自分を呼ぶ声にハッとしたのか、愛菜は我に返った。
すると、そこにはいつの間にか戻った翼の姿があった。

「翼ぁ……」
「ゴメン遅くなって。大丈夫か？ぼーっとしてたけど。ちょっと酔ったかな？」
「うぅん、羽月くんもいてくれたし大丈夫」
「そうか。羽月ありがとう」

翼がそう言うと、羽月はよそよそしく目を逸らした。
「あっ、いや気にせんといてや……」
「……？どうしたんだ？」

「いや、何でもあらへんよ。俺も酔ったんかなぁ」
「そうか」

"羽月にどこか懐かしいものを覚え始める愛菜"

"愛菜に恋し、親しい翼との接触を光星から禁じるよう脅された羽月"

"目の前にいる二人の正体と関係を唯一知る翼"

妙なよそよそしさや懐かしさが絡まり、

三種三様の複雑な思いが生まれていた。

「あっ、カンパイしなおそや！」
羽月がその雰囲気を破るように声を発した。
「そうだな、じゃあカンパイだ」
「そうねっ」

翼・愛菜・羽月はそれぞれグラスを持ち宙で構えた。
「それじゃあ！カンパー」

しかし、その時だった。
「翼、ちょっといいか？」

佐伯が困った様子で翼に話し掛ける。
「佐伯さん、どうしたんですか？」
「お前にお客さんのようなんだが……ちょっとエントランスに来てくれないか？何か泣きそうになってる黒髪の女の子が一人いるんだ」
「えっ？？」
「ただ、"翼"と書いた紙を見せるだけで、何故か何もしゃべらないんだ。変なジェスチャーみたいな手ぶりをするんだが……」

『しゃべれない…？手ぶり？？まさか……』

第２０章へ

20-1

何故か言葉を話さない人物が自分をたずねているー

翼は不思議とその人物が誰なのかを予感していた。

「ねぇ翼、私のことはいいからそこに行ってあげて」
愛菜も佐伯の言った言葉で事情を察したのか、翼をエントランスに行くように促す。

「あぁ、悪いな愛菜。ちょっと行ってくる。羽月、ちょっと頼む」
翼はそう言うと、すぐに席をはずし佐伯とともにエントランスへと向かっていった。

「言葉を話さん人って、まさか」
羽月は歩き去る翼の背中を見つめながら呟いていた。

小走りの翼がエントランスに着くと、そこには半ば困った顔の佐伯を横に椅子に座りながら顔を伏せる一人の黒髪の少女の姿があった。

「翼、お前の知り合いか？」
様子が気になっていたのか、天馬もその場へと姿を現す。
「はい」
翼は一言そう答えると、少女のもとへと近づいた。

「美空ちゃん、美空ちゃんだろ？」
翼が話し掛けると、"彼女"はゆっくりと顔を上げる
彼の顔を見上げる潤んだ瞳のかわいらしい少女が美空本人で間違いないと、翼の確信した表情が物語っていた。

「美空ちゃん、一体どうしたんだい？どうしてここに？」
翼がそう言うと、美空は潤んだ瞳から涙を零しながら手をスッとかざした。

『オ母サンガ、オ母サンガ……』
手話をする彼女の手ぶりと表情を見て、翼は何かただ事じゃないと確信した。

「楓さん？楓さんがどうかしたのか？」
翼がそう言うと、やり取りをしている彼らの後ろには、いつの間にか愛菜と羽月の姿もあった。

「美空さん？」
「美空ちゃん、どないしたんや！？」
顔を知っている二人の存在に気付いてか、美空は目をゴシゴシと拭う。
そんな彼女を察してか、天馬は翼に話しかけた。

「翼、ここにいても他の人間の目に入ってなんだろう。とにかく、一度彼女にも席に移ってもらえ」
「はい」
翼はすぐに頷いた。
しかしそこに佐伯がまったをかけるように口を開く。

「社長、彼女を席に移したいのはもっともなんですが、もう全席他のお客様で埋まっています」
「そうか。じゃあ彼女が差し支えなければそれまで事務所でー」
天馬がそう言いかけた時だった。

「天馬、彼女……美空さんを私達のいるテーブルに座らせてあげて」
「愛菜」
愛菜の突然の言葉に、翼と天馬は一瞬言葉を止める。

「いいのか、愛菜？」
「えぇ。彼女の様子からしてただ事じゃなさそうだし。それに、私や羽月くんも知り合いなの」
愛菜の言葉を察したのか、天馬はすぐに首を縦に振った。

「わかった、それでいいなら。翼、彼女をテーブルに案内してやれ」
「はい。美空ちゃん、一緒にこっちへ」
翼のエスコートで、立ち上がった美空はフロアの方へと歩いていった。
その様子を、エントランスの天馬たちは不思議そうに見つめる。

「彼女、翼に対して手話をやってたな」
「あの女の子、何かの事情で声を出して話すことができへんのです」
呟く天馬に対して、羽月がポソリと答える。

「そうだったのか。それにしても翼のやつ、まさか手話を理解できるなんてな。羽月、愛菜をテ

ーブルまでエスコートしてやれ」
「あっ、はいっ！」
「愛菜、すまんな」
「いいのよあやまんなくて。こっちこそお願い聞いてくれてありがとう、天馬。さっ、羽月くん戻って飲みましょう」
愛菜はそう言うと、羽月とともにフロアのテーブルへと向かって歩いていった。

『声が出せない……か』

彼らが席へ戻るのをエントランスから見守る天馬は、心の中でふとそう呟いていた。

一方ー

一足先に席へと戻った翼は、ソファへと腰掛けた美空の膝にトーションを敷き、温かいおしぼりを手渡した。

「あらためて、いらっしゃいませ！」
笑顔でそう話し掛ける翼を見て、美空は暗かった表情を僅かに和らげる。

『イツモノ翼サンジャナイミタイ』
「いつもの俺じゃないって？まぁ、そんなに気にしないで」
『ソレニ、私ホストクラブニ入ッタノッテ初メテダッタカラ……』
美空は不思議そうに店内をキョロキョロと見回した。

「そうなんだ。もしかしたら、ちょっとうるさいかもしれないけど大丈夫？」
『大丈夫デス』
白を基調にしたオシャレな店内も、流れるトランスのＢＧＭも、店中にいる多数のホスト達の姿も、そして時折コールをしながらドリンクを口にする姿も……
美空にとっては、なにもかもが初めての異空間そのものだった。
そんな時、ちょうど愛菜と羽月の二人も戻ってくる。

「美空さん、ちょっと騒がしいけど、ここなら今翼と話せるわ。大切な話なんでしょ？」
愛菜が優しい口調でそう言うと、美空は手話をサッとしながらすまなそうに頭を下げる。

「翼、彼女何て？」
「あぁ、せっかくの楽しい時間に強引に割り込んだようですみません……って」
翼が美空の手話を通訳すると、愛菜はニコリとしながら首を横に振る。

「事情はわからないけど、美空さんの顔からしてとても普通じゃないことはわかるわ。手話は私たちにはわからないから、存分に翼に話してね」
美空はあらためて愛菜に対して頭をペコリと下げた。

「翼くん、愛菜さんのお話の相手は俺がするさかい、安心してな」
「あぁ、ありがとう」
羽月と愛菜の協力を得て、翼は美空の手話による話を聞くことにした。
美空も、周りの視線に触れないように小さく手話をすることに努めた。

……。

約１０分後

翼は美空から一通りの話を聞き終えると同時に、彼女から一枚の手紙のようなものを受け取っていた。
手話による"会話"が終わった後、周囲がどれだけ騒がしくても、二人の間だけは重苦しいほど静まり返っていた。

「そんなことが……」
翼は思わずそう呟いた。
近くにいる羽月と愛菜もやはり気になるのか、翼がそう呟いた瞬間彼の表情の異変には敏感なほどに気付いていた。

『翼サン』
「えっ？」
『突然コンナコト話シテ、ホントゴメンナサイ』
「いや、いいんだよそんなの。むしろ、知らせてくれてよかった」
『私、帰リマス。コレ以上イタラ愛菜サン達ニマデモットゴ迷惑ヲカケテシマイマスカラ』
「美空ちゃん、そんな。大丈夫なのか？」
『ハイ、翼サント話セテヨカッタデス。ア、オ会計ハ』
「いいよ」
『ソンナ』
「いいから。今は、お母さんのところにいてあげて」
『ハイ、アリガトウゴザイマス』
美空は翼にペコリと頭を下げると、スッと席を立った。
それに気付いてか、羽月と愛菜も彼女の方に視線を集める。

「美空ちゃん、帰るんか？」
「大丈夫なの？」
羽月と愛菜がそう話し掛けると、美空はその時の精一杯の笑顔で二人に対して頷いた。

「俺、ちょっと下まで送ってくるから、羽月もうちょっと頼むな」
翼は羽月に一言そう言うと、美空を連れてエントランスへと向かっていった。

「翼くん、何かすごい驚いてたな。どないしたんやろ」
「……」
羽月と愛菜は、美空とともに去る翼の後ろ姿を静かに見つめていた。

「そうだっ」
ビルを降りるエレベーターの中、翼はポケットから名刺ケースを取り出していた。
すると、そこから銀色にコーディングされた一枚の名刺を抜き取り、目の前にいる美空に差し出す。

「何かあったら、この携帯に連絡して」
『……』

両手で受け取ったその名刺を潤んだ瞳で見つめながら、美空は手話で『アリガトウ』と言った。

エレベーターを降りると、そこには店内とは違う現実的な街のネオンが続いていた。

「じゃあ、俺は仕事があるからここで。ホントに大丈夫かい？」
『ハイ、大丈夫デス。翼サン、アリガトウゴザイマシタ』
「美空ちゃん、答えずらいならいいけど何でそうまでして俺をたずねてきたんだい？」
『……』
美空はそれに答えることなく、二度三度と頭を深く下げると、翼にそれ以上顔を見せることないままネオンの奥の暗闇の中に姿を埋めていった。
その際、翼は彼女の靴がやたらボロボロに汚れていたことを思い出していた。

『あの子……喋れないリスクがあるのに、俺一人を捜すために靴があんなになるまで歌舞伎町中のホストクラブの"翼"をたずねて駆け回るなんて……』
翼はどこか感慨深くネオンの光を見つめていた。

「しかし……それよりもまさか、そんなことになっていたなんて」
翼は店に戻ろうとするさなか、茫然としながらそう呟いていた。

『"セント・アリス"』

美空から伝えられたその一つの言葉が、翼の脳裏から離れることはなかった。

４Ｆにある【**Pegasus**】のエントランスに戻ると、翼はキャッシャーから何やら言い争う声を耳にした。

「何だ？」
何かと思いキャッシャーをのぞいてみると、そこには目付きを恐ろしいほど鋭くした天馬が、電話の受話器を片手に怒りの感情を口にしていた。

「その件に関しては、俺は何度も断ると言ったはずだ！もうかけてくるな！」
力まかせに受話器のスイッチを切った天馬は、息をあらげながら目の前の壁を睨んでいた。

『あの普段いつも冷静な社長が**……**』
そう思いながら翼が見ていると、天馬はその視線にハッとしたように気付く。

「おう**……**翼、彼女は？」
「あ、無事帰りました。すみません社長、突然なことでご心配かけてしまいまして」
「いや、それに関してはいい。早く愛菜のところに戻ってやれ。他のお客も待ってるぞ」
「はいっ！」
翼は天馬に一礼をすると、フロアの方へと戻っていった。
彼がいなくなったのを確認すると、天馬はキャッシャーごしに怒りの表情を見せながら呟く。

「聖**(**ヒジリ**)**のやつ**……**一体どうゆうつもりだ！」
ホストたちはおろか内勤の佐伯さえ知ることのないまま、天馬は一人そのぶつけようのない怒りの感情で空を切っていた。

「愛菜、羽月、すまない」
テーブルに戻った翼は、待たせたことを愛菜と羽月に謝った。
「いいって☆翼、美空さんの方は大丈夫だったの？」
「あぁ、まぁ」

どこと無く表情の優れない翼を、愛菜は決して見逃さなかった。

「何か、あったのね？」
「……まぁ」
「詳しくは聞かないわ。翼をたずねてきた以上、彼女にもそれなりの事情があったんだろうしね」
「いや。全ては言えないけど、愛菜や羽月にもこれだけは聞いてほしい」
翼は、深い事実に関してはうまく伏せて、愛菜と羽月に事情を話し始めた…。

約２分後ー

翼から事情の一部を耳にした愛菜と羽月は、半ば絶句していた。

「んなアホな、楓ママが重病で入院やて！？じゃあ、最近お店が開いてなかったのも」
「あぁ、その通りだ」
目を大きく開けて驚く羽月に対して、翼はただただ相槌を打った。

「あんなに元気やったママが……まさか病気やなんて……」
「美空ちゃん他に身寄りもいなくて、声が出せないのが理由で友達もできなかったらしい」
「それで……他に頼れる人がいなくて、手話を理解している翼をたずねてきたわけね。慣れないホストクラブにまで。それだけ、そんな時でも人と話せないって怖いことなのね」
「今、楓さんの容態はそんなに良くないらしい……」
「そうやったんか」
翼たちは、各々の言葉を交わした。
その際、隠してる事実や"手紙"のことがばれまいかと、翼はひとり肝を冷やしていた。

「翼、梨麻さんからボトルが入ったぞ。行ってくれ」
そこへさりげなく指示にやってきた佐伯の一言で、翼は再び席を離れることになった。

「ゴメン、ちょっとまた行ってくる」
翼は再三申し訳なさげにそう言った。
「いいって、ちゃんと仕事してきなさい」
愛菜は冷静にそう言った。

「愛菜さん、お邪魔していいですか？」
そこへ慌ただしく入れ代わるようにやってきたのは、由宇だった。

「由宇……いいわよ、どうぞ」
「どうも。羽月くん、君は外してくれていいぞ」
「あ、はい。愛菜さん、ほなまた」
由宇がヘルプ席についたと同時に、羽月は残念そうにその場から離れていった。

「愛菜さん、ホンマ翼くんを信用してんやな……」
羽月はフロアを歩きながらポソリと呟いていた。

「今日は何かと忙しい日ね。翔悟もだけど、あなたも来てくれるし」
「すみません、僕も久しぶりに愛菜さんとお話したくなって」
由宇はほのかな笑顔を見せつつも、愛菜に対してもいつも通り冷静な口調を保っていた。

「あなたも【Unicornis】の頃から相変わらずね」
「僕は昔からこうですよ。愛菜さんは、とても彼を買ってるんですね」
「まぁ……ね。あなたも翔悟みたいに気になるの？」
「別にそんなことないです。僕は翼くんを特に後押しするわけでもなければ敵視もしません。翔悟さんや光星さんに対しても同じです。誰がどうなっても、僕は自分なりにやっていければ、それでいいので」
「マイペースなのも相変わらずね」
愛菜と由宇は、そんな不思議な落ち着いた雰囲気の中でグラスを交わす。
そんな中、どこか哀愁を秘めた表情の由宇に見つめられていることに、愛菜は気付くはずもなかった。

数時間後ー

「お疲れ様っしたぁっ！！！」
【Pegasus】は、その日の営業とその後のミーティングを終え、店内のホストたちは帰宅の雰囲気へと移っていた。
そんな中、翼はガラリと空いたフロアのソファに、ひとり腰をおろしていた。

「……」
まだ開いて中身を見ていない美空から手渡された"手紙"を、翼は手に持ってはそれをずっと見つめていた。

『詳シイコトハ、ココニ書カレテイマス』

美空が手話で伝えた"事実の詳しい内容"を見るのを、翼はどこか躊躇していた。
見れば、何かとんでもないことが起こる……彼にはそんな根拠のない予感すらしていた。

『セント……アリス……』

翼の頭の中から、その言葉がどうしても離れなかった。
その時、速足でツカツカとこちらに向かってくる足音を翼の耳は捉えた。

「くっ……」

苦渋の表情のまま現れた天馬は、翼の存在に気付くこともなく彼の向かいにあるソファにドサリと腰を埋めた。

「社長」
その言葉で、天馬はやっと翼のことに気付く。

「おぅ翼か。まだ帰ってなかったのか。愛菜は？」
「今日は、亡くなったおばあさんのところに一人で行くって言って帰りました」
「そうか」
天馬はおもむろに煙草の火をつけ、「フーッ……」とため息混じりに煙を吹き出す。
いつもと天馬の様子が違うことは、翼にはハッキリとわかっていた。

「あの、社長。何かあったんですか？」
「……」
翼がたずねても、天馬は無言で煙草を吸い続けていた。
しかし、手に持ったその煙草を灰皿にて揉み消した瞬間、彼は周囲に他の人間がいないことを確認すると口を開いた。

「翼、この後時間あるか？」
「？？はい、大丈夫ですが」
「ちょっと飲みに出ないか？」

翼は、天馬の言う通りに彼についていくことにした。

店を閉めた後、二人は天馬の行きつけのショットバーに場所を移していった。

「こうして、お前と二人で飲むのは初めてだな」
「はい」
「それにしても、今日の売上はよかったぞ！まさか、お前がここまでやってくれるとは思ってもみなかった」
「ありがとうございます」

すると天馬は、グラスの中の蒼く輝くカクテルを飲み干し、横にいる翼を強く見据える。

「翼、今から俺が言うことは、絶対誰にも言うな」
「はい」
翼が頷いたのを確認すると、天馬はひと呼吸おいて話を切り出し始めた。

「【**Unicornis**】が**……**つい何日か前に摘発された」
「何ですって？」
天馬の発言に、翼は驚きながら聞き返す。

「【**Unicornis**】って、確か社長が独立前に在籍してたお店ですよね？」
「そうだ。そこが、薬物絡みで警察のガサが入ったんだ」
「薬物絡み？」
「今話した【**Unicornis**】のこともそうだが、覚醒剤や大麻などの違法ドラッグで摘発されたホストクラブや風俗店があるのは、別に今に始まったことじゃない。法律や都知事が決めた条例や政策で減ってきてはいるものの、実際まだそれが続いているのが現状だ」
「そうだったんですか」
翼はそこで天馬と同じ蒼いカクテルを一つ口にした。
それと同時に、バーテンダーによって空になった天馬のグラスが再び同じカクテルで充たされる。
天馬は続けた。

「翼は歌舞伎町で働いて時間も浅いから知らなかったろうが、しかしまぁ**……**あれだけ薬物を厳重に禁止していたあの店が、まさかこんなことになるとはな。ショックだったぜ」
「その【**Unicornis**】も覚醒剤で？」
「いや」
天馬は再びカクテルを口にすると、さらに続けた。

「俺もつい最近知ったことなんだが**……**表ざたには覚醒剤になってはいるが、その摘発の原因になったのは一般に聞くそれらの類じゃないらしい。どんなものかは詳しくは知らないが、聞く限りそれらよりも相当タチの悪いモノだって話だ。信じられない話だが、今その薬とやらが歌舞伎町にも蔓延し始めているんだ。俺はその話を、【**Unicornis**】のオーナーから聞いた」

現実離れしたような信じられない話に、翼はカクテルグラスを手にしたまま絶句していた。
しかし天馬の話はそれだけでは終わらなかった。

「現在【**Unicornis**】は営業停止状態だ。俺も世話になった店だから何とかしてやりたいとこだが**……**」
そこで一旦天馬の言葉は途切れた。

「社長？」
翼が小さく声をかけると、天馬はため息をついて再び話し始めた。

「……俺は今日あの店のあるホストに電話で言われたんだ。『Pegasusのあるホストがその薬を流している』ってな」
「なっ……うちの店に？！」
「俺はそいつに怒った。ウチにそんな奴はいない……そう信じたいからな。だがー」

天馬は一本の煙草に火を燈した。

「もしそんな危ない"薬"がウチの店から出てるとなると、俺もお前たちの前で決断をせざるを得ない」
煙草を片手に冷静に口調を保つ天馬の表情は、俄かに苦渋に染まっていた。
翼には、それが痛いほど伝わってきた。

しかし、彼には一つ気になることがあった。

「社長、一つ聞いてもいいですか？」
「何だ？」
「その"薬"の名前とかどんなものとかって、わかりますか？」
「名前？そうだ確か……」
天馬は一瞬考え込むと、すぐに口を開いた。

「"St.Alice(セント・アリス)"だったか」
「！？？」
翼は思わず椅子を弾き飛ばしながら立ち上がった。

「おい…どうした、翼？？」
「セント・アリス……！」

翼はその名前を呟くと、ジャケットの内ポケットから、美空から受け取った一枚の手紙を取り出す。
「翼、それは？」
「今日店に来た、あの女の子から手渡されたものです」
「それが、どうかしたのか？」

「手話で彼女から聞いた話では……」

翼は息を呑んで再び続けた。

「彼女の母親は、その"St.Alice"の影響で重体になっているそうなんです…」
「何だと……！？」
「この手紙には、それについての詳しい秘密が書かれているそうです」

翼と天馬は、絶対にないくらいの緊張した面持ちでそれを凝視した。

「翼、頼みがあるんだ」
「はい」
「勝手を言ってはなんだが、俺にもそれを見せてはもらえないか？」
「社長」
「俺は許せないんだ……！【Unicornis】を摘発に追いやった"St.Alice"のことを。だから、俺もできる限りのことは知りたいんだ」

静かな怒りすら感じさせる天馬の真剣な眼差しに、翼は無言で頷いた。

そして、その"手紙"をゆっくり、ゆっくりと開封していった。

「これは！」

美空から渡された"St.Alice"の秘密が記された手紙ー

そこに書かれていたのは

読ンダ翼タチノ目ヲ疑ウ

恐ルベキ事実ダッター

第２１章へ

21-1

あれから天馬と別れ帰宅した翼は、ひとり煙草を片手に机の上のある一点を凝視していた。
その厳格な視線の先には、美空から渡された例の"手紙"が広げられた姿で置いてあった。

『……』

知ってしまった事実の重さに、翼はずっと口を開けないでいた。

約２時間前ー

ショットバーにて、翼は隣にいる天馬の目の前で"手紙"を広げた。
ゆっくり、ゆっくりと、何か恐ろしいものが潜んでいるパンドラの箱でも開けるかのように、"手紙"の折り目を一つ一つ解いていった。

「ゴクッ……」

息を呑む音が聞こえるほど、翼と天馬の間はひどく静けさに覆われていた。
他に客もいないせいか、バーテンダーは不思議な様子で二人を見つつも、何か事情あると思い干渉してくることはなかった。
二人には、そんな気遣いがどこかありがたかった。

そして、３回にわたり折り込まれたそれは、ついにＡ４サイズほどの一枚の"手紙"となって姿を現した。
「何が書いてあるんだ」
翼と天馬は、それを手に取り、細かい文字でぎっしり記されたその内容を黙読し始めた。

『**"**霊薬**"St.Alice**についての全貌』

◆１９９〇年８月ー

俺はついにつかんだ。
聖なる霊薬と言われ続けた**"St.Alice(**セント・アリス**)"**についての秘密。

世間の一部で蔓延していたこれは、何故"霊薬"と言われていたのか？
一体どこからきたのか？
一体誰が生み出したのか？一体誰が持ち込んだのか？
そして、一体どのようなものなのか？
俺はそれをついに突き止めた。

ふとどこからか涌いて出たかのように出現したこれが"霊薬"と言われてきた理由はー
これを作り出したのは、つい数ヶ月前に『消滅』と言われた、星母マザー・ミカエルをたたえる信教"星羽会"であることがわかった。

何故ここで星羽会なのか？
俺は疑問に思い、さらに星羽会をも調べ続けた。

わかったのは、**St.Alice**の名前の由来が、元・星羽会代表【アリス・クレイアード】というどこかの国の女性の名前によること。

St.Aliceを作り出したのは、幹部信徒であり科学者・アリスの実弟【ルペス・クレイアード】博士。

この姉弟が何の目的で**St.Alice**を作り出したのか。

そして星羽会全体の狙いは何だったのか。
ここから書くことは、公にはなっていない恐るべき事実だ。

翼と天馬は、さらに先を読み進んだ。

◆星羽会は滅ぶ前に何をしようとしていたのか。
彼らは知っての通り、マザー・ミカエルの名のもとに暮らす平穏主義の教団だった。
しかしそれは表の顔に過ぎない。

一般信徒は、一般市民のそれと何も変わらないが、一部の一般信徒と幹部以上の者だけは違った。
その違いは、**St.Alice**の製造から流通に携わっていた者達だ。

マザー・ミカエルという幻想の存在を盾に星羽会を創始したアリスとルペスの姉弟は、**St.Alice**を使用したある恐ろしい計画をたてていた。

その名を、
"Mother-Project(マザー・プロジェクト**)"**。

"母の元に帰す**"**と定めたこの計画は、まず**St.Alice**のことを語らなければならない。

まず**St.Alice**とは、聖なる霊薬とは全く関係ないものということだけは確かだ。。
それどころか、その存在自体があまりにも恐ろしく危険であるのだ。

その効果は以下の通りだ。

・精神に大きな影響を及ぼす。
・身体の一部に障害をもたらす。
・体内の免疫を破壊し、疫病の悪化を著しく進行させる。

そして、ある意味もっとも恐ろしいのが

・体内の細胞分裂を異常に早める。

以上が**St.Alice**の効果だ。
これには、服用した量や年齢・性別・その他個人により症状や進行なども異なる。
しかし、遅かれ早かれ摂取した者に待っているのは、確実な「死」だけだ。

星羽会の連中は、こんな霊薬とは名ばかりの凶悪な殺人兵器を作り出し、世に蔓延させようとしていた。

この**St.Alice**で、日本を中心に行く行くは世界を死にいたらしめるー
アリス・クレイアードは、それを企んでいたのだろう。
その真っ先に標的にされたのが、金や薬物の蔓延がある新宿の歌舞伎町だった。
その中でうってつけのカモにされたのが、ホストクラブだった。
もちろん、経営していた俺の店も例外なくやられた。
店のホストの中に信徒の生き残りがいたんだ。
星羽会にとって、ホストクラブや風俗店というのは、自らのリスクを抑えて薬を広めるのにうってつけの媒体となっていたかもしれん。

◆
俺は媒体にした奴を後日追い詰めた。
しかし、奴はさらなる別の手を打っていた。
俺の元常連客であることに目をつけたのか、恋人の楓の勤める店に行き、彼女に**St.Alice**をこっそり服用させたのだ。

何も知らないでそれを口にした楓は、今少しずつ**St.Alice**によって蝕まれている。
俺は怒った。

そんな自分の怒りと止められなかった怒りに堪えられなかった。

俺はそいつをやっとの思いで探した。
しかし、そいつは何者かによって殺されていた。
恐らく、他の信徒の口封じか何かだろう。

俺は楓に付き添った。
今の所何もないが、明らかに**St.Alice**を服用した彼女に待つのはー

これ以上考えたくない。
しかし、俺がそれ以上に恐れているのは、**St.Alice**が遺伝しないかということだ。
この時楓のお腹には、妊娠４ヶ月になる俺の子供が宿っていた。
楓でだけでなく、子供まで**…**そう考えただけで、俺は狂いそうだった。

このことを楓に言うべきか言わないべきか。
俺は散々迷った揚句、言わないことにした。
いや、言えなかった。
誰が好きこのんで、恋人や子供にあんな残酷な宣告ができるか。
しかし、いつかわかることー
それが俺には堪え難い苦痛だった。

◆
きっと俺達の子供も、何かしらの**"**障害**"**を持ってしまうかもしれない。
しかし生まれてくる命に罪なんてない。
それを大切にしなければならない。

男の子なら『陸』、女の子なら『美空』
どちらが生まれてくるにしても、子供の未来は大切にしたい。
とにかく、無事に生まれてきてほしい**……**それだけだった。

俺はホストを、楓はホステスを引退し、いつか二人の夢だった小料理の店を開く。
それが、限られた命の中でもー

ー神代 麗王ー

そこで手紙のメッセージは終わっていた。

「……」

「……」

翼と天馬は、しばらく何も言葉を発することはなかった。
ただ、手紙の主の意志をじっと考え続けていた。

「神代……麗王(レオ)」
天馬はポツリと呟いた。
「社長？この人」
「あぁ、俺と苗字が同じってことな。神代麗王って人は、１０年前に歌舞伎町にいたすごいカリスマホストの名前さ。俺はその人からあやかって、苗字に神代ってつけたんだ。まさか、その人がこんな手紙を残していたなんてな。しかもー」
「えぇ、あの美空ちゃんがその麗王さんの娘だったなんて……」
「きっと美空ちゃんは、母親から言われていたんだろうな。もしものときは、誰かにこれを渡せ

って」
「えぇ」
「しかし**……**この**"St.Alice"**ってのが、こんな恐ろしいものだったとはな」
天馬はそう言いながら手紙を手に取った。

「ん？」
天馬は何かに気がついた。

「社長、どうしたんですか？」
「翼、見ろ！まだ続きがあるぞ」

天馬が指さすところには、追伸と思われる文章が小さく書きなぐってあった。

追伸ー

重大なことを二つ挙げておく。

今や星羽会の**"**使徒**"**とも言われる人間は、全てアリスとルペス姉弟はじめ、幹部以上の人間とその家族だ。
その目印となるものを書いておく。

これらの目印を持つ人間は、すべて**"Mother-Element(**マザー・エレメント**)"**と呼ばれる紋章のようなものを身体の一部に人工的に植え付けられている。
個人によりそれは異なるが、それらは鎖やロープのようなもので絡められた一本の羽根のような形をしている。

階級や性別によりその色や形は違うらしい。

これを身体に刻み込んでいる人間には注意せよ。

そしてもう一つ

下に挙げる大手企業が、**St.Alice**の製造や流通に少なからず携わっている可能性がある。

①㈱アイル・コーポレーション
②㈱アサカワカンパニー
③㈱ＫＫ
④㈱ミュゼルバ
⑤㈱エレ・グローブ

これらの企業にも注意。
とにかく、**St.Alice**は膨大な金が動くと同時に人一人を簡単に殺すことのできる恐ろしいものだ。

これを、早く伝えてくれ。

手紙の内容は一文字残すことにく、完全に終わった。

「とんでもない内容だったな。まるで映画か何かの世界みたいだ**……**」
天馬はため息をつきながら呟いた。
しかし、そのすぐ脇にいる翼は何かにとりつかれたかのように微動だにしなかった。

「あの美空って女の子がしゃべれないわけは、この**"St.Alice"**にあったんだな。麗王さんはこれを伝えたくて。なぁ、翼」

「……」
「おい、翼、どうした？」
「えっ？あっ……」
「どうした、顔が蒼いぞ？」
「いえっ、ちょっと現実離れした話だったのでつい……」
「そうか。そうだな、俺も驚いた。しかし、こんなもんが何故うちの店から。まさか、やっぱり店にいるのか？！"アリスの子"ってやつが…」
「アリスの子？？」
「一部で噂になってる"St.Alice"を流してる人物の通称らしい。誰なんだ……そんなもんをうちで流してる奴は！」
「社長……」
翼には天馬の怒りに満ちた言葉は届いていたが、彼には答えることはできなかった。

『店に潜む星羽会の生き残り……"マザー・エレメント"……まさかあいつが……！』

翼は心の中で心あたりのあるその人物＝羽月のことを、ハッとしながら思い浮かべていた。

『いや、羽月がそんなことをするはずが…でも…』

翼の心の中は、信じようとする気持ちと同時に羽月に対する疑心暗鬼に襲われていた。
それと同時に、明らかになった美空の秘密と、マザー・エレメントの謎。
そして、掲示されたアサカワカンパニーの名前。

謎とされてきたあらゆる事実が一つになろうとし始めている現実に、翼はただ茫然となるしかなかった。

２時間後ー

翼は自宅のソファの上で悩むように考えていた。

『親父の会社、アサカワカンパニーがまさか**"St.Alice"**に関わっていたなんて**…**』

それが頭から離れなかった。
そして**……**

『㈱ＫＫ**…**』

翼の中でまた別の苦い思い出までが蘇り始めていた。
それを無理矢理揉み消すかのように、翼はおもむろに煙草を吸い始めた。

部屋に舞う煙のように、彼の頭の中はどんよりと曇っていった。

休日を挟んで二日後ー

翼は出勤の少し前に**"**楓**"**の前にいた。
美空と楓のその後を知るためである。
しかし、何度かインターフォンを鳴らしたものの、誰かが中から出てくることはなかった。

「恐らく病院か」

ケータイの番号やメールアドレスは教えたのだから、何かあれば連絡をくれるはずー
翼はそう信じて、その時は【**Pegasus**】に向かうことに決めた。

数分後ー

翼は【**Pegasus**】のビルに入ろうとしていた。
「ん？」

彼の斜め後ろから、近づいてくる人の気配に気付く。
すると、そこにはひょろっと長い身長・盛り込んだ金髪を目立たせている羽月の姿があった。
昨日のことがあって疑心暗鬼になっているものの、**"St.Alice"**の犯人がハッキリしないのもあり、
翼は普段通り接することにした。

「羽月、おはよう」
「えっ？あ**……**おはようさん」
翼がそう声をかけると、羽月は元気なく答える。

「どうした？昨日ヘルプついてくれたときもだけど、何か元気なくないか？」
「そ、そんなことあらへんよ」
羽月はよそよそしい態度で翼に答える。
「そうか」
翼はそんないつもと雰囲気の違う彼に対し、違和感を感じていた。

それから一緒にエレベーターに乗り込むも、いつも自分からうるさいほど積極的に話し掛ける羽月は、無口を通していた。

「羽月」
「**……**なんや？」
「なんかおかしいぞ、お前。いつもの元気がないし、よそよそしいっていうか」
「何でもないで」
「何でもないって、お前なんか変だー」
「何でもないってゆってるやん！」
翼の問い掛けに対し羽月がいらだちをぶつけるように返したのは、ちょうど【**Club Pegasus**】がある４Ｆへと到着した時だった。

「羽月**……**？」
「先行くで」

いつも明るく元気な羽月の突然の人の変わりように、翼は戸惑った。

『あいつ、一体どうしたんだ？』

翼は、ツカツカと店の中に一人歩いていく羽月の背中を、ただ見つめていた。

いつもと違う羽月**……**
それが彼の中では驚きと同時に、ある一つの疑心を一段と深めることとなった。

「今日も一日やるぞっ！！」
天馬は、いつもと変わらない凛とした態度で朝礼をしめた。
ホスト達が各自散らばっていく中、翼はひとり天馬のところへと近づいていった。

「社長」
「おぅ、この間はありがとうな」
「いえ。社長、あれから何か？」
「いや、特にはな」
「本当に、この店の中にいるんでしょうか？**"St.Alice"**を流してるやつが」
「信じたくないがな**……**。確信があるわけじゃあないが、俺はこの中にその星羽会の生き残りとやらがいるとは思えない。噂だけのデマだと思いたいぜ」
どこか切なそうな天馬の言葉に、翼はそれ以上何も言うことができなかった。

この溢れかえるような人数のホストの中に、**"**アリスの子**"**がいるー
【Club Pegasus】の名前を利用し、恐ろしい殺戮兵器のような薬を内部で隠れて売りさばくスパイのような人間がいるー
それは天馬はもちろん、翼にとっても信じがたいことだった。

「翼、とにかく何も確信できることがわからない今は事を荒立てない方がいい。犯人がいなければ一番それがいいが、中途半端に刺激したりしたら危ないかもしれない。至って俺達はいつも通りでいるんだ」
「はい、わかりました」

翼は天馬の言葉に頷くと、とにかく通常どおりの態度での仕事をするように努めた。

それからも、翼と天馬のさりげない店内での注意は続いた。

しかし、一日・三日・一週間と時間が刻々と過ぎても、店の中で何かが起きることはなく、

一部で起きていた**【Pegasus】**に対する悪い噂も、徐々に風化しようとしていた。

『俺の店を汚す奴は許さないが、何事もなければそれでいい』

厳しい眼で警戒する中でも、天馬の内心にはその気持ちが強くあった。

そして、一ヶ月近い時間が過ぎた。

６月ー

【**Club Pegasus**】では、全体ミーティングでの新しいランキングの発表が行われようとしていた。

「それではランキングの発表を始める！」
ホスト達全員が緊張感溢れる面持ちで、佐伯からの発表に澄ました耳を傾けていた。

「**No.5**、羽月！」

「**No.4**、光星！」

「**No.3**、由宇！」

ベスト５の３位までが発表された。
発表のたび感嘆と拍手が飛び交ったが、**No.3**として発表されたのが由宇とわかると、その場はすぐに静寂へと包まれていった。

「では発表を続ける」
佐伯が手元のノートを一枚めくると、すぐにその次の一言は切り出された。

「それでは、**No.2**は**……**」

誰かの唾を飲み込む音がはっきりと聞こえる中、その結果は発表された。

「**……**翔悟**……**！」

「えっ**……**？」

誰かがそう呟いたのがはっきり聞こえた。

感嘆も拍手も起こることなく、ただ静かな驚きだけがその場を賑わせていた。

「な、何だと**……**？」
翔悟は目をまるくしながら、ポカンと口を開けていた。

「翔悟さんが**No.2**？？嘘だろ**……**？？」

そんな驚きをよそに、ついに佐伯の口からその先の結果が発表されることになった。

「えー、今回の**No.1**は**……**」

佐伯は、軽くほほ笑みながらあるホストの方を向いて、口を開いた。

「翼、おめでとう！」

「えっ？」

翼は戸惑った。

「翼が**No.1**！？」
「まじで？？」
「てか、あの翔悟さんが負けたのか**……**？」

ホスト達のざわめきが起こる中、天馬は翼のもとへと歩み寄った。
「翼、ついにやったな！」
「社長、僕はー」
「何お前寝ぼけた顔してんだ！？今日からお前が、この店の**No.1**だ！！」
天馬は、そう言うと翼の背中をバシッと強く叩いた。

「俺が**……No.1**に**……**？？」
「そうだ」
茫然自失の翼のもとに、佐伯が声をかける。

「佐伯さん**……**」
「最初見たときは、こいつホストできるのかって思ったけど**……**。翼、本当によくやったな！」
佐伯は今まで見せたことのないような笑顔で、翼に手を差し出した。

「あ、ありがとうございます、佐伯さん」
翼はそれに応えるように、彼と握手を交わした。

「翼さん、やりましたね！」
「やったな翼、おめでとう！！お前すげぇよ！」
周囲のホスト達も現実を徐々に理解し始めたのか、彼らは次々と翼に歩み寄り祝いの言葉を投げかけていった。

自分が**No.1**になったー
実感はまだないものの、翼の中で何かが弾けたような気分が込み上げていった。

一方ではー

「俺が……翼に負けた……？そんな、そんなバカな……！」
どこかのネジが緩んだかのように、翔悟は力無く細々とつぶやいていた。

また一方ではー

「あの野郎が、俺より上だと……？しかも、翔悟さんまで抜いて**No.1**に……！？嘘だ……あいつが、あんな野郎がそんなわけ！」
光星は、怒りと悔しさが雑じった感情をじわじわと声にしていた。

「ついにやっちゃったね、翼くん」
横にいる羽月の肩をポンと叩きながら、由宇がつぶやく。

「そう、ですね……」
「何だよ羽月くん、仲良い友達が**No.1**になったってのに、嬉しくないのか？」
「いや、そんなんじゃないですぅ。翼くん、ホンマすごくなったわ……」
羽月は、穏やかな表情で祝われ喜んでいる翼を見つめた。
しかし、その瞳の奥にはどこか悲しげなものが潜んでいるなど、その時は誰も気付くことはなかった。

「とにかく**No.1**はお前だ！翼、新**No.1**としてこれからの【**Pegasus**】頼むぞ！」
天馬に促され、翼はスタッフ全員が注目する中で一人立ち上がった。

そして、

「こんなまだまだ未熟な俺ですが、よろしくお願いします！」

今までにないようなハキハキした口調で、翼はスタッフ全員に言った。

すると間もなく、盛大な拍手が新**No.1**となった彼を、暖かく賑やかに包み込んでいった。

数日後ー

新**No.1**となった翼は、その月初めて来店した愛菜への接客をしていた。

「あらためておめでとう翼☆」
「ありがとう。ホント愛菜のおかげだよ」
「うぅん、こっちこそ翼にはいろいろ助けてもらっちゃったしね！今日は飲もうね」
愛菜はとてもにこやかな笑顔を翼に見せる。
翼も**No.1**になって精神的な余裕がでてきたのか、今まで見せなかったような笑顔を彼女に返した。

「やだぁ」
「なに？」
「翼ってそんなにいいスマイルするのね」
「どうしたんだよ急に？」
「**……**何でもない☆」
愛菜は顔を少し赤らめながら、翼から目をそらした。
そんな彼女を見て、翼はフッと笑う。

「なによ」
「いや、愛菜もそんな風になるんだな～と思って」
「うるさいわねぇ、愛菜**"**も**"**って何よ！」

翼と愛菜は、ドリンクを片手に楽しそうにその場を過ごしていた。

「翼っ！」
佐伯が駆け寄ってきた。
「新規のお客様からのご指名だ。ちょっと外せるか？」
「はい。愛菜、ちょっとゴメン」
「はーい。なるべく早く帰ってきてね」

翼は愛菜とウインクを交わすと、席を外し指定のテーブルへと向かっていった。

「Ｃ卓のあそこのＯＬっぽい３名様のとこな」
「はい」
翼は佐伯の指示通り、すぐにそこへと向かった。

「いらっしゃいませ、翼です！ご指名ありがとうございます」
３人の前で頭を下げながら挨拶をすると、真ん中の女性がはしゃぎながら喜びの声を上げる。
「うわぁ～！さっすが**No.1**ホストさん、生の方がカッコイイ～！ねぇ、早くとなり来て」
「はい、では失礼しますー」

その時、翼は向かって左側の女性からの異常なほどの強い視線に気がついた。

じっと自分を見つめ続ける彼女の視線が何なのかと気付いたとき

翼の心の中は一瞬で凍り付いた。

『紗……恵……？』

翼(＝淺川一也)と紗恵

運命に引き裂かれた二人の

突然の再会だった。

第２２章へ

22-1

『紗恵……！』

翼はその一瞬だけ凍り付いたように動かなかった。
懐かしさを含んだ妙なまでの高鳴りが、彼の胸の中で波打っていく。

去年の８月の"あの時"を境に自分の前から一切姿を見せなくなった紗恵が、今自分の目の前に突然現れたのが信じられなかった。

それは紗恵も同じだったのかー

彼女も着飾り様変わりした彼の姿を、信じられないようなものを見るように瞳を大きくしていた。

「キャッ、本物の翼クンよぉ☆ねぇ、早く隣りにきてぇ！」
真ん中の女性客が嬉しそうに促すと、翼はハッとしたように我にかえった。

「あっ、はい！じゃあ、お隣り失礼しますね」
翼は真ん中のリーダー風の女性と紗恵の間に誘われ、座ることになった。
腰をおろす瞬間、どこか懐かしい匂いが互いの感覚を交差していた。

「あらためてはじめまして、翼です。あの、お名前伺ってもよろしいですか？」
翼は頭を切り替えるように話を切り出した。
すると、リーダー風の女性がニコニコしながら答える。

「私はヒトミ、こっちの後ろの子はミチ。で……」
ヒトミと名乗った彼女は、翼をはさんで反対隣りに座る紗恵に目をやった。

「そっちの子は"明奈"。よろしくね」
「よろしくお願いします。みなさん」
翼は三人に笑顔で挨拶をした。
しかし、その内心に訪れた焦りをすべて一気に払拭することはできなかった。

『明奈…？？』

翼はそう思いながら、さりげなく"明奈"の方を見た。
表情やしぐさ・何より自分への反応からして、彼女が紗恵なのは明らかだった。
しかし、何故ここでそのように名乗っているのか……
翼は少しずつではあるが、それに気付き始めていた。

「ねぇねぇ翼クン！」
ヒトミが口を開いた。
「はい？」
「翼クンて、ここの不動のNo.1を破って新しいNo.1なったんでしょう？すごいよねぇ」
「いえ、そんな」
「私、ホストでNo.1の人って、どんだけ高飛車なのかとか想像してたんだけど、翼クンはそんなとこ全然感じないもんね」
「いやぁ、応援してくれるお客さん方のおかげですよ。それには、とても恵まれてると思ってます」
翼がそう答えると、今度はミチが切り出した。

「そうゆう謙虚なところがいいんだよね！私、前に【Unicornis】ってとこでさ、前のNo.1だった翔悟って人指名したことあるんだけど、なんか俺は俺は〜ってナルシスト雰囲気強くてダメだったもん」
「そうだったんですか。じゃあ、今日は楽しんでって下さいね！みなさんお飲みものは？」
「そりゃ新No.1と飲むんだから"ドン"イクでしょ〜♪今日は飲もうね翼クン」
「わかりました！ありがとうございます」

翼は、その時偶然来たヘルプのホストにオーダーを告げた。

数分後ー

ドンペリが一度に２本運び込まれ、その場には大勢のホスト達による盛大なコールが巻き起こった。

２０人以上のホスト達から送られる圧巻のコールは、翼をはじめヒトミ達を類を見ないような激しい明るさが包んでいた。

「やっぱりホスクラは、これがたまんないわよねぇ！」
ヒトミとミチはホストクラブに慣れているのか、そんなに驚いた様子もなく笑って楽しんでいた。
しかし、一方の紗恵(明奈)は初めてなのか、驚いた様子でそれらを見上げていた。
それと同時に、隣りに座る変わり果てたかつての恋人の姿にもー
そんな彼女に気付いていたのか、どこと無く話し掛けるのをためらっていた翼は、コールが終わって静まり返ったタイミングを見て彼女に声をかけることにした。

「あのー」
そう言っただけで、紗恵はビクンと身体を反応させた。
「は……はい」
紗恵はぎこちなく小さな声で答える。

「明奈さん……は、こうゆうところは初めてなんですか？」
「え……えぇ……。まぁ、そうですけど……」
紗恵は、翼に目を合わさないように言った。
そんな他人行儀な彼女の姿が、彼にはまるで全くの別人を相手にしているかのような感覚を覚えさせる。
すると、そこにヒトミが口を挟む。

「あぁ翼クン、その子ねぇ、こーゆーとこ初めてってか遊び慣れてないみたいだから、今日半分無理矢理連れてきたのよ。いつも店で仕事したら、他の女の子と違ってすぐに家に帰っちゃうみたいだからさぁ」

『店？』

翼はそれを耳にすると同時に、彼女達の身なりやしぐさをそっと観察した。

ＯＬにしては人より明るい色の髪の毛に、新しく外出用に濃いめに塗られたメイク・そしてブランドのバッグや、ミニスカートなどの露出の多い服装。
そして、いきなりのドンペリオーダー。
翼には、彼女らがＯＬや昼のサービス業の人間にはどうしても思えなかった。

そして、今自分の横で座っている紗恵も、以前の彼女とは違っていることは明白だった。
以前は一切着用しなかったミニスカート・パーマのかかった髪型・シャープな目元を演出するメイク。
どれをとっても、それは以前の紗恵の優しい面影と一致するものではなかった。

『紗恵、まさか**……**！？』

翼の中に一つの驚きが芽生え始めていた。

「しかしやっぱり【**Pegasus**】は新しいしいいわよねぇ。てか、【**Unicornis**】は今摘発になっちゃったしぃ」
ヒトミはポソリと呟いた。
「えっ？」
翼は思わず反応した。
「【**Unicornis**】って**…**ヒトミさんも、いったことあるんですか？」
「あるわよぉ。なんせ、けっこうな有名店だし、ここの社長の天馬さんも前はいたんだもんね。まぁ、私はそこの聖**(**ヒジリ**)**ってホストを指名してたんだけどさぁ。あんなことになっちゃってさ**……**ねぇ？」
翼の質問に、ヒトミはふすくれた顔で答える。

「あのー」
そう聞き返そうとしたとき、ヘルプのホストが翼を呼んだ。
「翼さん、そろそろ引きです」
「あ、そうか。すみません、ちょっと呼ばれちゃって」
翼がそう言うと、ヒトミとミチは「えぇ～？」と揃って声を上げる。

「すみません、なるべくすぐに戻ってきます」
翼は笑ってそう言うと、ヒトミ達は口を尖らせながら頬を膨らませた。

「ま、**No.1**なんだからしょうがないっか。あ、すぐにまたドンペリ入れるから、そしたら戻ってきてね。翼クン何か癒される」
「ありがとう！」
翼は自分のグラスの上に自分の名刺をスッと置くと、その場から急いで出ていった。

「**……**」
紗恵は、その置かれた名刺とを見比べながら、去っていく翼の後ろ姿を見つめていた。

『一也**……**。ここでホストやってたなんて**……**』

紗恵は瞳を潤ませながら、心の中でそうつぶやいていた。

一方席を離れた翼は、自分の前に突然現れた紗恵のことが頭から離れずにいた。

『紗恵のやつ**…**まさかホントに**…**』

そんな心境を何とか裏に隠しながら、翼は次の席の接客に急いでいった。

「お疲れ様っしたぁ！！」

【**Club Pegasus**】は、今日の営業を無事に終えた。
"St.Alice"が【**Pegasus**】から流れたというまことしやかな一部の噂も風化しつつある中、盛況を戻していたことに、天馬も心を撫で下ろしていた。

「翼」
天馬が翼に話し掛ける。
「社長」
「お疲れ。今日もよくやったな」
「ありがとうございます**……**」
「どうした？せっかくの**No.1**になったってのに浮かない顔をして」
「あ、いえ。ちょっと疲れただけです」
「そうか。まぁ話は変わるが、あの**"St.Alice"**の噂が一部で出た中これだけ盛り上がったが、恐らく【**Unicornis**】の摘発による営業停止が原因だろうな。今日、やたら新規の客が多かっただろう」
「えぇ、俺のところにも新規のお客さんいましたね」
翼は紗恵を含めた三人のことを思い出していた。

「まぁ、【**Unicornis**】には前に俺や翔悟達もいたから、その繋がりで来てくれたのかもな。とにかく、このまま何もないことを祈るぜ。なぁ翼、お前もこんな目まぐるしい状況で**No.1**になっちまったが、よろしく頼むぞ」
「はい！」
「これから、愛菜とアフターか？」
「えぇ、まぁ」
「まぁ、うるさくは言わないがプロである以上、体調管理にだけは気を配れよ」

天馬はそう言うと、翼の肩をポンと叩き事務所の方へと去っていった。

「さてと」
翼はそのまま店を出るために、エントランスへと歩いていった。
そして、離れた陰から光星がその様子を見つめていた。
その横には、押し黙る羽月の姿もあった。

「ちっ……クソ生意気にNo.1風ふかしやがってよ。なぁ、羽月？」
「……えっ？」
「えっ、じゃねーよ。あの野郎、今日もあの女とアフターだってよ」
「そうみたいやな……」
羽月がそうつぶやくと、光星は高い彼の肩にガシッと腕を組んだ。
羽月の身体が軽くビクリと反応する。

「こ、光星さん？」
そんな羽月の表情を見て、光星は鋭い目付きでニヤリと笑う。
「お前、あの愛菜って女のこと好きなんだよなぁ？」
「えっ？そ、そんなことあらへん」
「ごまかすなよ羽月。お前のあの女を見る目、ありゃ一人の客を見る目じゃねぇよなぁ？」
「そ、そんな。それは間違いやで」
「なぁ羽月……ちょっと耳貸せや」
羽月の言葉もよそに、光星は彼に耳打ちをし始めた。

「……」

「……何やて……！？」
羽月は思わず声を上げる。

「バカ、声がでけぇんだよ。要するにだ、お前が一つそうすりゃ翼の野郎は終わりってことだ。わかるよな？」
光星は低い声色を効かせ羽月に言った。
しかし、それを聞いた彼の瞳は、泳ぎながらも険しい色を放っていた。

「そんな……そんなこと、できるわけないやん！」
「できるできないじゃねーんだよ、なぁ？」
光星は、羽月の肩に組んだ腕の力をグッと強めた。

「光星さん、俺にとっては翼くんも愛菜さんも大事な人や。だから、そうゆうことは……」
「ほぉ、まぁいいんだぜ。言うこと聞かないなら、"あのこと"をばらしてもよ？そうしたらお前はもう店には……いや、歌舞伎町にはいられないぜ？お前の正体があのー」

光星がそう言いかけた瞬間、羽月は目を大きく見開いて彼にしがみついた。

「光星さん、それは……！」
「俺の言うこと、聞くか？」
光星がニヤリとしながら詰め寄ると、羽月は苦渋の表情を浮かべながらその首を縦に振った。

『俺は……俺は……』

血の涙を呑むような、羽月は苦しすぎるまでの決断を自らに下そうとしていた。

ー方ー

ビルをおりた翼は、下で待っていた愛菜と落ち合っていた。

「愛菜、待たせてゴメン」
「うぅん、ちょうどそこのカフェでお茶してたから」
二人はデートで落ち合うカップルのように手を繋いだ。

「いこっか」
「うん、私お腹減っちゃった」
二人がその場から移動しようとしたその時だった。

「一也っ……！」
翼たちの背後から、一人のある女性が力無い声で叫んだ。
それと同時に翼と愛菜は立ち止まる。

「……」
翼の胸の中で、ドクンドクンと高鳴りが始まる。
後ろを振り返る愛菜の視線の先には、切なそうな表情で自分たちを向いている紗恵が立ちすくんでいた。

「？だれだろあの人？翼のこと見てるけど」
「……人違いだろう」
彼女を不思議に思う愛菜に対し、翼は小さな声でつぶやいた。

「行こう、愛菜」
翼がそう言って愛菜の手を引こうとすると、紗恵は再びその口を開き続けた。

「一也……一也なんでしょ？まさか新宿でホストやっていたなんて。あのね、あたしー」
「人違いではないですか？"明奈"さん。俺は"翼"です。残念ながら、俺は"その人"ではありません。失礼します」
翼は自分を呼び止める紗恵を振り切るかのように、愛菜の腕をとってその場から歩き去った。

「一也……あんなに変わってしまって……ごめんなさい……。あたし……」
紗恵はそこに崩れながら、力無く泣き崩れた。
彼がホストとなり自分の知らない女性と手を繋いでいる光景が、今の彼女には胸の内にえぐるような痛みを与えていた。

22-2

「ねぇ、翼」
「なに？」
「いいの？さっきの女の子、なんか翼のこと言ってたみたいだけど。お店でちょっと見かけたけど、あの人今日お客さんで来てたよね？」
「さぁ。俺だって今日初めて会ったさ。かなり飲んでたし、きっと酔った上での人違いなんだろ」
「でも、さっき"一也"ってー」
「さぁっ、行こうぜ！」
「ちょっと、翼ぁ」
翼はどこかごまかすかのように、愛菜の手を半ば強引に引いていった。

数分後ー

翼と愛菜は、"楓"の前へと到着した。
すると、柴犬のチョコが尻尾を振りながら二人を迎える。

「ようチョコ。美空ちゃんはいるか？」
翼がチョコの頭を撫でていると、店の引き戸が突然強い音をたてて開いた。
翼と愛菜・チョコは、それにすぐに反応する。

「なんだ？」
すると、"楓"の店の中から一人の酔っ払ったサラリーマン風の男が出てきた。

「ったくよぉ～！こんなガキンチョがいたってよぉ、ママがいなきゃしょーがねーんだよぉ！ったく、こんなんでサラリーマンが飲めるかぁ！」
酔っ払っている男はフラフラになりながら、独り言のように喚いている。
そこに、慌てた顔をした美空がでてきた。
すると、彼女は"お会計してください"と書いた紙を男に必死で提示していた。
すると男は、その真っ赤になった顔を引き攣らせ、目の前にいる美空を突き飛ばした。
彼女が無言で地面に倒れたのを見ると、男はニヤニヤしながら近寄った。

「お嬢ちゃん、おじさんたちをなめちゃだめだよぉ～。ちゃんと声を出してハッキリ言わないと……ねぇ。じゃないとお金払ってあげないよ～んっと！」

「ちょっ、何よあいつ！翼……あれっ？」
愛菜が男に対し怒りを示していたとき、すでに彼女のそばにいるはずの翼はいなかった。
気付いたときには、翼は男の腕をねじ曲げて組み伏せていた。

「イテテテテっ！おい、何すんだこのホスト野郎！！」
「何してんだはこっちのセリフだ。お前、この女の子に何をしてた？」
翼が鋭い目付きで睨み据えると、男は一瞬にして萎縮した。

「いやっ、俺はそのよ……ちょっと酔っ払っちまったから……だいたい、この女しゃべらねぇし何のおもしろいサービスもしやがらねぇからよぉ」
「それで無銭飲食か？だったらそうゆうサービスの店に行けばいいだろう！それに、この子は言葉が話せないのに必死で一人で店やってんだ。お前みたいなむさ苦しいクソリーマンがふざけたこと言うな！」
翼は大声でそう言い放つと、男を強く突き飛ばした。

「うがっ！このホストごときが……」
「おぅ、なんなら店来るか？いつでも話し相手になってやるよ」
「うっ……くっ、くそっ！」
男は千円札３枚を地面に置き捨てると、フラフラな足取りでそこからいなくなった。
「ったく」
翼は男を睨みながら軽いため息をつく。

「美空ちゃん！大丈夫？」
愛菜が倒れているところを抱き起こすと、美空は震えながら何度もうなずいた。
「サイテーなオヤジね！言葉が話せないとかエロいサービスが無いからお会計しないなんて！」
「まったくだな。美空ちゃん、怪我はないか？」
翼が声をかけると、美空は二人に「ありがとう」と手話をした。

「ありがとう、かな」
愛菜はそうつぶやいた。
「愛菜、今の手話わかったの？」
「何となくね、一緒にいるうちにちょっと覚えたの」
それを聞いてか、美空は笑顔を取り戻して、ペコリと頭を下げる。

「さっ、何か食べよ。私お腹空いちゃって。って、翼どうしたの？」
「あ、さっきのオヤジ、慌ててたのか社員証みたいなの落としてったみたいでさ」
手にとった社員証をのぞいてみると、翼の目は再び鋭くなった。

「……こいつ……」
「翼、さっきからどうしたの？」
「いや、何でもない。後で警察にでも届けとくよ、コレ」
翼はそう言って、社員証を胸ポケットへとしまい込んだ。

翼と愛菜は、"楓"の店内に入りカウンター席へと腰をおろした。

「美空ちゃん、大丈夫？」
愛菜がカウンターごしにそうたずねると、美空はゆっくりとうなずいた。

「しかし、酔ってたとはいえ言葉が話せないことを罵るなんて、人としてサイテーよね！」
「あぁ。でも間一髪逃げられないでよかったよ」
愛菜と翼がそう言うと、美空はカウンターごしにおしぼりを手渡そうとしたその時だった。
翼たちの視界から、フッと美空の姿が消えるとともに「ガタン」という鈍い音が鳴り響く。

「……美空ちゃん？」
翼は不思議に思い、立ち上がってカウンターごしの厨房を覗き込んだ。
すると、そこには弱々しく息を切らせながら倒れている美空の姿があった。

「美空ちゃん！」
翼は慌てふためきながら、厨房に入っていった。

約２時間後ー

布団の中で目を覚ました美空は、見慣れた部屋の天井を見上げていた。
「……？」

「美空ちゃん、気がついたか？」
彼女の目の前には翼と愛菜の姿があった。

「大丈夫？会ったときから何となく顔色優れないとは思ってたけど……。悪いと思ったけど、おうちに上がらせてもらったよ」
愛菜がそうたずねると、美空はゆっくりと手を宙に浮かべた。

『スミマセン。セッカク来テイタダイタノニ迷惑ヲカケテシマイマシテ……』
「翼、何て？」
「迷惑かけてすみませんって。そんなことないよ、美空ちゃんがそんな気を遣う必要なんてないよ。それに……」
翼は、横を振り返る。
そこには、美空の母・楓の優しい笑顔の遺影が飾ってあった。

「お母さん亡くなって、一人でずっとやってきたんだろ？疲れたんだよきっと」
『デモ、オ店ガ……』
「さっき俺が閉店の表示にしてきた。今日はもう心配せずに、ゆっくり休んで…。なっ？」
翼が美空の頭を撫でながらそう言うと、美空は瞳にいっぱいの涙を浮かべた。

張り詰めていたものがスッと切れたのか、

美空は起き上がり、翼の肩に抱き着いた。

「美空ちゃん……」

声にならない小さすぎる泣き声を漏らしながら、美空は翼の肩で泣き崩れた。

「ヒッ……ヒック」としか言わない彼女の口から漏れる僅かな泣き声と弱々しく握る手の力が、彼女が母を亡くしてからのこのしばらくの間どれほど気を張り詰めていたかが、翼には痛いほど伝わってきていた。

「美空ちゃん大丈夫、大丈夫だから……」
翼は、泣きじゃくる美空の頭をポンポンと優しく宥めた。

『翼……』

そんな翼と美空の姿を、横にいる愛菜はただじっと見つめていた。

「翼……私、先に行くね」
「えっ、どうしたんだ？」
「今は美空ちゃんとても辛いんだから、今だけは美空ちゃんのそばについていてあげて？」
「愛菜」
「No.1ホストでしょ？店じゃないけど本当に困ってる女の子は助けてあげて。私からのお願い」
意外なほどの愛菜の冷静な言葉に、翼はコクリとうなずいた。

「じゃあ私行くから。あっ、美空ちゃん」
『……？』
「元気になったら、また美味しい煮付けつくってね☆」
愛菜がウインクしながら言うと、美空はその泣いた顔をゆっくりと笑顔にしていった。
愛菜もそれを見ると、笑顔で「じゃあね」と言い残してその場を後にした。

『愛菜、ごめんな。それとありがとう』

翼は心の中でそう囁いた。

「しょうがない、しょうがないよね……」
帰りがけ、愛菜は一人何かを自分に言い聞かせるようにそうつぶやいていた。

「でも……」
愛菜はぷくっと頬を膨らませた。

「翼の、ばか……」
愛菜はそう言って、夜の更けた街中を歩いていこうとしていた。

「うんっ？」

その時、ひとり歩いていた愛菜は、誰もいないはずの周囲に自分をつけてきているような人の気配を不気味なほど感じていた。

『だれかが、私についてきてる……？？』

「そこにいるのはだれっ！？」

愛菜は必死で声を上げた。

その夜に起こった出来事が、

狂イキッタ運命ノ結末ヘノ引キ金トナッタ。

第２３章へ

つづきはコチラ

lost wing～傷ついた愛の羽根～**(Ⅲ)**

⇒**http://p.booklog.jp/book/52539**

lost wing～傷ついた愛の羽根～(II)

http://p.booklog.jp/book/51983

続きはこちら
⇒⇒http://p.booklog.jp/book/52539

著者：Ｋａｉ
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kaiweblg/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/51983

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/51983

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ